

ソードアート・オンライン
—sight another
—

紫光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SAOにダイブした一人の少年、アキヤこと秋路晁夜（あきみち こうや）。

彼とその周りのキャラが織り成す、ソードアート・オンライン別視点の物語――

オリ主のSAO物です。

作者はこれが初投稿となります。オリジナルの話を交えながら、自分なりに書いていきたいと思っております。

意見や感想などあれば気軽に、ぜひ感想の方までお願いします。

目次

1章：Sword Art Online

e

1話『始まりの日』	1
2話『攻略会議』	9
3話『ボス戦前日』	19
4話『コボルドの王』	29
5話『ビーターは…』	39
6話『罪と記憶』	46
7話『赤髪の侍』	56
8話『夜、少しの話を』	63
9話『背教者と友人』	71
10話『仇討ち』	79

11話『2つ名』	87
12話『圏内』	95
13話『捜査開始』	103
14話『情報収集』	111
15話『第二の事件』	128
16話『狂気の殺意』	139
17話『鍛冶屋』	151
18話『新しい剣』	160
19話『馴染みの顔ぶれ』	167
20話『悪魔と振るう剣』	176
21話『二人目のユニークスキル』	187
22話『激突、違和感』	195

23話	『二人のために』	202
24話	『朝露の少女』	208
25話	『75層ボス』	217
26話	【最強の正体】	226

1章：Sword Art Online

1話『始まりの日』

2022年11月6日、初のVRMMOと呼ばれるゲームがサービスを開始した。名をソードアート・オンライン。1万人という人を仮想世界の巨城、〈アインクラッド〉へと招き入れたそのゲームは、製作者：茅場晶彦という天才の手によって、ログアウト不可能。HP全損⇨現実世界における死、というデスゲームへと変化した。

戸惑い、嘆き、怒り。そんな人々の感情がひしめき合う〈はじまりの街〉の広場からさっさと抜け出した俺は、走っていた。〈圏内〉を抜け、死と隣り合わせの世界へ。

俺：プレイヤーネーム〈ヘアキヤ〉がSAOにダイブしたのは、母親からのプレゼントとしてナーヴギアを貰ったからだ。ゲーマーとして俺は歓喜した。ベータテストにも幸運に恵まれ当選し、日夜ゲームに励んだ。

もちろん、その知識を披露して、初心者を導くことも可能だが、まずは俺自身が強くないと意味がないと考えた。この先のホルンカという村のクエストで片手剣を手に入れ、レベリングをして。先陣を切る。

「…無理せず付いてきてくれればいいんだけどな…そのためには俺が強くならなきゃ

な」

ニュービーがどれだけ生き残ってくれるか。MMORPGとしてボスに挑むには人数も必要だ。そのために、序盤の危険な橋くらい渡ってやろう。そして情報屋辺りに情報を渡せば、死亡者は増え続けるということは無くなると信じて。

それが、ベータテスターとして俺が進むべき道だと決めた。決意を胸に、ホルンカへ走る足に力を入れた。

ホルンカの〈森の秘薬〉クエストで〈アニールブレイド〉という片手剣を手に入れ、背中に装備すると、入り口で一人の少年と会った。背は俺とほぼ同じだが、痩せ身で女の子っぽい顔をしている。

「…あんたもβテスターか」

俺が声をかけると、少年は一瞬ビクリと足を止めた。この早期からホルンカのこのクエストを受けに来るのは余程運が良くなければβテスターだと推察できる。

「ああ。あんたもそうだろう？もう終わったのか…」

「まあな。〈花つき〉の確率自体は変わってねえみたいだし、根気よくやるんだな。安全第一でな。」

それだけ言うと、俺は再び歩き出そうとする。しかし、その足を止めたのは、少年の

声だった。

「…なあ、一緒にやらないか？レベリングにもなるだろうし。二度手間になるのは否定しないけど…」

「…まあ、いいだろう。勝手に死なれても目覚めが悪いしな。このクエストだけ、一緒にやってやるよ。俺が〈花つき〉を見つけたらお前にやる。」

決まりだな、と言つて少年が名乗り、俺も名乗ると、二人は共に不敵な笑みを浮かべた。

「…なるほどね、確かβテストでも片手剣使いだつたな…キリト」

「ああ。お前とはまた組んで見たかつたんだよ…アキヤ」

βテストで三日目。俺はとあるアバターに声をかけられ、パーティーを組んだ。名前は〈Kirito〉。βテストで徐々に頭角を現していく彼と組んだ時は、戦闘がかなり楽になったのは覚えている。そんな彼とは、ベータテスト最終日まで、前線を共に走り抜ける良きライバルだった。

そんな再会からおよそ20分。二人で20匹余りの〈ヘリトルネメント〉を狩るが、未だ〈花つき〉は姿を見せない。キリトがちらりとこつちを見て聞いてきた。

「出ないな…アキヤは何分くらいかかった？」

「俺は40分くらいかな…βでこの辺は大分狩ってたからそこまで苦戦はしないけど、運も関係してくるからな…」

21、22体目となるネペントをキリトと同時に葬ると、ファンファーレが響いた。同時に、キリトと俺の体が金色のライトエフェクトに包まれる。

パーティーを組んでいないのは、このクエストが一人用であるのと、キリトが一瞬の躊躇いを見せたからであった。俺もそこまでパーティープレイが得意なわけじゃないので、別々のソロとして、俺はキリトの手伝いをしている。

「おめでどう、キリト」

「ああ、アキヤこそ。」

二人でレベルアップを讃えながら、ステータスポイントを割り振る。少しだけ敏捷寄りの、バランスタイプを目指して振ると。

「…誰だ？」

〈索敵〉システムに1つの反応。モンスターではないな、と思い振り向くと、一人の少年が立っていた。キリトは一瞬ビクリとしていた。

「ご、ごめん。驚かせたかな。…レベルアップおめでどう」

真面目そうな少年は片手剣にバックラーというセオリー通りの片手剣使いのようで、

〈コペル〉と名乗った。見たところ彼もバータテスターか。

「せっかくだから、クエ、協力してやらない？ 君は…終わってるんだね、彼を手伝ってるのかな？」

俺の装備しているアニールブレードを見て言ったのか、コペルの問いに、俺は頷きも首を振りもしなかった。

「いや、俺はレベリングしてるだけだよ。まあ、花つきはこいつに押し付けるから手伝ってるとも言えるのかな」

「えーと、コペル、だったよな。俺は…キリト。こっちはアキヤ。まあ胚珠を2つ出すまでなら…」

それで構わない、というコペルと共に狩りを再開し、3桁はとうに登っただろう、と思ったその時。キリトとコペルがとある方向を見ていた。そちらに目を向けると、ゴツゴツとした青いポリゴンが積み重なり、モンスターが湧出する前兆が見てとれた。3人で眺めること数秒。ネペントはその全貌を漸く現した。頭上に花をつけたネペント：〈花つき〉が。

それと同時に、俺たちを挟むようにしてネペントが2体湧出した。全員で〈花つき〉に行ってもいいが、音に気付かれて背後を取られるのは危険か。そう考えた俺は、キリトとコペルに小さく声を出した。

「……こっちは受け持つから、行ってこいよ」

それだけ言うのと、地を蹴り、2体の気を引く。相手の鳶を軽々と避け、ソードスキル〈スラント〉で一匹を葬る。硬直が解けると、続けて〈ホリゾンタル〉でもう一匹も葬る。

「……さて、キリトたちは……」

振り向こうとしたその時。パアーン！という破裂音が響き、体に仮想の冷や汗が走った。直後、辺りにカラーカーソルが続々と現れる。キリト達の方を見ると、キリトが果然と立っているのが見えた。

今の音は、リトルネペントの中でも、〈実つき〉と呼ばれるモンスターへの〈実〉を割ったときの音だろう。〈実〉を割ると、凄まじい臭いが立ち込め、辺りのネペントを呼び寄せる。βテストでもうっかり割ったパーティーがいたらしいが、その結果は、全員が死亡し、はじまりの街に死に戻りしたと記憶している。

「……コペルが割ったのか。そうすると……」

MPK、という言葉が頭をよぎる。モンスターを他人に擦り付け、レアアイテム……この場合は〈胚珠〉を奪おうとしたのか、俺の剣を奪おうとしたのか。

「何にせよ、この状況の打破が先だな。……さて、やってやるか。まだ死ぬわけにはいかねえんだよ。茅場の顔面に一発でも入れてやりたいんでな」

剣を握り、ネペントの群れへ突っ込んだ。

何分経ったかは定かではない。目の前に現れたネペントをひたすらに斬って、斬って、斬った。数にしても数える余裕などなし。視界からネペントを葬り去ると、後ろに近づく影があった。

「…キリト」

HPはレッドゾーン間近で、顔は暗い。俺としては生きている方が不思議なほどだった。彼の武器はいっ折れてもおかしくなかっただろう。

「コペルは…死んだよ。リトルネペントは〈隠蔽〉の効果が無いって知らなかったんだな」

キリトの声は淡々と紡がれ、俺はその声に、労いをかけることは出来なかった。

「そうか。…じゃあ、俺たちの協力もここで終わりだな。〈胚珠〉、手に入れたんだろ？」

「…ああ。ここに。そういう約束だったもんな…またな」

剣を背中に収めた俺は、ホルンカからその先へ歩き、キリトはクエスト完了を伝えるため村へ。少しだけ二人の距離が開く。俺は振り返り、一時間半ほど力を合わせた人物の名前を呼ぶ。

「キリト」

目の前の少年が振り返ると、俺はアイテムから1つポーションを取って、キリトに放

る。

「…また、何かあつたら組もうぜ。」

それだけ告げて、再び歩き出す。今日で次の村まで行けるだろうか。後ろの少年は必ず追い付いてくるだろう。もう一度、組む日があれば、今度はちゃんとパーティーでも組むか、と考え、俺は足を再び速めることにした。

2話 『攻略会議』

「よう」

目の前を歩いていった人物に声をかけると、フードを被った人物はゆっくりと振り向いた。3本の書かれた髭が特徴的な女性：〈鼠のアルゴ〉。アイコンクラッド初の〈情報屋〉でもある。

「よオ、アツキー。何か欲しい情報でもあるのか？」

「あいにく逆だ。情報の提供だよ。頼まれてたもんだ」

アルゴに何枚かの紙を渡すと、受け取ったアルゴはニヤハハと猫のような笑い声を出した。

「ありがとヨ。ちよつと敵の攻撃パターンとかはオレっちだけじゃきつくてネ。」

「こんくらいならやってやるよ。そこまできつい内容じゃなければな。」

頼まれていたのは敵モンスターの攻撃パターンの調査など。敏捷性ほぼ全振りのアルゴでは耐久力に不安があるのだろう。彼女は早々に俺がβテスターだと確信し、情報屋と攻略プレイヤーとして互いに情報を買ったりしている。とは言っても俺は殆ど情報は買っていないが。

毎度、というアルゴとの話に区切りを付けると、現在時刻を確認する。まだ四時まで時間はありそうだ。

「…その様子だとやっぱり会議には出るみたいだな」

「そうじゃなきゃわざわざ迷宮区からこの時間に戻つても来ねえよ。まあもうレベル上げもかなりきついんだけどな…会議、どこでやるんだっけな…」

現在のレベルは15。この段階では恐らくトップクラスだろう。俺一人だけ上がつても一人でボスに挑む気もないのだが、状況が状況だから上げといて損ということも無い。俺の様子を見て、アルゴは1つため息を付いてからボソリと言った。

「…同じテスターのよしみでタダで教えてやるヨ。へツールバーナの噴水で四時からダ。」

「サンキュ。今度は何か情報買いに来る」

アルゴに別れを告げ、俺はへツールバーナへと足を向けた。

約40人が集まっているツールバーナの噴水に着くと、辺りを見渡す。人数は少ない方だろう。勝てるかどうかは微妙…としか答えられない。石段をひよいひよいと降りると、大柄な色黒の男の横が空いていた。

「隣、いいか？」

「ああ。」

低いバリトンの声が答えると、隣に腰かける。会議までは約5分程あり、何をしようか、と考えながらメニューを開いてあれやこれやと操作した時、隣から再び太いバリトンの声が飛んできた。

「お前さん、その慣れようにさっきの身のこなし…もしかしたらだが…βテスターだろ？」

その声に一瞬固まった。確かに他よりステータスは高いだろう。ビギナーが俺よりレベルが高い、ということはあまり現実味を持たない。俺はこのデスゲームが始まった日から欠かさずと言ってレベリングは行ってきたのだ。

ゆっくりと隣の顔を見る。しかし、隣の大柄な男はどちらかと言えばそのインパクト満載な顔に笑みを浮かべていた。俺は男に答えた。

「…まあな。ニュービーを見捨てたつて罵られても文句は言えない立場なのは分かってる。」

実際その通りなのだから、どんな糾弾を受けても、致し方無いだろう。俺が右も左も分からないニュービーを見捨てて一路ホルンカに向かったのはどんなに理屈を立てても結果としては自身強化のためでしかないのだから。

「なに、別に俺はβテスター全員を罵ろうとは思ってない。実際こう言った攻略本に情

報を出してるのはβテスターなんだろうし、全てが全て悪いわけじゃないだろう」

そう言った男が持っているのは、〈鼠〉印の攻略本。確か無料で販売するとかアルゴは言ってたか。俺が黙っていると、目の前の大柄な男は太い笑みを浮かべた。

「あんただって、こうして話してみれば普通に話せるやつだ。俺はエギル。もし何かあつたら力になるぜ？」

「…アキヤだ。エギル、ね。覚えとくぜ。」

それでいい、と言わんばかりにエギルは前を向いた。どうやら会議が始まるらしく、目の前の噴水に青髪の片手剣装備の男が飛び乗り、パン、パンと手を叩いた。

「はーい！それじゃ、5分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます！みんな、もうちよつと前に…あと三歩くらいこつち来ようか！」

顔立ちが整った、まるで〈アバター〉なんじゃないかと疑いたくなる男だ。隣のエギルもある意味、アバターのような見た目をしているが。

「今日はオレの呼び掛けに応じてくれてありがとう！知ってる人もいると思うけど、改めて自己紹介しとくな！オレは〈ディアベル〉、職業は…気持ち的に〈ナイト〉やってます！」

近くから笑いが起こる。話し方といい、リーダーとしては元々向いているのか、ロールプレイが得意なのか。もしSAOに職業があつたなら、〈ナイト〉も似合いそうだ。

いずれにせよ、このディアベルがリーダーという点は間違いないだろう。

「さて、こうして最前線で活動してる、言わばトッププレイヤーのみんなに集まってもらった理由は言わずもがなだと思うけど：今日、オレたちのパーティーが、あの搭の最上階へ続く階段を発見した。つまり、明日か、遅くとも明後日には、ついに辿り着くつてことだ。第一層の…ボス部屋に！」

周囲からどよめきが聞こえる。俺が潜っていたのは主に20階ある内の17階辺りなので、そこまで進んでいたとは驚きだ。20階まで行ったことがないわけではないが、俺一人が到着しても意味はない。少なくともボス攻略のレイドが組めるほどの戦力が無ければ。

「二ヶ月…ここまでかかったけど、それでもオレたちは示さなきゃならない。ボスを倒し、このデスゲームもいつかクリア出来るって、はじまりの街で待つてるみんなに伝えなきゃならない。それがトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ、みんな！」

ディアベルのその声に、辺りから喝采。見事なリーダーシップには俺も拍手を送りたいほどだ。実際拍手している者もいる。しかし、その喝采も、ピタリと止まった。

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

その声の方向を向くと、茶色の髪をサボテンのように尖らせた、片手剣使いが前に出てきた。

「そん前に、こいつだけは言わしてもらわんと、仲間ごっこはでけへんな」

ディアベルは突然の乱入者に、余裕の表情を浮かべて声を出した。

「こいつっていうのは何かな？まあ何にせよ、意見は大歓迎さ。でも、発言するなら一応名乗って貰いたいな。」

「フン、わいはへキバオウってもんや。こん中に五人か十人、ワビ入れなあかん奴らがおるはずや」

「詫び？誰にだい？」

何ともへ騎士らしく振る舞いで訪ねたディアベルの問いに、キバオウは吐き捨てた。

「はっ、決まっとるやろ。今まで死んでった二千人に、や！何もかも独り占めしたから、一ヶ月で二千人も死んでもたんや！せやろが!!」

…なるほど。この言葉に、この男の言わんとすることは把握できた。この男の標的は…俺たちだ。

「キバオウさん。君の言うへ奴らとはつまり…元ベータテスターの人たちのこと、かな？」

ディアベルが訊ねると、キバオウはディアベルを一瞥してから話し出した。

「決まっとるやろ。…ベータ上がりどもは、こんクソゲームが始まったその日にダツシユではじまりの街から消えよった。右も左も判らん九千何百人のビギナーを見捨て

て、な。奴らはウマイ狩場やらボロいクエストを独り占めして、後はずーっと知らんぷりや。…こん中にもおるはずやで、ベータ上がりつちゆうことを隠して、ボス攻略の仲間に入れてもらお考えてる小狡い奴らが。そいつらに土下座さして、貯め込んだ金やアイテムをこん作戦のために軒並み吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして闘えんと、わいはそう言うとりんや!」

名前そのままに、牙を剥き出したような糾弾が終わると、辺りは静まり返った。当然と言えば当然だろう。ここでβテスターでしと出ていけば目の前のキバオウを含む反βテスター派からの糾弾の嵐に晒されに行くようなものだ。しかし。

「…悪いけど、その意見には賛成しかねるな」

周囲の視線が一気に俺に集まる。ディアベルが俺を見ると、俺はゆっくりと立ち上がり、噴水のキバオウから少し離れた位置に立った。

「えつと、発言の際には名乗るんだつたか。俺はアキヤつて言うんだけど…キバオウさんの怒りや欲求はまあ分かった。βテスターへの憤慨を抱えている人もまあ、他にもいるだろうな。」

「せやったら、何で反対なんや? ジブンがβテスターだから、とか言うんやないやろな?」

キバオウの言葉に一瞬ギクリとするが、例え俺がβテスターじゃなくても反対はした

だろう。俺は辺りを見渡して、静かに続けた。

「俺がβテスターかは置いて：仮にだ。キバオウさんの要求をβテスターが呑んで、その通りにしたとしよう。だけど：その穴は誰が埋めるんだ？」

そう言うと、再びの静けさ。その静けさを数秒過ぐすと、俺は腕を組んで続けて話し始める。

「ここには40と少しくらい人がいるんだろうけど：βテスターが金やアイテムを軒並み吐き出したら間違いない。そいつはボス戦には出れないだろうな。：βテスターを批判、糾弾するのは勝手だけど、目指すのはこのゲームのクリアじゃないのか？ だとしたら、貴重な戦力を削ぐのはどうなんだ？」

「：戦力を削いだのはβテスターとて同じやろ！ 奴らが見捨てたんやから、他のMMOじゃトップ張ってたベテランが二千人も死んどるんやぞ！」

キバオウの言葉に、俺はふう、と1つため息を吐いた。反論はいくらでもある。死者の中にテスターがいない訳では無いだろう。さらに、βテストからほんの少しでも変わってる点があれば、テスターも命を落とす危険は変わらない。どれを言おうか、と思っていたとき。

「発言、いいか」

後ろから張りのあるバリトンが聞こえた。立ち上がったエギルの身長に少し驚きつ

つも、俺は立ち位置を譲る。俺の顔を見たエギルは、キバオウからは見えないように、ほんの少しだけ口角を上げてみせた。そのまま、他のプレイヤーに軽く頭を下げ、キバオウに向き直った。

「オレの名前はエギルだ。今の少年を擁護する、という訳じゃあ無いが……βテスターがオレたちを完璧に見捨てていたか、と言われると、そうでもない気がしてな。」

そう言ったエギルが取り出したのは、先程俺にも見せた、〈鼠〉印の攻略本。

「このガイドブック、新しい村や町に着くと、必ず道具屋で無料配布されていた。情報がやけに早いと思っただが……そこから導かれるのは、ここに載ってるデータを情報屋に提供したのは、元βテスターたち以外にはあり得ないってことだ。」

周囲が騒然とする。キバオウもエギルの言葉に面食らったような顔をしている。エギルはその様子に、更にその声を張り上げた。

「いいか、情報はあつたんだ。なのに、沢山のプレイヤーが死んだ。その理由は、ベテランのMMOプレイヤーが他のMMOとSAOを同様に考えて引くべきポイントを見誤ったからだと俺は考えている。だが今は、その責任を追求してる場合じゃないだろ。オレたち自身がそうなるかどうか、それがこの会議で左右されるとオレは思っているんだがな」

エギルが堂々と言うと、キバオウはエギルを睨み付けるだけに留まった。その様子を

終始見ていたディアベルが、長髪を揺らして頷いた。

「キバオウさんの言うことも理解できる。でも、エギルさんの言う通り、今は前を見るときだろ？アキヤくんの言った、βテストを排除して攻略失敗しました、じゃ話にならない。それぞれ思うところがあると思うけど、今は皆が第一層を突破するのに力を合わせて欲しい。どうしてもテストターとは戦えないって人は残念だけど抜けてくれ。ボス戦ではチームワークが大事だから。」

ディアベルの言葉に、キバオウは悔しそうに最前列まで引き下がった。俺もエギルと共に最前列まで戻って、そのまま会議は順調に進んでお開きとなった。

「…あの時のお前の勇氣に助けられたテストターもいるだろう、そこはGJだ。」
隣にしばらく座っていたエギルが小さく言う、俺も小さい声で返した。

「そっちこそ、早速力になってくれたな。GJはこっちの台詞だ。」

そう言って互いに笑みを浮かべると、エギルは立ち上がった。

「さて、ボス戦は知り合いとタンク隊を組もうと思ってるんだが…お前も組むか？もう一人空きがあるんでな。アタッカーも一人はいて欲しかったんだ」

「…ああ、頼む。アタッカーなら役に立てると思うぜ。」

エギルと握手を交わして、ボス戦では頼む、と言うエギルと別れると、視界の端に、灰色のコートを着た少年と、赤いフードを被った人物が見えた。

3話『ボス戦前日』

翌日。迷宮区20階が踏破され、再び攻略会議が開かれた。その近くの露店で〈鼠〉の攻略本が発売されており、それを全員で読んだ後、レイドメンバーを組むようディアベルから指示が飛んだ。

「約束通り頼むぜ、アキヤ」

「ああ。こつちこそ」

昨日言っていた通り、エギルとパーティーを組んだ。そこにまた見るからにタンク向きの重装備のメンバーが加わり、見るからに一人軽装な俺が浮くかと思われた。ディアベルは一度俺を見て少し考えたが。

「…タンク隊にも一人はアタツカーがいるといざというとき助かるかもしれないし、タンクもこれ以上はいないからこのままで良いだろう。もしかしたらCと合同でアタツカーやつてもらいかもしれないけどね。その時はアキヤくん、よろしく頼むよ。」

そう言って、俺はエギルをリーダーとするB隊になった。元々エギルの知り合いらしく多少の説明は通っていたようで、B隊の面々には俺がβテスターだと言うことは伝わっていた。エギルがやや厳めしい面で俺に小さな声で訊ねた。

「…なあアキヤ。ホントにβと変わりはねえのか？」

「ああ。情報はβと変わらない。本当にそのままならディアベルが言った通り死者0も可能だ。ただ…」

そこで1拍切ると、俺は静かな声でB班に言った。

「逆に言えば、βから変化がある可能性もある。それが一番怖い展開だな…」

「でもよ、ディアベルが一回見た限りだとそのままだって話だよな。他に変わるところあんののか？」

パーティーメンバーの一人が疑問を口に出した。俺は少し考えてから様々な可能性を列挙する。

「ディアベルは正面から押んだだけって言った。俺が考えられるだけでも、背中に武器をもう一個増やしたり、取り巻きの湧出の回数を増やしたり…可能性は捨てきれないな」

「…じゃあ、そんなときはアキヤが指示を出してくれ。オレよりの確だろ。皆もそれでいいか？それ以外は一応オレが指示するけど、基本はディアベルの指示に従おう」

エギルの言葉に全員が頷くと、B隊は明日の決戦に向けて早めに解散となった。

インスタンス・メッセージが届いた。差出人は…アルゴ。内容は、キリトの所に行く

が来てくれないか、という内容だった。不思議に思いながら行く旨を伝えると、数分後、俺の前にフードを被った小柄な人影は現れた。

「よオ、アツキー。キー坊にちよつと用があるんだけどナ、アツキーにもちよつと知ってはおいで欲しいって思つてサ」

「ああ、まあいいけど…あいつ女連れてたからなかなか話しかけにくいんだよな…」

そう言うと、アルゴは驚いたように俺の顔を見た。

「…アツキー、アーちゃんと知り合いだったの力？そうじゃなかったら、よく女だつて分かったナ？」

「…あのなあ、スカート履いてたし、何より立ち居振舞いが完璧に女子だったろ。あいつがオカマに捕まったんなら話は別だが」

「ニヤハハ、キー坊の顔ならあり得ない話じゃあ無いナ」

そんな話をしながらトールバーナの東に進むと、とある農家に着いた。一目散に二階に上がると、不規則なリズムでアルゴがノックする。ドアが開けられると、キリトが姿を現した。

「珍しいな、あんたがわざわざ部屋まで来るなんて…と、アキヤ!？」

「…おう、久しぶり。」

目の前の剣士とは〈森の秘薬〉のクエスト以来話していない。おおよそ一か月ぶりに

話をするのだが、何やら慌てているのは何だろうか。

「アツキーはオレっちが連れてきたのサ。例の件でクライアントが、どうしても今日中に返事を聞いてこいっていうもんだからサ。アツキーにも聞いては貰いたいしネ」

アルゴが平然と中に入り、ソファに座る。俺も中に入ると、俺はソファの近くに立った。キリトが俺にミルクを2つ手渡し、片方をアルゴに渡す。すると、アルゴはにやつと笑った。

「キー坊にしては気が利くナ。ひよつとして眠り毒入りカ？」

「…ありやプレイヤーには原理的に無効だろう。だいたい、圏内で眠らせたところで何もできないし」

キリトの指摘に軽く頷くと、ミルクを口に運ぶ。軽く甘めのミルクはなかなかの味だ。

「俺もβで一回だけここ入ったけど結構旨いんだよな。外で五分経つと耐久値全損してゲキマズにならなきや持つて歩くんだが…」

「ほー、知らなかつタ。今度攻略本にでも書いておくヨ」

俺の言葉に感心を寄せたアルゴの言葉に、キリトはテーブルの上のアルゴの攻略本を叩いた。

「そういえばこれ。俺この本500コル出して買ってただけど…タダで配布してたの

か?」

「そりや、キー坊たちフロントランナーが初版を買ってくれた売り上げで無料版を増刷してるんだからナ。初版はアルゴ様の直筆サイン入りダ」

その言葉に、俺は500コル払ってない…というよりも、毎度アルゴから手渡しで貰っていたのだが。そう思うと、アルゴは俺の方を向いた。

「ああ、アッキーは特別だよ。情報提供して何も買っていないから、そこをまけてるのサ」

「なるほど。まあ役に立ってるようでは何より」

そう答えると、アルゴはキリトの方を向いた。どうやら、これからが本題らしい。

「例のキー坊の剣を買いたいって話…今日中なら、三万九千八百コル出すそーダ」

俺はその言葉に思わず口をポカンと開けた。俺が使っている〈アニールブレード+6 (4S2D)〉でも、三万と少しで今は作れるだろう。キリトも同様の考えを述べてから、アルゴに付け足した。

「…アルゴ、クライアントの名前に千五百コル出す。それ以上積み返すか、先方に確認してくれ」

アルゴがウインドウを操作してからおよそ一分。戻ってきた返事に、アルゴは肩をすくめた。

「教えて構わないソーダ。…キーク坊はもう、ソイツの顔と名前を知ってるヨ。昨日の会議でアツキークとバトルして目立ってるからナ。」

「…キバオウ、だったか。キリト、知り合いなのか?」

俺の言葉にアルゴは頷き、逆にキリトは首を振った。

「確かにあいつは俺と同じ片手直剣を持ってたけど、昨日が初対面のはずだ。しかも、この話は一週間前から来てるんだよ」

その言葉に、俺は思わず首を傾げた。ここに来て名前を出した理由。殆ど同じ剣を持つていてなおキリトの剣を欲しがると理由。βテスターでもないのにキリトを知っている理由…。

様々な理由を考えている最中、メッセージの到来を告げる音が鳴った。宛先を見れば、エギルから。明日のことについて連絡してきたらしい。

「…ちよつとすまん。メッセージ打つから寝室借りるぞ。」

「ああ…」

半ば考え半分のキリトの了承を得て、寝室に入る。二人の前で打つても良かったのだが、心理的に目の前で打つのは少し憚られたので、寝室に入った。主に確認事項だったので、目を通して了解の旨の返信を送る。数秒後。

「…きやあああああ!!」

「うああっ!？」

屋敷が震えるような悲鳴に、思わず跳びかけた。女の悲鳴…だが、アルゴではないだろう。考えた先に出てきたのは…

「…あの女、だよなあ…」

攻略会議で、キリトの横に座っていた、フードを被っていた人物。立ち居振舞いから女だと断定していたが…どうやら合っていたようで。恐らくバスルームにでもいたのか。SAOのドアは防音に関しては問題ないが、叫び声は通るようになっているのがこの結果。

「出ちゃ…まずいか?」

あれだけの悲鳴があつたから何かあつたのが確実なのだが、何か分からないだけに無闇に出ていけない。仕方なく俺は外でもないのにドアをノックした。

何度かノックして数分後、ドアは開かれ、ものすごく不機嫌そうな女性プレイヤーが現れた。栗色のロングヘアに、はしばみいろの瞳。背は俺やキリトと同じくらいで、白の服に赤いスカートを履いている。俺を見ると、不機嫌から不思議そうな顔に変わった。

「あなた…何でここに?」

そういえば昨日の会議で彼女は俺を知っているのだと理解し、俺は今の状況を簡潔に

述べた。

「俺はキリトと知り合いなんだ。アルゴと一緒にここに来て、メッセージ打ちたかったからここを借りた。とりあえず出たいんだが…出て大丈夫か？」

「…ええ。」

寝室から無事の脱出を遂げると、キリトとアルゴの姿は見当たらなかった。アルゴは恐らく出ていったのだろう。今度はキリトがバスルームでも入っているのか…と思っただが、もしアルゴの場合は俺が牢獄送りになる可能性も否めないのでひとまず思考から外す。

「あなた…アキヤくん…だったわよね」

「ああ…というか、何でここにいるんだ？」

俺の前に立つ女性は…何とも美人ではあるものの、刺々しい印象だ。ジロリとした目が鋭い。俺が聞いたが、顔を背けた所を見ると、聞いてはいけない話題だったか。

「まあいいや…あんたは確かずっとフード被ってたよな。キリトの横で」

「あんたじゃないわ。アスナよ。…そう。普段はフード付きのケープ被ってるわ。」

アスナと名乗る女性がフードを被っているのは、顔を隠すためか。キリトとの出会い等はまあ置いておくとして…俺はとりあえず、明日のボス戦の仲間に挨拶しておくことにした。

「そうか。明日はよろしくな。俺は一応B隊になってる。エギルの所で、タンク隊だ。」
「…よろしく。私はF隊。取り巻きの相手をしてるわ。」

いかにも不服そうな顔で言うのは、役割に満足していないのか。確かこのフェンサー、なかなか技のキレが凄まじいとか。キリトもいるし、F隊は二人ながら侮れない戦力になりそうだ。

「そうか。あんたたちがいるなら俺たちも安心して動けそうだよ」

「…いいわよね、ボスに攻撃できて。私たちはへセンチネルの相手だし…」

なおも不服そうなアスナに、俺は役割の大事さを伝えることにした。

「まあ直接的なダメージは無いけど…明日のボス戦、E、F隊がキーを握ってるんだぜ？アスナたちがいなかったら明日は全滅もあり得るんだから」

「…別に、数が少ない班だから割り当てられただけでしょ。すいつち？だかぼつと…だかも出来ないらしいし」

ここまで来て、俺はこの女性がMMO…ゲーム初心者だと分かった。どうにもゲーム用語が少ないのはそのせいかな。俺は順に説明することにした。

「…いいか？明日のボス戦…ボスにダメージを与えるのはもちろんだけど、問題なのは取り巻き…へセンチネルなんだよ。タンク隊や攻撃部隊の後ろを突かれたりしたら大惨事は確定だ。タンクがダメージ食らって倒れたりしたら戦線は崩壊するし、攻撃部隊

が襲われたらボスにダメージを与えられない。でも、ボスを倒さないといけないから、そこまで人間を割けない。だから、センチネル担当には、個々の技量が試されるんだ。だから、センチネルを上手く潰してくれれば、明日の勝率はぐっと上がる。」

その俺の説明を受けて、アスナは一応納得したのか、一度頷いた。

「そこまで言うなら、あなたも大事な役目でしょ。タンク隊が潰れたら戦線が崩壊するんなら」

「もちろん。明日は頑張るさ……じゃあ、俺はこの辺りで。キリトにもよろしく言つてくれ」

結局どこにいたのか分からないキリトに心の中で挨拶をして、部屋を去った。

4話『コボルドの王』

ボス戦へと向かう44人は粒揃いのメンバーだろう。中でも、それを束ねるディアベルの指揮能力には舌を巻くほどだ。事実、このボス部屋までは全員がほぼノーダメージで切り抜けてきた。

「行くぞー！」

ディアベルの言葉と共に、扉が押し開かれる。中は暗闇で何も見えない…と思った直後、ボス部屋の左右の松明が灯る。段々と松明が灯る数が増え、奥の異形を明らかにする。ヘイルファンング・ザ・コボルドロード。第一層のボスだ。

直後、ディアベルが掲げた直剣を前に倒した。それを合図としたかのように、44人のプレイヤーが声を上げて部屋へとなだれ込む。先頭を大きめの盾を持ったハンマー使いが率いるA隊。同じくタンク隊の俺たちB隊はその左後ろにつく。直後、ボスが戦斧を高く掲げ、A隊の盾にぶつかかった。

2022年12月4日。SAO正式サービス開始から4週間経った日に、第一層ボス戦は火花と共に始まりを告げた。

「B隊はA隊とスイッチ！D隊はC隊と連携して攻撃！」

ディアベルの指揮の元、ボス戦は順調に進んでいた。ダメージを負うものこそいるものの、適切なPOTローテでそこまで問題視するダメージを受けるものはいない。このままだったら押しきれぬだろうと思った反面、俺は1つの疑念を抱えていた。

(……)までβと同じ……：デスゲームを仕掛ける奴がβと全く同じボスを用意するのか？)

俺だったら答えはNOだ。俺がデスゲームを仕掛けるなら絶対に何かを変える。もちろん変わら無いのが何よりなのだ。

そんな疑念を一時押し殺し、目の前のボスに視線を向けると、HPは残り少なくなっていた。盾と斧を放り投げ、腰に手を回していた。情報通りならここから湾刀へタルワールが……

「湾刀……じゃない！」

コボルドロードが引き抜いたのは、湾刀ではなく、更に細く、鋭利な刃物……野太刀。分類上はへカタナに分類される武器だ。俺はコンマ数秒ほど目の前のその武器に体を強張らせた。

「……よし、俺が出る！」

「……!!」

ディアベルが走り、誰かが何かを叫んだような気がしたが、ボスのソードスキルの発

生音がそれを遮った。俺はボスが振り上げた野太刀を睨み付け、声を張り上げた。

「…全員、後退！距離を取れ!!」

事前に打ち合わせをしていたB隊は俺の言葉に反応し、驚きながらも素早く距離を取った。しかし、他の隊は別だ。ボスは垂直に高く飛び、C隊へとその刃を振るおうとする。カタナ全範囲ソードスキル〈旋車〉。まともに食らったC隊はHPを半分ほど減らし、倒れこむ。ボスはそのまま、先頭を走っていたディアアベルへ猛進する。〈浮舟〉、〈緋扇〉と叩き込まれたディアアベルは吹き飛んでいった。

「くそ……」

思わず舌打ちをする。C隊…中でもディアアベルは少し突出していた。しかし、それでも。ディアアベルの指揮でここまで来たのは確かだ。ディアアベルの元にキリトが駆け寄る。少なくともディアアベルが復帰するまでは戦線を維持しなければ――

その時、甲高い破碎音が響いた。モンスターが爆散する音ではない。それは…プレイヤーがHPを全損した時の音だ。振り返ると、騎士ディアアベルの姿は何処にも見受けられなかった。

最悪の事態が、訪れてしまった。リーダーの死。それも、ここまで戦闘を導いてきた、騎士ディアアベルという絶大なリーダーの死は、ボス部屋の皆をパニックに陥れるには十分だった。しかし、ここで更に人員を死なせてしまつては、ここまで皆を引っ張つてき

たディアベルに合わせる顔がない上に、どうしても撤退せざるをえない。俺は決死の思いで声を出した。

「…ダメージを受けた奴は下がれ！それ以外も出口方向に数歩退避！取り囲まなければ今の攻撃は来ない！」

後で考えればこの発言は俺があノスキルを知っていると暴露したと言っても同様だが、そんなことは気にしている余裕すら無かった。これ以上死者を出してられない。その思いで必死に声を張り上げる。

「A、D隊はC隊の救援を急げ！E隊は湧出するセンチネルを確実に仕留めろ！…急げ！」

撤退するにしても、続行するにしても、最低限のことはしておかねばならない。指示を受けたメンバーがのろのろと動き出すと同時に、キリトがこちらに向かってきた。

「…ディアベルの最期の言葉は〈血戦〉だ。あいつを倒す。」

「…分かった。」

俺も走り出す。隣にアスナも並び、3人がボスへと向かう。キリトが、俺たちに向かって声を出した。

「アキヤ、俺たちで弾くぞ！アスナ、手順はセンチネルと同じだ！俺が弾いたらアキヤも攻撃頼んだ！」

「了解！」

返事をする、ボスを見る。太刀を左腰に引いた。あの構えは…。カタナソードスキル〈辻風〉。それと同時に、キリトも上体をぐつと下げる。片手剣ソードスキル〈レイジスパイク〉。ボスのカタナと、キリトの剣が激しい音を立ててぶつかる。その瞬間、俺は足を踏み込んだ。

「スイッチー！」

キリトの声と同時に、俺とアスナが踏み込む。片手剣ソードスキル〈ホリゾンタル〉と、細剣ソードスキル〈ヘリニア〉がボスのHPを抉る。

「…よし！次だ！」

確かな感覚と共に声を出す。しかし、この戦法の危うさは俺も、恐らくキリトも把握していた。元々俺もキリトもダメージディーラー、攻撃特化職であり、防御面に関して言えば高いとは全く言えない。つまり、俺かキリトが攻撃を弾き損ねた時、戦線は再び崩壊しかねる。

そして、その時は訪れた。ボスのカタナソードスキル〈幻月〉。上下ランダムに振るわれるソードスキルに、キリトは上と読んだのか、〈パーチカル〉のソードスキルを発動した。

「…違う！下だ！」

「……」

俺の声にキリトはソードスキルをキャンセルしたが、下から振るわれたカタナはキリトを捉えた。キリトのHPがぐいつと減る。俺はキリトに駆け寄った。

「キリト！」

「ダメだアキヤ！アスナを……」

その言葉に、辺りを見ると、アスナは勇敢にもボスへと向かっていた。それに対して、ボスは獯猛な笑みを浮かばせ、そのカタナを赤く染めた。ディアベルを殺めたカタナソードスキル：〈緋扇〉。この位置からアスナまでは多少ある。俺が最も射程が長いソードスキル〈レイジスパイク〉を発動させても……間に合わない。そう思った瞬間、大柄な男がアスナの目の前で斧を振り上げた。

「おお……おおお！」

両手斧ソードスキル〈ワールウィンド〉がボスのカタナと衝突し、ボスは盛大にノックバックした。

斧の持ち主……エギルはニツと太い笑みを浮かべた。

「ダメージディーラーにいつまでもタンクやらせてられねえからな。F隊のあんたが回復するまでは俺たちが引き受ける。……B隊！タンク用意！」

バリトンの声が張り上げられると、B隊は各々の武器や防具を持ってボスの周辺に陣

取った。俺はポーションを飲んだキリトに伝えた。

「ボスの攻撃の軌道をここから伝えられるか。俺は援護に行く。」

「…分かった。アスナのことにも気にかけてやってくれ。そっちの指示は頼んだ」

それを聞くと、俺は走りながら、B隊に指示を出す。

「ガード優先！指示を聞いて、無理に弾こうとするな！アスナは隙があれば攻撃！盾持ちは攻撃してる奴等にタゲを移さないように！」

「了解！」

B隊とアスナの声が聞こえると、俺はアスナの方に走る。ボスを取り囲まないようにするのもあるが、キリトに言われたこともある。時折放たれる「ヘリニア〜」からは、ホントにMMO初心者かと疑うほど。この女性のセンスを、キリトは開かせたいのだろうか。

しばらく危うい戦線が続いた。俺とアスナが徐々にHPを削り、エギル含むB隊がキリトの指示を元にボスの攻撃を受け流す。しかし、その戦線も終わりを告げた。B隊の一人がボスの後ろに回って足をもつれさせた。

「…！」

「…早く動け！」

キリトの声が響いたが、ボスは高く飛んだ。先程C隊のHPをゴツソリと削ったカタ

ナ範囲ソードスキル〈旋車〉。ボスのカタナが上空で光を放とうとした。その瞬間、俺は跳んだ。

「と…どけえー!!」

俺と、同じく跳んだキリトの剣に光が灯る。片手剣ソードスキル〈ソニックリープ〉。黄緑色の光がボスの両脇腹を抉り、ボスが体勢を崩して落ちていく。両手足をバタバタとさせた〈転倒〉状態になった。

「全員——フルアタック！ 囲んでいいい！」

「う…おおおー!!」

キリトの声に、エギルたちB隊が武器をボスに降り下ろす。元々両手斧など火力の高い武器だ。ボスのHPは瞬間に削りきれ…無かった。わずか数ドットを残して、ボスは再び立ち上がり、跳んだ。その瞬間。俺は走った。後ろに付いてくる二人の足跡を聞くと、その二人…キリトとアスナに言った。

「俺が弾く！ 最後決めるよ、二人とも！」

そういうと、空中のボスの挙動に目を向ける。あの構えは…三度目ともなるソードスキル、〈旋車〉。一度はディアベルたちのHPを大きく削り、一度は俺とキリトの攻撃によつて阻まれた。威力は分かっていたの通りで、普通なら回避する道を選ぶが、あいにく回りにはエギルたちB隊とF隊のキリトとアスナがいる。それならばと、俺は弾く道を選

ぶ。

―見ろ。ギリギリまで。

ここで、俺の目はボスのカタナを見据えた。振るわれるのは全範囲とはいえ、それを発生させるカタナは一本。そこに当てさえすればと、片手剣ソードスキルへソニックリープをもう一度発動させる。

「……っだ！」

剣を振るうと、ボスのカタナと衝突し、互いにノックバックする。後ろから二人が走り込む。

「……はあああっ！」

気合いのこもった声と共に、アスナのへリニアはボスに深々と突き刺さる。そこへキリトがソードスキルを発動。

「お……おあああー！」

高々と上から放った上段斬りはボスの肩から胸へと降り下ろされた。しかし、まだボスは死なない。その瞬間。ボスとキリトが共に笑みを浮かべた。キリトの剣は斬り下ろしから、斬り上げへと変わる。片手剣二連撃ソードスキルへバーチカル・アーク―

ボスが吠える。そして、ゆっくりと倒れ……不自然な角度で停止すると、その体は大量

のポリゴン片となった。

「…勝っ…た」

直後、E隊などが相手していた辺りのセンチネルもポリゴン片へと変わり、暫しの静寂が訪れた。誰も、口を開きはしなかった。キリトが振り上げていたままだった剣をアスナが声をかけて下ろす。その瞬間。目の前にシステムウインドウが現れた。獲得経験値やコルなどが浮かび上がると、辺りは一斉に歓声に包まれた。

5話『ビーターは…』

一層ボス部屋には、しばらく歓声が響いていた。1ヶ月もの期間をかけて攻略されたのだから、その感動は大きいだろう。キリトにアスナ、エギルらが周りに集まってきていた。

「アキヤ、お疲れ」

「お疲れさま、アキヤくん」

キリトとアスナの声に、軽く手を挙げて答えると二人の後ろからエギルが声をかけた。
きた。

「…見事な指揮だったな、アキヤ。それに、F隊のあんたらも見事な剣技だった。コングラチュレーション、この勝利はあんたらのものだ」

その言葉に、俺は3人に何て言うか考えた。辺りの騒ぎもあるし、後で言おうかな、とも思った。しかし、突如として叫ばれた声に、辺りは一気に静寂と化した。

「——何でだよ！何で、ディアベルさんを見殺しにしたんだ！」

そう泣くように叫んだシミター使いを俺はしばらく見ていた。確かC隊だったか。ディアベルの仲間だったはず。

「見殺し…?」

キリトの眩きに、シミター使いは血を吐くように叫んだ。

「そうだろ!! だって… だってアンタらは、ボスの使う技を知ってたじゃないか!! アンタが最初からあの情報を伝えてれば、ディアベルさんは死なずに済んだんだ!!」

その言葉に、辺りはざわめいた。そして、ある一人の男が、俺とキリトの間を指差して叫んだ。

「オレ… オレ知ってる!! こいつらは、元ベータテスターだ!! だから、ボスの攻撃パターンとか、全部知ってるんだ!! 知ってて隠してるんだ!!」

その言葉を聞いても、騒ぎ立てる輩はいなかった。キリトは初見であるはずのボスの攻撃を弾いているし、俺はそれ以前の指揮を一時した。その段階で、俺たちがベータテスターであるとは察しがつくだろう。

俺たちを見据えたシミター使いが一層憎々しい、という目を俺たちに向け、口を開こうとしたとき、後ろから声が聞こえた。

「でもさ、昨日配布された攻略本に、ボスの攻撃パターンはベータ時代の情報だ、って書いてあったろ? 彼らが本当に元テスターなら、むしろ知識はあの攻略本と同じじゃないか?」

声の主は、エギルと共にタンクを務めていたメイス使いの男だった。その声に、俺た

ちを指差した男は押し黙ったが、目の前のシミター使いは憎しみに溢れる言葉を発した。

「あの攻略本が、ウソだったんだ。アルゴって情報屋がウソを売りつけたんだ。あいつだって元ベータテスターなんだから、タダで本当のことなんか教えるわけなかったんだ」

その言葉に、俺は言葉を失った。このままで行けば、アルゴを含むテスター全員がこの憎しみの対象になり、テスター全員が発覚次第糾弾されることになるだろう。それが為されてしまえば、テスターとビギナーの軋轢は深まり、結果ゲームの攻略は進まなくなるだろう。

——そうは、させてはならない。

後ろで何やら声を発そうとしたエギルとアスナ。しかし、その声は発せられることなく、キリトが前に出た。

「元ベータテスター、だって?…俺を、あんな素人連中と一緒にしないでもらいたいな」キリトの声に、辺りは静まり返った。キリトは感情が無いような声で続けた。

「いいか、よく思い出せよ。SAOのCBT…クローズドベータテストはとんでもない倍率の抽選だったんだぜ。千人のうち、本物のMMOゲーマーが何人いたと思う。ほとんどはレベリングのやり方も知らない初心者だったよ。今のあんたの方がまだしも

マシさ。——でも、俺はあんな奴らとは違う」

その声に、俺はキリトが何をしようとしたかようやく察しが付いた。この男は…ベータテスターを2つに分けようとしているのだ。〈単なる素人上がりのテスター〉と、〈情報を独占するテスター〉に。そして、後者は…自分一人だと。

「俺がカタナスキルを知ってたのは、ずつと上の層でカタナを使うMobと散々戦ったからだ。他にも色々知ってるぜ、アルゴなんか問題にならないくらいな」

キリトの言葉に、何人かが口を開こうとした。しかし、その声は現実にならなかった。「く…く…く…く…く…く…」

全員が静まり返って俺を見ていた。先程の弁舌を振るっていたキリトでさえ。俺が笑っているのを見て。俺はゆっくり顔を上げると、辺りを見渡してから、横のキリトに向き直った。

「悪い悪い。お人好しのベータテスターが悪役ぶってるのを見てたら笑えてきてさ。…やっぱ流石だねえ、キリト。ビギナーに情報を提供してただけのことはある。」

その言葉に、キリトの驚きの目は俺に向けられた。辺りは再び騒然とし始める。

「あいつが…情報を？」

エギルの声に、俺は乾いた笑みを浮かべた。先程のキリトとは逆に、嘲るように続ける。

「ああ。アルゴにこの層の情報を提供してたのはこいつだろ。攻略の速度や他の情報とも合わせると、他のやつとは考えにくいしな。」

1 拍置くと、周りを見渡す。今憎しみの対象は恐らくキリトだろう。

——ごめんな、キリト。一回、今だけお前を利用することを許してくれ。

「…お前はさぞや俺を恨んでるだろうな。何で、ベータの時…いや、始まってからでも、もつと詳しくカタナスキルを教えてくれなかったんだ、そうしたらディアベルを救えたのに、つて」

「なっ……」

キリトの目が見開かれ、辺りの目が一齐に俺に向く。先程までキリトを恨めしい目で見ていたシミター使いも、俺に視線を移した。それを横目で確認してから、俺は再び話し始める。

「さっきこいつが言ってたのも嘘じゃない。実際に上の層にカタナを使う敵はいた。でも、こいつが闘ったのは1、2体だろ。それも、俺がかなり雑なレクチャーしてやってな。…情報を提供出来ないのも当たり前だよな、かなり不確実な内容しか教えてないもんな」

「…じゃあ、あんたは知ってたって言うのかよ」

シミター使いの言葉に、俺は周りを嘲るように声を発した。

「ああ。俺はただ一人、最前線にいた男だからな。情報屋や、こいつなんて生温いね。」
「そんなの…ベータテスターどころじゃねえじゃんか…もうチートだろ、チーターだろそんなの！」

先程俺たちを指差した男の声を筆頭に、辺りからは声が沸き上がる。ベータのチーターだ、という声はやがて混ざり合い、へびター〜という声を作り出した。

「へびター〜ね…悪くはないな。まあ、素人テスターと一緒にされねえだけマシか。…そうだよ、俺がへびター〜だ。」

黒いジャケットを翻して、出口を指す。何も言う気は無かったが、振り替えると、辺りの憎悪の視線が俺に突き刺さるように向けられていた。

「…2層の転移門はアクティベートしてやるよ。初見のMobに殺されなくなかったら、大人しく転移門から来るといいぜ。勝手に2層に上がって死んでも俺は知らねえけどな」

それだけ言うと、俺は螺旋階段を登り始めた。様々な嘘を織り混ぜた弁論でも、俺へと悪意は向かっただろう。キリトの方が、オレよりもMMOに関して詳しいし、俺の弁論を信じたなら、あいつはへびギナーの味方のベータテスター〜になる。

こう言う役回りなら、俺一人で充分だ。

「…悪いな、キリト…みんな。」

俺の身勝手に利用したことに届くわけもない謝罪をポツリと溢す。キリト、エギル、アスナ。彼らに今後向き合う機会があるのだろうか。

それでも、前を向く。もうこのデスゲームではパーティーを組む機会は殆ど無いだろう。一人で、進むだけ。あと99層の、この巨城を。

「…へあれ、取りに行くか。身を隠すにも都合はいいだろ。あればいいけどな…」

2層は何が変わっているのかは分からない。幸いフレンド登録もまだ誰もしていないので、メッセージが届くこともない。2層のフィールドに、俺は一步を踏み出した。

6話『罪と記憶』

あれから数カ月。アインクラッドの攻略はつつがなく進んでいた。特に問題視する点も無く進んでいる点に反して、俺は1つ疑念を抱いていた。

「…流石に厳しいか」

背中から抜いた直剣を見て、俺はそう呟いた。何層か前の層で手に入れた直剣で、性能も悪くはない。しかし、最前線で闘うにしては、若干ステータスが物足りない。

「何か良い武器手に入れるクエでもあったかな…剣…そういや、この下の層だけに良い鉱石が取れる所があるとかって話があったな…」

鉱石も採って鍛冶屋に依頼すれば、剣を打ってくれる。良い鉱石ならそれなりの剣ができるだろう。俺はその鉱石を手に入れるため、攻略を中断し、転移門がある主街区に足を向けた。

この時の俺は、この後起こることを予想することが出来たらどんなに良かったか、と無いものをねだる羽目になる。

「えーと…こっちか。」

既に踏破済みの層であり、人は少ない。いてもレベリングを行うプレイヤーくらいで、俺のように鉱石を求めて動いてる人は殆どいないだろう。踏破済みとは言えど、敵のレベルも決して低い方ではない。

目的地を目指して森に入って数分。深い森を抜ければ目的地……というところで、前方からフードを被ったプレイヤーが走ってきた。道を譲ると、プレイヤーが凄まじい速度で走り抜ける。

「何だ……急ぐようなことあったか？」

時間制限のあるクエストでもやっていたのか、と仮定を浮かべたその時、もう一人プレイヤーが前方から走ってきた。今度のプレイヤーは俺を見ると、速度を緩めた。そこで、俺はプレイヤーをみて、気付いた。そのプレイヤーが……犯罪者であることに。

「……オレンジ、プレイヤー」

アインクラッドでは、視界に入った物の情報をカーソルで表示する。プレイヤーは緑、NPCは黄色、モンスターはピンクから黒にレベルの差によって変わる赤。その中で、犯罪を犯したプレイヤーはカーソルがオレンジとなり、システム上主街区を含む一部の街に入れないなど様々な制限が課される。

「獲物、はっけーん。」

カラカラと笑う声は不気味で、俺は思わず半歩引いた。ボサボサとした髪に、ニヤリ

と笑う口元、大きく開かれた目は、仮装のものと言えど若干恐怖だ。

オレンジプレイヤーなら逃げるべし、と退却のタイミングを計っていると、オレンジプレイヤーは…突如として俺に飛びかかってきた。

「んなっ…」

地面を蹴って避けると、先程まで俺がいた場所には、短剣が突き立てられていた。見ただけだが、そこまで弱くも強くもない武器だろう。

「あり、避けるか。いいね、逃げろよ。どうせ殺すんだからな、そっちの方が面白い。」
そういうと、再びオレンジプレイヤーは動き出す。短剣を使うシーフ型…なのだろうが。

（…速い！）

恐らくAGI極振り型の短剣を何とか避けると、カラカラと笑いながらオレンジプレイヤーは話し出した。

「さっきのプレイヤーも殺そうとしたんだけどよー、メイスのスキルで〈行動不能〉貫っちゃってよ。逃げられちゃった。まあいいか、獲物は変わったけど、殺ることに変わりねーし?」

「…あんだ、殺人者〈レッド〉か」

オレンジプレイヤーの中でも、殺人を好んで行う者をレッドプレイヤーと呼ぶ。そう

訊ねると、俺に短剣の切っ先を向けてきた。そして、答えの代わりに言ったのは。

「…この短剣いいだろ？麻痺効果つきだから、STRがあんまない俺でも相手の動きを止めて殺せるんだよ。死にたくなかったら、しっかりと避けるよ？まあ殺すから無意味だけどな。」

そう言うのと、再度飛び上がるプレイヤー。俺は背中の剣に手を伸ばして、その短剣とプレイヤーごと弾き返した。

「…まだ、殺されるわけにはいかねえんだよ。」

そう言うて、俺は今までと逆方向に走り出した。街まで走り抜ければ、オレンジプレイヤーは入ってこれない。そこまで戻れば…

「…逃がさねえよおおー！」

声に振り向くと、先程のプレイヤーが後ろに迫っている。何と言う速度なのだろうか。AGI極振りと思える速度で、防具も最小限。あの装備では俺の攻撃次第では、HPを大きく削る可能性もある。迂闊に手は出せない。

しばらくは似たような攻防が続いた。相手の短剣を俺が弾き、俺が逃げて相手が追い付く。俺はHPこそほぼ減っていないものの、相手は徐々にHPを減らす。イエロー手前まで削れた時に、俺は声を出した。

「…お前！そのままだとHP削れて死ぬぞー！」

「俺が死ぬだあ？…死ぬのはテメーだろうがあー！」

俺が逃げて弾いてを繰り返しているせいとか、相手は苛立ちで最早狂気に陥ったようにしか見えない。こちらこそ森の中なので思うように走れず苛立つてはいるのだが。

再び似たような攻防を繰り返すと、十数回目に奴の攻撃を迎え撃とうとしたとき、木の根に足を取られ、体勢を崩した。

「しまっ…」

「…もらったあああー！」

目の前に狂気の短剣が迫る。それを食らった時にもし麻痺にかかれば、そこからはこいつが俺を滅多刺しにして殺すだろう。

——嫌だ、死にたくない。

無我夢中で、片手剣を振るう。短剣を弾ければ、まだ逃げる可能性は残る。しかし、俺は体勢を崩し、相手はしっかりと俺を見定めて短剣を突き出す。それまでとの様々な違いに、俺の剣は僅かに逸れた。短剣の僅か下を通った剣は…相手の体に突き刺さった。

「あ…」

「ああ…？」

互いに固まった。俺の剣はしっかりと相手の胸に突き刺さっており、相手の短剣は俺の目の前で制止した。相手の顔はゆっくりと自分の胸に突き刺さった俺の剣を見てい

た。俺はその顔を見ると、横のバー：HPバーが無いことに気付いた。

直後、男はその体を甲高い破碎音と共に爆散させた。

「あ……あ……」

しばらくの間、俺は何も出来なかった。呆けたように突きだしていた片手剣こそ自らの脇に下ろしたものの、その場に座り込んで、何もできなかった。

——俺が、殺した……

先程まで目の前にいたプレイヤーの命を、俺が、この手で奪った。その事実には、俺は吐きそうになった。仮装世界であろうと、全て吐き出してしまいたかった。カーソルがオレンジにはならなかったが、何故ならないんだと憤慨しかけた。

事実、命を絶つことも考えた。片手剣を鞘に戻して、一路迷宮区へ行って、ボスに一人で挑んでそのまま死ぬ道もあった。〈ピーター〉と蔑まれた俺なら、死んでもこの世界に悲しむ人もいないだろうと。

そうしよう、と片手剣をしまつて、迷宮区へ向かおうとゆらりと立ち上がる。そのまま最前線の街まで戻ると、見慣れたフードが目に入った。

「よオ、アッキー……何だ、元気がないナ。どうかしたのか？」

普段だったなら何と返したろう。何でもない、とでも返しただろうか。しかし、今の俺には何もかも煩わしかった。早くこいつと離れたかった。

「…あいにく売るものも買うものもねえ。じゃあな」

その声にアルゴは何も言わなかった。そのまま右横を通りすぎようとすると、左の腕を掴まれた。

「…離せ」

「オネーサンとっておきの情報を聞くなり離してやるヨ。話し終わったら離してやるから」

つまり聞くまで離さないということか。まあ、最期になるかもしれない話くらい聞いていてやろうと足を止めると、アルゴはこちらを向かずに話し始めた。

「…人の死つてのは嫌なもんだよナ。この前も、情報をよく買ってくれたやつが死んじまったんだ。もう買いに来ないかと思うと、なかなかクする物がある。」

何故その話題をチョイスしたのかは尋ねなかった。いや、情報を聞いてるだけだから俺はそのまま聞くことを望んだ。このあと死ぬことに関しては何に変わりようもないだろうと。

「アッキーに何があつたかは知らないし、聞かないヨ。ただ、気にはかけるシ、心配もするサ。オネーサンが今こうして入れるのは、アッキーのお陰なんだからナ。第一層ボス部屋の話は聞いタ。」

つまり、俺が〈ヘビーター〉の汚名を請け負ったことを知っているのだろう。あれは俺

が勝手にしたこと、だが、ベータテスターへの悪意は実質的に俺に向いたはずだ。

「…ただ、これだけは言っておくヨ。アツキーがこれから先死んだら悲しむ奴等がいるってことをナ。オレっちだけじゃない。キー坊だつて、アーちゃんだつて悲しム。現実にもいるだ口。今のアツキーが攻略に行つても死ぬ未来しか見えなイ。」

そこまで言つて、漸くアルゴは俺を見た。まっすぐ、その目で見据えた。

「死ぬなヨ、アツキー。どんなことでも乗り越えるのが人間つてもんなンダ。辛いことや悲しいことがあつてもまず立ち向かつてからだ口。それでダメなら回りに手を伸ばせ。オネーサンでもキー坊でも、必ず力になるから」

そう言つと、アルゴはようやく手を離れた。そして、俺を見て、照れ臭そうに頬を掻いた。

「…情報屋らしくなかつたナ。オレっちは通常営業に戻るヨ。今回はサービスしとくヨ。アツキーも攻略、頑張れヨ！」

そう言つと、アルゴは手を振りながらスタスタと歩いていった。俺はしばらくその場に立っていた。

「…簡単じゃねえこと言うな。死んで悲しむ人、か。」

アルゴが何もかもお見通しかのようになにか言つてつた言葉。死ぬな、立ち向かえと。俺に当てはまることを言つたのは偶然か故意か。

俺が死んで悲しむ人。キリトや、アルゴ、エギル、アスナ。彼らはは悲しんでくれるだろうか。それに加え、現実。両親は悲しんでくれるだろう。しかし、他の人は――

『――また、会おうね、アキヤ！絶対だよ！』

『こら、アキヤじゃなくてコウヤでしょ。…またね。晁夜』

『ああ、またな――』

その瞬間。まるで電撃にでも打たれたかのように鮮やかに記憶は蘇った。夕暮れ時に最後に挨拶を交わしたのはもう半年以上前だろう。その名前は…

「木綿季に…藍子…」

そうだ。幼馴染みとして10年程家族ぐるみの中だったあの二人に、俺は。また、会おうと言った。その約束を、俺は…果たしたい。

「あいつらに…会いたい。」

現実世界のどこかに、きつといるはずだ。どこかに引越したあいつらに、俺は…もう一度。会いたいと強く願った。

「…悪い。俺は…まだ死にたくない。」

謝罪をしても、死者が還る訳でもないし、俺の罪が消えるものでもない。俺に罪が償えるのかは分からない。それでも。

「明日から…もう一回。頑張ってみる」

今日は休んで、明日から。進めるかは分からないが、それでも、小さくてもいいから
一歩を踏み出そうと、俺は向かう方向を変えて、宿を目指した。

7話『赤髪 of 侍』

劍の強化素材を集めようと、最前線から数層下のフィールドに顔を出すと、とある一団が見てとれた。赤を基調とした格好の一団で、カタナや槍を持って戦う様はさながら戦国時代の合戦だ。

「…バランスは良いけど、敵の数が多いな」

10人にも満たないパーティーだが、タンクやダメージディーラーらしき人物も見てとれ、バランスは良いだろう。しかし、囲むようにいる敵の数は6といったところ。適正マージンを取ってても、危うい状況ではあるだろう。

「…おい、その赤髪！手伝うか!？」

俺の声に振り向いた赤髪にバンダナの男は、こくりと頷いた。

「すまねえ！2体…いや、1体引き受けてくれると助かる！」

「了解…つとー！」

辺りのモンスターに向けてピックを投げる。ドスつと胴体に刺さると、モンスターの2体はこちらを向いた。

「悪いけど、仕留めるぞ。いいよな？」

「あ、ああ…おいあんだ、無理すんじやねえぞ！」

赤髪は俺が2体のタゲを取ったことに驚いたようだが、すぐさま別の敵に向かつていった。この敵は狼型のモンスターで、耐久力はそのままで高くないが、少し攻撃力が高いのと、狼同士で軽い連携を見せるのが特徴だ。俺を標的とした2体もおよそ60度ほど角度を離して陣取っている。

狼が地を同時に蹴る。2方向からの同時攻撃はなかなか面倒だが、俺はこの層の攻略は済ませている身で、こいつらの相手も慣れたものだ。

「…せいっ！」

短い気合いと共にソードスキルを放つ。片手剣二連撃ソードスキルへスネークバイト。左右に振るった剣がそれぞれ狼を直撃し、2体ともポリゴン片へと変わる。

「二丁上がり…つと」

「…すげえな、あんだ」

いつの間にか赤髪が近くまで寄ってきていた。すごい、と俺を称したものの、このスピードで残りを葬ってきた彼らもなかなかの実力があるのだろう。赤髪の男は俺に向けて笑みを向けた。

「なあなああんだ、これから暇か？もし良かったらお礼させてくれねえか？軽く奢るぜ？」

「あ、いや俺は……」

断ろうとした時に、目の前の赤髪の目を見た。ぜひとも奢らせてくれと言わんばかりの目を。

「…分かったよ。そこまでお礼とかは要らねえけど……」

「まあまあ、メシでも食おうぜって話だ。俺はクライン！あんたは？」

クラインと名乗った男に、俺は無愛想に答えた。

「アキヤだよ。行くなら行こうぜ。」

「…やっぱ攻略組だったか。あの剣技見たらそりやそうだよな、って納得だ。」

クライン以外のメンバー…ギルド〈風林火山〉は一度帰ると言って、今はクラインと二人で近場のNPCレストランに入った。辺りに人が少ないのは幸いか。クラインは更に続けていく。

「俺達も攻略組目指して頑張ってたけどよ。もうちよいかな、って所なんだよな。」

「…まあ、確かにもうちよいなんじゃねえか。」

そう返したのは気を遣って、というわけではない。実際、あの狼のモンスターは倒すのには若干苦勞するのが定石だが、俺とほぼ同じスピードで葬って見せた辺り、実力は相当なものだろう。足りないのはレベルか場数か。

「だろ？ 攻略組に入ったらそんなときはよろしくな、アキヤ」

クラインがニカツと笑うのに対し、俺は笑い返すことはなかった。

「…あいにくだけど、俺と仲良くしてもあんまりいいことは無いぞ。別のギルドとか、そういうたこととの繋がりを大事にした方がいい。」

「なんでえ。オメーといて何か問題があんのかよ？」

クラインの声に、俺は少しだけ小さい声で、しかしハツキリと答えた。

「…俺は、へピーターだ。ピギナーを見捨てて、知識を独占して。攻略組でも他でも、俺を妬ましく思ってる奴は少なくない。」

その言葉を言うのと、目の前のクラインは俺を罵ることもなく、ゆっくりと話し始めた。

「…へピーターか。じゃあ礼を言わなきゃならねえな。ダチを救ってくれた礼をよ。」

「ダチ？ あいにく俺は誰かを救ったことなんて…」

俺が否定しかけた時、クラインは首を横に振った。とんでもないとわんばかりに。

「いんや、オメエは救ってくれたさ。俺のS A O最初のダチ…キリトをな」

「…キリトの知り合いだったのか」

俺の言葉にクラインは頷く。S A Oベータテストで共に最前線を駆け抜け、第一層でクエストとボス戦を共にした男、キリト。彼との関係はあれ以降悪くはない、と言ったところか。

「アイツはあのチュートリアルの前にオレに色々レクチャーしてくれてよ。俺はさっきの連中と合流しなきゃだったからへはじまりの街で別れたんだ。あいつ、辛そうな顔だよ…」

「…そうか。」

短く答えたのは、クラインの顔が悲痛そうに見えたからだだった。恐らくだが、キリトも同様の話題を振ったら同じ顔をするのだろう。互いに別れるしかなかったという状況で、互いに取った行動は恐らく正しい、それでも。

「で、何で俺にお礼なんだ？キリトを救ったなんて覚えがねえけどな」

そう言うと、クラインは頭を掻いた。話すことを躊躇っていたのか、俺が振ると徐々に言葉を出した。

「…第一層で、キリトは自分が〈ピーター〉となる覚悟を決めたそうだ。けど、それを阻んだのはアキヤ、オメーが〈ピーター〉になったからだって聞いている。キリトに良い行動を全部押し付けてな」

「あいにく、それは俺が勝手にやったことだ。礼を言われることじゃねえな」

そう言うと、クラインは頷いた。

「分かってる。でもアイツが無事でいれることに、オメーの影響が無かつたとは言いきれねえだろ？」

「それは…はあ、もうそういうことでもいい。」

このクラインという人物は、それこそいいやつなのだろう。先程の集団をまとめる姿からも、人が良く、今のこの姿からも、義に厚い男だと言うことは伺い知れる。だから話を切った。これ以上話してもいたちごっこになりそうだったからだ。

「オレも力になれることなら協力するからよ、アキヤ。オメーも何かあつたらオレんとこ来いよ。フレンドになつとこうぜ。攻略のことも色々と聞きてえしよ」

「…ああ。」

一層突破時0だったフレンドも、少ないながら人はいるようになった。ベータテストから戦線を共にするキリト、キリトと共に攻略を進め、時折話すこともあるアスナ。一層で俺を誘ってくれたエギル、情報の交換をするアルゴ。そして、今回のクライン。皆、俺が〈ヘビーター〉であっても変わらず接してくれる人ばかりだ。

「うっしー！じゃあ次は攻略組で会おうぜ！ちやつちやつとオメーやキリトに追い付いてやるからよー！」

「…別に、ゆつくり来いよ。死んじゃ元も子もねえ。」

それだけ言うのと、ちようど良く料理なども無くなったので、俺は席を立った。クラインも立ち、店を後にする。

「んじゃ、今日はあんがとよ。また会おうぜ、アキヤ」

「ああ。最前線で待ってるぜ、クライイン」

そう言うと、互いに別の方向へ歩き出す。俺は最前線へ、クライインは仲間の元へ。

次は一緒に戦ってみたいものだ。そんな思いを馳せながら、俺は転移門で最前線の街の名前を唱えた。

8話『夜、少しの話を』

「…最近見ねえな、あいつ」

狩場でレベリングの最中、呟いた言葉に返す人はいなかった。帰ってくるのは狼のようなモンスターの咆哮のみ。

ソロで最前線の攻略を進めている、俺自身にはあまり変化がない。しかし、変わった点が無いというわけではない。

最近、キリトを見なくなった。ボス戦などでは見るが、他の場所では一切とっていないほど見ない。以前は最前線を攻略するフロントランナーとして多少は顔を合わせたものだが。

アスナとは途中から別々に攻略を始めたと聞いた。アスナ自身も強くなり、有数ギルドへ血盟騎士団に入ったとか。キリトはソロプレイヤーとして活躍を見せている。そのキリトが最近顔を見せない。

時刻はそろそろ夜の10時となる頃か。そろそろレベリングを行う物好きな連中が近場に現れる頃だ。その時、近場から現れた影に俺は視線を向けた。

「…キリトか」

先程までどこに行っただのかと心の中で考えていた人物がやって来た。無事なことに多少胸を撫で下ろしつつ、目の前のモンスターを葬る。

「…代わるか？俺は少し休むけど」

狩場は基本的に順番制だ。現在は俺が利用しているが、他に人がいないためぶつ通しで狩っていた俺はキリトに交代の案を出した。

「ああ。じゃあ使わせてもらおう」

「無理せずにな」

普段と変わらない会話をして、俺はキリトに場を譲る。しかし、違和感のようなものを少し感じた。しばらくキリトの後ろ姿を眺めて、ようやく気付いた。

(ギルドアイコン…見たことないデザインだな)

SAOではギルドに所属すると、HPバーの横に所属を示すギルドが決めたアイコンが表示される。キリトのHPバーの横には、月と猫がデザインされたアイコンが表示されている。少なくとも、見たことのないため攻略組ではないだろう。

「…あいつが、ギルドにね…」

キリトも陰ながらビーターと呼ばれることが僅かながらあるということを目に挟んだ。更に、アスナと別れてからは基本ソロで活動していキリト。そんな彼がギルドに入ったという。

「——よおアキヤ。待ちか？」

その声に振り向くと、クラインが立っていた。後ろには〈風林火山〉の連中がゾロゾロと連なる。各々が俺と挨拶をしていく。

「クライン、と〈風林火山〉か…俺はもういいけど、キリトがさつき始めたばつかだ。どつちにしろ待ちにはなるな。」

「お、あいついるのか。ちつと挨拶に…いや、でもなあ…」

珍しく歯切れの悪いクラインに首を傾げると、クラインは手を振りながら答えた。

「ああいや、気のせいだったら良いんだけどよ…この前別の狩場であいつと会ったときは何かやけに暗い顔だったから、何かあったのかと思ってよ…」

「キリトが、ねえ…さつき軽く話したときは普通だったけどな。何か考え事でもしてるんじゃないか」

そんなもんか、と話を切ったクラインとしばらく攻略の話や互いの進捗を話していると、キリトが出てきた。代わって、〈風林火山〉の連中が狩場へと向かっていく。互いに挨拶を軽くしてから俺の横に座ったキリトは、ポジションを飲み干した。

「…ギルド、入ったのか。」

それだけを口に出したのは、そればかりは視覚的に既に判っているからだ。隠してもない情報を言うだけなら大丈夫だろうと思っただけだった。

「…ああ。まだ攻略組ではないけど、順調にレベルも上がってきてる。攻略組に入ったら今の雰囲気も少し変えてくれるような、そんな所さ」

そう言ったキリトだが、どこか表情は暗かった。自分が入ったギルドなのだからもう少し堂々と言っても良さそうなものだが…

「へえ。ま、大事にしろよ。せつかく入ったギルドならな。」

そう言うと、キリトは頷いて帰っていった。それが、キリトがその狩場に現れた最後だった。およそ一ヶ月後、キリトは最前線に戻ってきた。ギルドアイコンが消え、まるで脱け殻のようになって。

それからおよそ半年の月日が経ち、最前線は49層まで昇った。そんな中、俺は46層にいる。プレイヤーの間で〈アリ谷〉と称される狩場に向かっていた。現状、そこが一番経験値が入るからだった。アリ谷は昼間は人が多いが夜は少ない。しかし、0ではない。今日もどこかの黒ずくめが一人で――

「二人…じゃあなかつたな。」

アリ谷の近くの地面に二人、座る影がある。片方は予想通り黒ずくめのキリト。もう一人は…赤ばつかりのクライン。

「よう、黒ずくめと赤侍」

そんな声をかけると、俺の声にクラインはおどけたように返した。

「うるせえやい。オメーだつてほぼ真つ黒じゃねえか」

「残念だな、黒じゃなくて紺色だ。」

最近の装備は紺色の物が多い。というのも、装備のグレードでは他の色もあるが、黒や紺といった色は〈隠蔽〉ボーナスが付くことが多いのでよく選ぶのだ。他愛もない話を数分すると。

「…なあ、キリトよ。レベル、どんくれえになった。」

クラインがキリトにそう聞いたのを、俺は不自然に思った。レベルを含むステータスはこの世界では生命線と言っても過言ではない。それはこの男も分かっているはずだが…

「今日上がって69だ。」

肩をすくめてそう答えたキリトに、クラインは目を丸くした。最前線が49層という中で69までレベルを上げるのは中々に苦痛だ。

「…おい、マジかよ。いつの間にか、オレより10も上んってんのか。…アキヤ、オメエは？」

そう言われて、俺だけ答えない訳にもいかないだろう。俺はキリト同様に肩をすくめて答えた。

「…昨日70まで上がった。元々一層から高くなるようにレベリングしてたし。」

キリトのように今無理矢理なレベリングをしているという訳ではなく、元々無理矢理なレベリングを繰り返してきた。レベルだけなら攻略組のトップクラスにいるだろう。

「…クライン、心配するふりなんかしないで率直に聞けよ。知りたいんだろ、俺がフラグMobを狙ってるのかどうか」

フラグMob…クエストを進める上でキーとなるモンスター…を狙っているのか、とキリトに言われたクラインはごしごしと顎のヒゲを擦った。

「オリヤあ別にそんなつもりじゃあ…」

「ぶっちゃけて話そうぜ。俺がアルゴからクリスマスボスの情報を買った、という情報をお前が買った…という情報を俺も買ったのさ」

キリトが言った言葉に、クラインは目を見張り、俺は溜め息を吐いた。アルゴの商売は情報であるが、それは『○○がこの情報を買った』というものも含まれる。

「24日夜24時に森の巨木の下に、〈背教者ニコラス〉なる伝説の怪物が出現する。もし倒すことが出来れば、怪物が背中に担いだ大袋の中にたっぷり詰まった財宝が手に入るだろう——だったか。」

俺が言うのと、二人が頷いた。しかし、キリトもクラインも金に困っている様子もないし、武器も攻略組とあってグレードはかなりランクが高いだろう。それでも二人がボス

を狙うわけ、それは…

「やっぱあの話のせいだよ。——〈蘇生アイテム〉の…」

「ああ…俺が、一人でやらなきゃいけないんだ…いくらガセネタと言われてても、可能性があるなら…」

思い詰めた顔で話すキリトに、俺は思い当たる節があつた。それはクラインも同様だろう。

「…あのギルドか」

キリトが半年前に所属していたギルドであり、キリト以外半年前に全滅したギルド、〈月夜の黒猫団〉。詳しくは知らないが、シーフがアラムトラップを引いてモンスターを呼び寄せ全滅したと聞いている。

「それはお前エの責任じゃねえだろ。生き残つたお前エを褒めこそすれ、誰も責めやしねえ。」

「そうじゃないんだ…俺の責任だ。前線に上るのを止めることも、宝箱を無視させることも、アラムが鳴つた後でさえ全員を脱出させることだって、俺にはできたはずなんだ…」

苦々しく答えたキリトに、俺もクラインも何も言わなかつた。やがて、クラインはゆつくりと立ち上がった。

「…連中だけじゃデカめのアリが出た時心配だからな。ちょっと俺も様子見てくらあ。
…最後に言っておくけどよ、オレがお前エの心配したのは別に情報聞き出すためのカマ
かけばかりじゃねえぞこの野郎。無理して死んでも、こんなところでお前エに蘇生アイ
テムは使わねえからな」

そう言つて、日本刀を腰にさしてアリ谷の方へ歩いていった。

目の前のキリトに、俺は声をかけた。

「なあ、キリト。——」

その言葉が終わると、キリトは虚ろな顔でただ頷くだけだった。

9話 『背教者と友人』

35層迷いの森。そこにある捻れた巨木に（背教者ニコラス）は現れるはずだ——とキリトはそういった。キリトからこうして情報を得たのは、先日キリトに言った言葉だった。

『なあ、キリト。1つ、お前の頼みを何でも聞いてやる。他を足止めしろというならする。一緒に戦ってアイテムを寄越せというならそうする。どうだ？』

その言葉にキリトが頷き、24日夜。俺は35層にいた。とは言っても、転移門や街にはいない。既にフィールドに出ていた。俺は追跡されることを逃れるために、34層から迷宮区を通って35層に来ていた。

「あとは……あいつの頼み次第か」

キリトに頼み事を1つ聞くと言ったが、当のキリトは頼み事を言っていない。どんなことを言われるんだろうかと若干ヒヤヒヤしている。

23:30を過ぎた辺りで迷いの森に入り、目的地の1つ手前で止まる。少しすると、キリトが姿を現した。

「……ようお」

「…」

キリトは何も答えなかった。協力体制を敷いているとはいえ、俺もボスへの単独参加はどちらかと言えば反対派だ。ここでキリトという人物を失いたくはない。

そんな考えをしていると、後ろから十人程のパーティーが姿を現した。〈風林火山〉。恐らくキリトを尾けてきたのか。先頭のクラインはつかつかとこちらに歩み寄って来る。キリトは俺に小さな声で言った。

「…アキヤ。例の事だ。『戻ってくるまで誰もここを通さないでくれ』」

「…了解」

途端、キリトは走ってワープゾーンに入り、俺はその前に立つ。

「…何のつもりだ、アキヤ」

クラインの静かな声に、俺は口に軽い笑みを溢して答えた。俺もこいつと対峙するのは御免だが…

「あいにく、あいつには借りがあるんでね。ここを通るんなら…俺を倒すんだな」

まるでラスボスさながらに立ち塞がる俺に、〈風林火山〉の面々が顔を見合わせる中。更に後ろにここにいる数の3倍はいるであろうパーティーが現れる。中には見覚えのある顔もいるが。クラインはその数に驚いてか声を出した。

「あいつらは…!?!」

「DDA…〈聖竜連合〉、だろ」

攻略組の中でも最大規模を誇るギルドで、一時オレンジになることも厭わないというギルド。〈血盟騎士団〉とは何かと衝突しがちなギルドだ。個々の力は俺より下だろうが、この数を相手にするととなると中々骨が折れる。

「…まあ、約束だし、やってやるか」

スラリ、と背中から片手剣を抜くと、隣でクラインも刀を抜いた。

「オレも、オメーとは敵対したくねえ。ワープゾーンの守りくらいはやるぜ」

「…ワープしたら追っかけてぶっ殺すぞ」

そう告げると、クライン含め〈風林火山〉は少し怖がるように頷いた。人がいい奴らだ。頷いたからには俺が言ったようになりスクを取ってまで行こうとはしないだろう。〈風林火山〉が横に並ぶと、俺は〈聖竜連合〉に向けて声を出した。

「寒い中ご苦労様。悪いけど、ここは通せないんだ。どうしてもっていうならデュエルでも何でも応じてやるから…俺を、倒してってくれるか」

——キリト、死ぬなよ。お前は『戻ってくる』って言ったんだからな。だから。お前が戻ってくるまで。それを信じて。

「守りきってやるよ…このくらい。」

「…次」

デュエルの申し込みは何人目だったか。恐らく20人は超えただろう。〈半減決着モード〉で半数以上を相手にして、〈聖竜連合〉に動きが見えた。

「…撤退しよう。撤退！」

誰かがそう叫んで、〈聖竜連合〉はそろそろと撤退していき、残ったのは俺と、〈風林火山〉の面々。剣を背中にしまったその時、ワープゾーンが光り、キリトが姿を現した。

「…キリト」

クラインが声を出したが、すぐにその声もすぼんだ。キリトはクラインにアイテムを投げた。

「それが蘇生アイテムだ。過去に死んだやつには使えなかった。次にお前の目の前で死んだやつに使ってやってくれ。」

そう言って、キリトは立ち去ろうとした。そのコートをクラインが掴んだ。クラインは…泣いていた。

「キリト…キリトよお…お前エは生きろよ…もしお前エ以外の全員が死んでも、お前エは最後まで生きろよお…」

クラインが涙ながらに語るが、当のキリトはコートを引き抜き、じゃあな、と言って歩き出す。俺の横を通りすぎても、キリトは何も言わなかった。

キリトがワープゾーンを通り抜けると、俺は緊張の糸が切れるのを感じ、座ろうとした。が。

「あれ…」

視界が回った。ふと見ると、最後に見えたのは木の梢だった。

「…アキヤー！」

クラインの声が聞こえたが、返す余裕もなく、俺の意識は闇に落ちた。

「っ…まぶし…」

光りに目を覚めます。最後の記憶が迷いの森だから、ここはまだ迷いの森か…と思っていたが、上に天井があることでその可能性は消えた。その事に、思わず飛び起きた。辺りは恐らく昼頃かと思われる光で照らされていた

「ど…だ…」

見渡すと、簡素な部屋だった。寝ているのがベッドであるから恐らくは〈圈内〉ではあるだろうが、記憶の中にこんな場所は存在しない。ベッドから降りようとしたとき、近くのドアが開いた。反射的に背中 of 剣に手を伸ばす。幸い剣はあった。

「おう、起きたか。…何も攻撃しやしねえよ。ここは〈圈内〉だしな。」

「…ど…だ、ハハハ」

入ってきたのはクラインだった。少し掠れた声で訊ねると、クラインはガリガリと頭を掻きながら答えた。

「ここは35層の宿屋だ。悪いけど〈担架〉アイテムで運ばせてもらったぜ。急に倒れるからそれ以外方法が思い付かなかった。」

そう言いながら近くの椅子に腰かけたクラインは、じろりと俺を見据えた。その瞳は以前見たキリトと少しだけ似ていて、鋭かった。

「…何であんなことやりがった。下手したらキリトが死んでたんだぞ。それを分かっ
てんだろうな。」

「…ああ、分かっている。今回は、一層の借りを返したただけだ。次似たようなことがあればぶっ飛ばしても止めるさ」

そう言うのと、クラインは微妙な分からない、という表情を浮かべた。俺は続けて話し出す。

「…そんな顔するなよ。どつちにしろ俺じゃキリトは止められなかったさ。あいつは何を言ってもソロでいく道しか選ばない。俺が力づくで止めても納得はしない。なら、あいつの生存率が高まるように、障害を取り除くことにしたんだ。だから足止めは買って
出た」

「…お前エも考えてなかった訳じゃねえのか…じゃあもう一個の件だ。お前エ…今レベ

ルいくつだ？」

俺はギリギリとした。つい先日70だと答えたばかりなので、そのまま70と言えば良いものを、詰まっってしまった。

「7……1だ。」

今更嘘をついてもどうせ看破されるだろう。そう思った俺は正直に答えた。すると、クラインは、盛大に溜めた息を吐き出した。

「はあ……だろうと思っただぜ。お前エもキリト程とは言わねえけど馬鹿げたレベリングやってんだろうな、つてよ。」

それを言われると痛い、馬鹿げたレベリングは元からだ。一年間もの間、攻略組の中でもトップクラスを走り続けて来た意地のようなもので続けてきたのだ。

「…分かってるよ、無茶してるってことは。これからはそれなりのペースでやるつもりだ。」

「分かってんらいいけどよ…お前エもキリトも、俺にとつちやかかけがえのねえダチなんだ。もし次があつたらそんなときやオレンジになつてもぶっ飛ばすからな！」

拳を握つていうクラインに、俺は軽く笑った。この男は何ともいい男だ。その時があつたなら、言葉通り俺は恐らく五メートルは吹き飛ばされるだろう。

「んじゃ、吹っ飛ばされないようにしなきゃな。…世話になった。今度は一緒に攻略し

ようぜ」

そう言って、俺は宿屋のドアを開いた。後ろに残るクラインに笑みを浮かべると、一言だけ声を出した。

「…ありがとう」

それだけ言って、俺は再び最前線へと戻る。いつか、再びあの黒づくめと共に闘う日が来ることを信じ、それまで最前線を戦い抜くと心に決めて。

10話 『仇討ち』

「…お願いだ！仇を討ってくれ！」

最前線の街で、転移門前に男が泣きながら周りに叫んでいた。そこで俺が立ち止まったのは、男と目が合ったのと、たまたま近場にいたからだだった。

「あんた！話だけでも聞いてくれないか！…そこあんたも！話だけでもいい！」

その男が俺と、目の前にいた男に声をかけた。目の前の男をゆっくりと見ると…

「…キリト」

「…アキヤ」

目の前にいたのは、最近へ黒の剣士と称されるキリトだった。

近場の喫茶店に場所を移し、俺とキリトは男の話を聞くことにした。が、その前に、俺は男に声をかけた。

「…仇を討ってくれ、って言ってたけど、俺たちはその…殺すとかいうのは勘弁したいんだが。」

「大丈夫です。方法も情報もあります。ただ、実行に移すには俺じや力が無くて…」

「…まあ、事情をまず聞こう。話はそれからだろ」

キリトの言葉に、男は話し始めた。男は〈シルバーフラグス〉というギルドのリーダーらしいが、そのギルドは5日程前に、38層で自分を除いて全滅した。原因は、ロザリアという女率いる〈タイタンズハンド〉というオレンジギルドの手にかかったらしい。

「方法は…これを使ってください。」

男がそう言つて差し出したのは、〈回廊結晶〉。攻略組でもおいそれと手出しが出来ない金額に設定されている高級品を差し出されて、俺は男に思わず目を向けた。男は震える手をもう一方の手で抑えるように握つた。

「ギルドの残つた金全部で買いました。行き先は黒鉄宮の牢獄に指定してあります。あいつらを憎い気持ちはありますが、牢獄に、送つて下さい…」

男の声は最後は消え入るようだった。その声を聞いて、俺はキリトの目を見た。かつて虚ろだった目には、光がしっかりと戻っている。

「…分かった。俺たちが引き受けるよ。情報を教えてくれ」

キリトがそう言うのと、男はお礼を言いながら〈タイタンズハンド〉のロザリアが35層あたりで活動していることを報告して、何度もお願ひします、と言つて去つていった。

「…俺もやるかの確認くらい欲しかったけどな」

「悪いつて…俺一人でも大丈夫だとは思うんだけど、一応な。人数も多いみたいだし。」

…接触出来たら俺から連絡するから、アキヤは攻略進めといてくれるか？」

「まあ、まだ攻略自体は余裕あるとは思うんだけどな…分かったよ、こつちも何か変わったら連絡する」

そう返すと、キリトは早速向かうよう目で、転移門の方に歩いていった。

「…んじゃあ、頼まれたんだし、ぼちぼち攻略しようかね。」

軽く肩を回し、装備を確認して最前線のフィールドに足を向けた。

キリトからの連絡は予想以上に早く来た。二日後の夜に、キリトからメッセージが飛んできた。

『ロザリアと接触した。どうやら〈プネウマの花〉を狙うようだ。明日ビーストティマーと47層に行くから来てくれないか。ビーストティマーには助っ人つて伝えておくから』

以上の文章を読んだ瞬間、6割は素直に納得した。しかし、残りの4割は…予想していた通りではあつたが。

「…何か、面倒事になりそうなんだが…」

あいつが行ったのは35層あたり。そこで知り合ったプレイヤーを47層に連れていく、というのは要するに護衛、もしくはレベル上げになるということ。〈プネウマの

花〉は〈使い魔〉を失ったビーストテイマーが〈思い出の丘〉に行かないと咲かないはずなのでどうしようもないことではあるが。

——まあ、あいつも考えてるんだらう。ここはあいつに任せるとしようか。

自分にそう言い聞かせ、了解の旨を知らせると、俺は武器類の確認を一応してから休むことにした。

翌日。転移門広場に来た俺は、転移門で47層に向かう。街の名前はその層の特色：というかそのもので、とても覚えやすい。

「転移、へフローリア」

途端、青い光に包まれ、次に移った視界は一面の花畑だった。この層は通称「フラワーガーデン」。街だけでなく層全体が花だらけ、という特徴的なフロアで有名だ。転移門前も有名なフロアだけあって賑わっている。

「…フィールドで合流すればいいか。」

この辺りよりもフィールドにいれば合流もスムーズだろうと考えた俺は、『フィールドに出る所にいる』とキリトに送り、歩き出す。

〈圏内〉と〈圏外〉の間とも言える門に寄りかかって立つと、遠くから黒づくめの男が現れた。鮮やかな花と対照的でとても見つけやすい。その横に、小柄な2つ結びの髪の子

性がいた。キリトは俺を見ると、右手を軽く上げた。

「よ、アキヤ。悪いな、遅くなつて。」

「いや、そこまで待つてねえよ。で、そちらが話にあつた子か?」

俺が指し示すと、赤い装備を基調とした女の子はぺこり、と頭を下げた。

「あ、シ、シリカです。キリトさんには昨日助けて貰つて…それで、〈プネウマの花〉を取りに行くのを手伝つてもらふことになつて…」

俺が初対面だからか、多少緊張したような言葉遣いだが、それを抜いてもかなり礼儀正しい子だろう。仕草や言葉の端々からもそれは伺える。

「えーと…俺はアキヤ。このキリトの友人。今日は念のための助っ人に呼ばれただけだから、基本方針とかはキリトに従つて貰えば大丈夫。だろ?」

俺が最後にキリトに視線を向けると、キリトはやや呆けた後に頷き、それからシリカの方を向いた。

「基本はさつき言つたことを守つてくれれば大丈夫。戦闘に関しては複数体を相手にしないように俺とアキヤで回りは片付けるから、気にしないで闘つていいよ。それじゃあ行こうか」

キリトの言葉にシリカが頷くのを見ると、シリカとキリトの後ろに付く。まあこの層ならそこまで苦戦はしないだろうし、大丈夫だろうと思ひながら二人の後を付いていく

ことにした。

それから数分後。モンスターとめでたく初のエンカウントをしたわけだが。

「ぎゃ、ぎゃああああ!?なにこれ——!?き、気持ちワル——!!」

シリカがブンブンと短剣を振りながら喚くのも無理はない。目の前にいるモンスターは回りの花畑からは一線——どころじゃないもの——を画して、もはやグロテスクだ。キリトはそんなシリカを傍目で見ながらふと呟いた。

「…そういや、ここの層こんな敵ばかりだったな…シリカは大丈夫かな…」

「さあな…おっと。ちよつと片付けてくるからシリカのサポートよろしく」

キリトにそう言って、少し離れた後ろの方を向く。そこには、似たようなモンスターが2体ほどいる。〈索敵〉スキルを使って、なるべくシリカが複数体相手にしないように、遠くの敵が近づいて来ないようにするのが俺の役目だ。近場にいる場合はキリトが担当するらしい。

「…よっ—」

最前線よりもまあまあ下の層ということもあるが、元々この敵は弱い。1体をソードスキル〈ホリゾンタル・アーク〉で葬りもう1体を〈バーチカル・アーク〉で潰すと、シリカも戦闘を終えたようだ。何やら顔が赤いのは…聞かないでおこう。無駄な質問で

変に気まづくなつてもしょうがない。

それから数回戦闘をこなすシリカを見たが、ダガー使いとしての力量はそれなりに高いだろう。ヒット&アウェイの短剣の特徴をしつかりと使いこなしている。流石に攻略組と比べると些か劣るものの、腕前は中々だ。

「あれが〈思い出の丘〉だよ」

しばらく進んでキリトが指差したのは、回りと比べて一際高い丘。頂上まで登れば、そこに〈プネウマの花〉が咲くはずだ。シリカは道を眺めている。

「見たところ、分かれ道はないみたいですね？」

「ああ。ただ、モンスターは相当出るらしい。…まあ、今まで通りで、気を抜かずに行けば問題ない」

「はー」

俺の言葉にシリカが返事をして丘を登り出す。モンスターは徐々に大きくなるが、強さ自体はそこまで変わらない。どうやら事前にキリトが装備を提供したらしく、パワーアップしたシリカの攻撃に、モンスターは空しくポリゴンを散らしていった。

丘の頂上に着くと、シリカは木立が作った空間に入っていた。

「…見張りしてるから取ってこいよ」

「ああ。」

ここで俺が申し出た見張りとは、モンスターもあるが、ロザリアがここで襲ってくる可能性を考慮してだった。〈索敵〉スキルを使ってもモンスタアの反応以外は無いため、ロザリアはこの周辺にはいないだろう。少し経つと、二人が中から戻ってきた。

「…おう、その様子だと取れたみたいだな。」

「はい！でも、この辺はモンスターも多いから、街に帰ってからしようってキリトさんが。」

「なるほど。俺もそれは賛成だな。帰りも似たような感じでいいだろう？」

キリトが頷いて、今度は丘を下り始める。そこで、俺は1つ考えを巡らせていた。

キリトと俺がいるなら、あらかたのモンスターは退治できるし、そこまで危険というわけではないだろう。それでもキリトがその提案をしたということは。

——ここからが、俺たちにとっての本番だ。

11話『2つ名』

丘の麓の橋に差し掛かったとき、索敵スキルを発動すると、プレイヤーの反応があった。やや前方におよそ10と言った所か。キリトを見ると、俺を見て軽く頷き、シリカの肩に手をかけて止まった。

「…そこで待ち伏せてるやつ、出てこいよ」

キリトが低い声で言った数秒後、木立がガサリと揺れ、一人のプレイヤーが現れた。赤い髪に赤い唇、黒いレザーアーマー。細身の十字槍を持った女性だ。

「ろ…ロザリアさん…!?なんでこんな所に…!?」

シリカの声に、改めて目の前の女性を見据える。こいつが、へシルバーフラグスを壊滅させた女…。

「アタシのハイディングを見破るなんて、なかなか高い索敵スキルね、剣士サン。あなどつてたかしら？」

キリトからシリカに視線を移したロザリアは飄々と笑顔で話し出した。

「その様子だと、首尾よく〈プネウマの花〉をゲットできたみたいね。おめでと、シリカちゃん。——じゃ、さっそくその花を渡してちょうだい」

その言葉にシリカが絶句するのを見て、俺はキリトの横に並んだ。突如の乱入者にも、ロゼリアは笑みを崩さない。

「そうはいかねえな。オレンジギルドへタイタンズハンド〜リーダー、ロゼリアさん」
そう言うと、ロゼリアの笑みは消えた。後ろのシリカが戸惑うような声を出した。

「え…でも、ロザリアさんはグリーン…」

「オレンジギルドでも、全員が犯罪者カラーじゃない場合も多いんだ。グリーンの場合はメンバーがパーティーに入って待ち伏せポイントに誘導する。昨夜俺たちの話を盗聴したのもあいつの仲間だよ」

キリトの言葉にシリカを後ろ目で見ると、愕然としている。パーティーメンバーが急に自分の命を狙ってくるなど、恐ろしいことだろう。

「…大方シリカのパーティーも狙ってたんだらうけど、シリカが〈プネウマの花〉を取りに行くつてのを聞いて標的をそれに移したつてとこか」

「そうよオ。今が旬だからね…でも、そこまで解つてながらノコノコその子に付き合うなんて、あんたら馬鹿？それとも体でたらしこまれちゃったの？」

俺の言葉に返ってきたのは侮辱とも思われる言動だった。その言葉にキリトが返したのは、あくまで冷静な声だった。

「いいや、どっちでもないよ。俺たちもあんたを探してたのさ、ロザリアさん」

「——どういふことかしら？」

ここに來て漸く真面目な質問を飛ばしたロザリアに、俺は淡々と答えた。

「十日前、38層でヘシルバーフラグスってギルドを襲つたろ。リーダーだけ脱出した。そのリーダーは最前線のゲート前で仇討ちを探してくれる奴を探してたよ。でも、依頼を引き受けた俺たちに、殺してくれとは言わず、黒鉄宮の牢獄に入れてくれって言ったんだ。」

俺が言うと、ロザリアは面倒そうな仕草を浮かべて、続けた。

「…マジんなっちゃって、馬鹿みたい。ここで人を殺したって、ホントにその人が死ぬ証拠ないし。そんなんで、現実に戻った時罪になるわけないわよ。アタシ、この世界に正義とか法律とか妙な理屈持ち込む奴一番嫌い」

そう言い切つたロザリアが、ニヤリと笑つた——ような気がした。

「で、その死に損ないの言うこと真に受けて、アタシらを探してたわけだ。あんたらの餌にまんまと釣られちゃつたのは認めるけど…でもさあ、たつた3人でどうにかなると思つてんの…？」

ロザリアが右手で手招きすると、木立から更に人が出てくる。索敵通り、ほぼ10。カーソルはオレンジが殆どで、銀色のじゃらじゃらとした装備が何とも賊という感じがする。

「き、キリトさん、アキヤさん…人数が多すぎます、脱出しないと…」

「だいじょうぶ。俺が合図するまでは何もしなくていいよ。…アキヤはシリカの側にいてくれ。万が一の時は頼むけど」

キリトはそういうと、そのままたすたと歩き出した。シリカは無茶だと思ったのか、俺に向かって大声で言った。

「アキヤさん！キリトさんを止めないと…！」

その声がフィールドに響き、俺が大丈夫だ、と言う前に、向こうから声が飛んできた。

「キリト…？それに、アキヤ…？その格好に、二人とも盾なしの片手剣…〈黒の剣士〉と…〈雷剣〉？や、やばいよロザリアさん、こいつら、ピーター上りの、こ、攻略組だ…」

その声に、ロザリアは数秒口を開け——それから甲高く叫んだ。

「こ、攻略組がこんなところをウロウロしてるわけじゃない！それに、もし本物だとしても、この人数でかかれれば余裕だよ！」

「そ、そうだ！攻略組ならすげえ金とかアイテムとか持ってんぜ！オイシイ獲物じゃねえかよ！」

同意した賊たちが一斉に抜剣する。俺はその武器一つ一つを眺めると…結論を出した。

「…俺が出るまでもないな。」

そう言うのと、腕組みをして見物を決める。シリカは不安そうにキリトを見ていた。

「オラアアア！」

「死ねやああ！」

男たちが各々の武器をキリトに振り下ろす。キリトは避けることも弾くこともせず、ただ立っていた。何発もの斬撃を受け、キリトの体が揺れる。

「いやあああ！」

シリカは顔を手で覆って叫んだ。確かに、普通ならHPがどんどん減少して、死へと一直線だろう。——キリトが、奴等と同レベルならば。

「シリカ…落ち着け。キリトのHP見てみる」

そう言うのと、覆っていた手をゆっくりと下ろし、キリトを見たシリカは、そのまま動きを止めた。気づいたのだろうか。キリトのHPが少し減ってはすぐに回復するということに。男たちも気付いたのか、攻撃の手が止まる。それを合図としたかのように、キリトは静かに話し出した。

「——十秒あたり400、つてどこか。それがあんたら9人が俺に与えるダメージの総量だ。俺のレベルは78、ヒットポイントは14500…さらに戦闘時回復スキルによる自動回復が十秒で600ポイントある。何時間攻撃しても俺は倒せないよ」

「そんなのアリかよ……ムチャクチャじゃねえかよ……」

男たちの声に、キリトは今度は吐き捨てるように言った。

「そうだ……たかが数字が増えるだけで、そこまで無茶な差がつくんだ。それがレベル制MMOの理不尽さというものなんだ！」

その時、舌打ちが聞こえた。奥を見ると、ロザリアが腰に手を回しているのが見える。と、同時に、俺は地面を蹴った。

「転移——」

「——だろうと思っただぜ」

ロザリアの前に立つと、驚く手から結晶を奪い取り、素早く襟首を掴んで橋の向こう側の9人の方へ引き摺る。俺が橋を渡りきるとキリトは〈回廊結晶〉を取り出した。

「これは、依頼した男が全財産はたいて買った回廊結晶だ。これで全員牢屋に跳んでもらう。あとは〈軍〉の連中が面倒見てくれるさ」

「——もし、嫌だと言ったら？」

「全員殺す」

ロザリアの問いに対してキリトが簡潔に答えると、辺りが凍ったかのようにヒヤツとした。

「と言いたい所だけど……その時はこれを使うさ」

キリトが懐から出したのは、小さな短剣。刀身は薄緑色の粘液が妖しく光っている。「麻痺毒だよ。レベル5だから十分間は動けないぞ。全員コリドーに放り込むのに、そんだけあれば十分だ…自分の足で入るか、投げ込まれるかだ。——コリドー・オープン！」

キリトがコリドーを開くと、次々とオレンジプレイヤーたちがうなだれながらコリドーに入っていく、残りは目の前に座るロザリア一人となった。俺が近付くと、ロザリアは挑発的に見上げた。

「…やりたきややってみなよ。グリーンのアタシに傷をつけたら、今度はあんたがオレンジに…」

そこまで言うか言わないかの内に、俺はロザリアの襟首を再び掴み上げた。

「あいにくだけど、その挑発に乗っても乗らなくても、あんたの行き先は牢獄だ。」

故意に人にダメージを与えなければオレンジになることはない。俺はロザリアを担ぐと、喚く声に耳を貸さず、頭からコリドーに突っ込んだ。コリドーは、役目を果たしたかのようにその入り口を静かに消し去った。

暫しの静寂。キリトはシリカの方を向くと、静かに言った。

「…ごめんな、シリカ。君を囮にするようなことになっちゃって。俺のこと、言おうと思っただけど…君に怖がられると思って、言えなかった」

「…その件に関しては俺も謝る。利用するような形になったのは、申し訳なかった。」

シリカはブンブンと首を振っていた。シリカが何も言わずにしていると、キリトがシリカの前で言った。

「シリカ、街まで送るよ。アキヤは？」

「…ゆっくり話でもしてこいよ。俺は依頼人に話つけてくるから」

二人に背を向け、俺は歩き出した。これで一件落着、万々歳の終わりだろう。今回出会った少女とは、また縁があれば出会うかも知れない。その時は、ビーストテイマーの話でも聞かせて貰おう。そう思って転移門に向かうことにした。

12話『圏内』

…一体何をやってるんだ、こいつらは。

昼前の59層転移門近くの低い丘で、二人の人物を見つけた。片方は攻略組屈指のソロプレイヤー、〈黒の剣士〉キリト。もう片方は…ギルド〈血盟騎士団〉サブリーダー、〈閃光〉と称される細剣使い——アスナ。

別に二人が一緒にいて問題があるわけではない。低層では一緒に攻略していたのだし、最近はあまり仲が良いように見えない二人が再び共に攻略でもしてれば俺も暖かい目で見送るのだが。

「…寝てるんだよな」

目の前の丘で、56層の攻略会議の対立はどこへやら、と二人は並んで寝ている。確かに天候は晴れだし、心地よい風も吹いている。眠気が来るのも分かるが、何もわざわざこんなところで寝なくても。

「はあ…一応見張るか…ん、と。この辺りなら鳴らねえか」

俺が見張ると言ったのは——アスナに関してはハラスメント行為もあるが——PKの可能性があるためである。

寝ているプレイヤーの指を勝手に動かして勝手にデュエルを申し込んで殺される行為などがかつて「殺人者」の口口とあったSAOでは、「圈内」と言えども——圏外は論外だが——睡眠前に多少なりとも警戒手段を取る。

その内の一つとして、「素敵」スキルの接近アラームがある。プレイヤーが近付くとシステムがプレイヤーに警告を告げるものだ。アスナは知らないが、キリトは恐らく使っているだろう。俺は範囲に入らない所の木に寄っ掛かって見張ることにした。

先に起きたのはキリトで20分ほどで起きた。どうやら熟睡はしていなかったらしく、すんなりと起きた。次いで、隣を見て驚愕、近くの俺を見てまた驚愕、というコンボを見せてくれた。

「…何であいつが俺の横で寝てるんだよ!？」

アスナを気遣ってか、俺に素早く近づいて小声で話したキリトに、俺は肩をすくめて話した。

「さあ。俺が来たときには二人並んで寝てたけどな。…起きたんならあとは見張り頼む。俺は迷宮区に行くから。」

そう言って立ち上がると、左腕を掴まれた。何だ、と腕を掴んでいるキリトを見下ろすと。

「…あいつが起きるまで一緒にいてくれないか。」

その言葉に、俺はまだ寝ているアスナを見た。寝顔は安らかで、デルタ波は出まくっているだろう。当分起きそうにないアスナに、俺をすがるように見るキリト。

「…分かったよ。」

上げきつた腰を再び下ろす。俺も逆の立場だったらそうするだろう…いや、キリトに押し付けて自分は攻略に行くだろう。何せ、俺とこの副団長の仲は悪くは無いが、ある原因で良くもないのだ。

再び樹に寄りかかり、上を見ると、心地よい気候と共に、梢から眩しい光が漏れているのが見て取れた。

浮遊城が段々とオレンジ色に染まる。夕焼け…なのだが。目下で寝ている副団長はまだ起きない。実に俺がここに座ってから八時間も経った。こりや今日の攻略は明日に回すか…と考えた時、小さくしやみの音が聞こえた。音の方を向くと、のろのろとアスナが上体を起こしている所だった。

「うにゅ…」

何だか分からない言葉を発したアスナは、少しの間呆けて辺りを見渡していたが、近くのキリトを見ると、顔を赤、青、赤と目まぐるしく変化させた。

「おはよう。よく眠れた？」

笑顔で言うキリトに、アスナは右手を閃かせ…かけた。俺はその様子を眺めながら、重い腰をゆつくりと上げて、とりあえず何か言われる前に帰ろうかと思った…のだが、〈黒の剣士〉はそれをよしとしなかった。

「あ、おい！どこ行くんだよ？」

そう言うキリトに、俺は1つ伸びをした後、はあ、と溜め息を付いてから言った。

「帰るんだよ。今から攻略しても戻ってくるだけになるし、お前の言ってたことも終わったろ。」

『アスナが起きるまで一緒にいてくれ』という何とも簡単に見えたクエストが、八時間近くも続くとは思わなかった。キリトがクエストNPCだとしたら、俺は報酬に転移結晶でも寄越せと言いたい程に。

そんな訳でもう何処かで飯を食って帰って寝ようとしたのを止めたのは、今度はキリトではなく——もう一人、アスナの声だった。

「待って！……ゴハン、何でも幾らでも一回君たちにおごる。それでチャラ。どう」

アスナがそう言うのは、俺やキリトが何故ここにいるかを寝起きの頭で理解したからだろう。起こしもせず、ただ側において、寝られるだけ寝かせて、尚且つ圈内PK行為のガードを行っていたことを。アスナのそういった直接的なやり方はまどろっこしいよりは嫌いではない。

「…俺は構わないけど、キリトは？」

俺自身借りを作るのには好きではないし、貸しを作るのもそこまで得意じゃない人間としては清算が速くて助かるし、どちらにせよこれから飯を食おうかと思つてたところだ。

「俺もOK。57層の主街区に、NPCレストランにしてはイケる店があるから、そこでいいか？」

俺とアスナが頷くと、アスナとキリトが立ち上がり、アスナはまるで夕焼けを吸い込むかのような伸びをした。

最前線より2層下の57層主街区へマーテンに転移門を通して出ると、周囲の視線が一斉に向いた。〈閃光〉アスナに、〈黒の剣士〉キリト。それに、〈雷剣〉と最近呼ばれる俺の攻略組が一同に会す機会は攻略会議とボス戦を除いて殆どない。周囲の目を受け流しながら、キリトについていくと、およそ五分ほどでキリトは止まった。道の右側に、大きめのレストランがある。

「(1) (1) (1)」

「そ。お薦めは肉より魚」

キリトを筆頭に、店の中の奥まったテーブルへと進む。その途中でも、こちらへと向

かう視線は数多い。流石に少し疲れてきたのだが、今更帰るといったら提案したアスナに睨まれるのは必死。大人しくすることを決めた。

キリトがフルコースらしき注文をすると、アスナは正面に並んだ俺とキリトがギリギリ聞こえる位の声をだした。

「ま…なんていうか、今日は…ありがとう」

「へっ!？」

隣のキリトが驚いたように声を出すと、アスナはジロリとキリトを見てから、再度口を開いた。

「ありがとう、って言ったの。ガードしてくれて。」

「…どういたしまして」

俺が言う声が若干いつもと異なった。その理由としては、目の前の人物——アスナが、普段の攻略会議では前衛がああだ、攻略がこうだという話題で尚且つ強気で話す様しか見たことがないからだだった。低層でも不機嫌な様子しか見ていないが。アスナは穏やかな目を宙に向けて呟いた。

「なんだか、あんなにたっぷり寝たの、ここに来てから初めてかもしれない…普段は長くても三時間くらいで目が醒めちゃうから…」

「目覚まし…アラームで？」

俺の問いに、アスナは首を振った。

「ううん、不眠症って程じゃないけど…怖い夢見て、飛び起きたりしちゃうのよ」

「…そっか」

キリトはそう言つて一瞬俯いたが、次の瞬間再び口を開いた。

「えー…あーつと…なんだ、その、また昼寝したくなつたら言えよ。」

「そうね、また同じくらい最高の天候設定の日がきたら、お願いするわ。」

にこりと微笑むアスナと、言葉無くしたキリト。本当に帰ろうかなあ、と思うのだが、立つたら立ったでめんどくさそうだなあとか思っている、NPCがサラダの皿を持ってきた。色とりどりの野菜——見た目は謎——が並んでいるのを見ると、隣の食いしん坊は既に謎のドレッシングをかけてばりばりと頬張っていた。

「…生野菜ねえ。まあ、まずはねえけど…」

「えー、美味しいじゃない」

アスナが野菜を頬張りながら俺の意見とズレるとも言わない食い違いを見せると、キリトはまた違った意見を出した。

「んー、まあせめてマヨネーズくらいあればなあ」

「それ言うなら揚げ物にソースだろ」

「んー、それならケチャップも欲しいかなー、あと…」

各々の要望を口にする、一拍の間が空き、次いで全員が口を開いた。

「醬油！」

3人が完璧に同じタイミングで同じものを叫んだ。その事に、3人が同時に吹き出した瞬間——。

「…きやあああああ！」

突如として聞こえた悲鳴に、思わず立ち上がって劍の柄に手を伸ばした。同様にしたキリトとアスナも立ち上がった。

「店の外だわ！」

直後、3人が店の外に椅子を蹴飛ばしながら駆け出す。通りに出ると、再びの悲鳴。3人は視線をちらと合わせると、駆け出す。この先の円形広場からか、と検討をつけて広場でブーツから火花を飛ばして止まった。

原因は、見れば明らかだった。そして、それが——この事件の始まりだった。

13話 『捜査開始』

「…何だよ、それ…」

呻くように言ったのは、目の前の光景に対してだった。広場北側に立つ塔。その2階の窓からロープが垂れ、その先の輪にフルプレートアーマーにヘルメットの男が吊り下がっている。ロープは首元に食い込んでおり、胸に深々と黒い短槍が突き刺さっている。この世界ではロープでの窒息死は無いが…胸の短槍は、男のHPを削っているのを表すかのように赤いエフェクトを撒き散らす。へ貫通継続ダメージのエフェクトだ。

「…早く抜け！」

キリトの声に、男はのろのろと両手を動かす。しかし、武器は抜ける気配は無い。どうするか、と考えた時、アスナが駆け出した。

「きみたちは下で受け止めて！」

その言葉を聞く限りで推測すると、恐らく内部からロープを切るつもりか。しかし、事態は一刻を争う。そう思った俺は。

「…キリト！下頼んだ！」

「お、おいアキヤ!？」

直後、俺は段違いに加速した。塔の下に着くと、その加速を一転、上に向ける。壁に足をつけ、落ちる前にひたすらに足を出す。壁を垂直に登る中、背中の剣に手を伸ばす。敏捷力寄りの俺のステータスなら…この高さでも届くはずだ。

——間に合えっ…！

剣を抜こうとしたとき。ヘルメットの男の目が一点を見詰めていた。それは…自分のHPバー。男は口を開いて何かを叫んだ気がした。しかし、悲鳴と驚く声が鳴り響く広場の声に掻き消されたのか、そもそも声は出ていなかったのか、聞くことは叶わなかった。

そして、俺が剣を引き抜く前に、青い閃光が視界を埋めた。俺は剣を鞘に戻し、降ってきた短槍を左手で空中でキャッチしながら、塔の上へと登り詰めた。そして、すぐにあるはずのものを求めて辺りを見渡す。

「…みんな！デュエルのウィナー表示を探してくれ！」

圏内でHPを全損する条件。それは、〈完全決着モードのデュエル〉しかない。それが行われたなら、今この瞬間にその表示が出ているはずなのだ。

「…アスナ！ウィナー表示あったか!？」

「無いわ！システム窓もないし、中には誰もいない!!」

下からキリトとアスナの声が聞こえるなか、俺は左手の槍を握りながら辺りを見渡

す。

「アキヤー！」

下からキリトの声が聞こえる。今一番視界が広いのは塔の上の俺だ。デュエルのウイナー表示なら多少離れていても見えるだろう。しかし。

「…ダメだ、無い…！」

辺りを見渡しても「マーテン」の街があるだけ。システムウインドウはどこにも見えない。それでも辺りを見渡すが、俺は探すのを止めた。その訳は。

「30秒経った…か」

デュエルのウイナー表示が出る時間は30秒。これ以上探しても表示されていないものを探すのは不可能だ。

「この武器が…？それとも、何か別の物が…？」

左手に握る短い槍を見る。ちょうどグリップの部分をキャッチしたらしく、柄にびつしりと生えた逆棘には触れていない。長さ一メートル半程のこの短槍が、あのフルプレートアーマーの男の命を奪ったのだろうか。

「アキヤー、降りてこれるか？」

下からキリトの声が聞こえる。ひとまずは合流してから考えることにしよう。一度ストレージに格納し、俺はひらりと塔から飛び降りた。

着地の際にかなりの衝撃が走ったが、ダメージにはならないため、足を軽く振ってからキリトに向き直る。

「ひとまずあいつと合流してからだ」

キリトはそう言って、目の前の塔——実は教会——に入る。俺も入るがその際、俺は周囲のプレイヤーを数人呼び寄せた。

「悪いけど、隙間なく入り口を塞いどいてくれるか。誰かがぶつかつたら大声出してくれ。」

俺が頼んだのは、入り口の封鎖。これには意味があり、〈隠蔽〉スキルで隠れていても人にぶつかれば自動看破されるということを狙ったのである。幸いプレイヤーは快く協力してくれた。

一階をすり抜け、2階に上がると、順に扉を開けて中を見て、最後に例の部屋に入る。窓際にはアスナが気丈な表情で立っていたが、その内にはショックもあるだろう。

「教会の中には誰もいない」

キリトの報告に、俺も頷く。すれ違った人と言えばさっきの教会にいたNPCのシスターくらいで、他の部屋には目視でも索敵スキルでも誰もいない。アスナはすぐに問い返してきた。

「〈隠蔽〉アビリティ付きのマントで隠れてる可能性は？」

「俺やキリトの索敵スキルを無効化するアイテムは今のインクラッドには無いだろうな。一応入り口はプレイヤーに塞いで貰って通るのは無理だし、窓がある部屋もここだけだったな」

俺がそう報告すると、アスナは頷いて、これを見て、と言って部屋の一角を指差した。そこには、木製のテーブルに結わえられたロープが、窓へと伸びている様がある。

「ロープ…〈座標固定オブジェクト〉に結わえたのか。」

俺が言うと、キリトが唸り声を上げた。

「うーん…どういうことだ、こりゃ？」

「普通に考えれば…あのプレイヤーのデュエルの相手がこのロープを結んで、胸に槍を突き刺した上で、首に輪を引つ掛けて窓から突き落とした…ってことになるのかしら…」

アスナも首を傾げながら言うが、随分と回りくどいやり方なのは誰が見ても明らかだろう。

「…でも、ウイナー表示は出なかった。俺は塔の上から見たけど、全方位どこにもな。デュエルだったら近くに出るだろ」

俺の声に鋭く返したのは、アスナだった。

「でも…有り得ないわ！〈圏内〉でダメージを与えるには、デュエルを申し込んで、承諾

されるしかない。それは、きみたちだつて知つてるでしよう！」

「…ああ、それは、その通りだ。」

キリトが肯定すると、辺りは沈黙。逆に、窓の外の広場からはプレイヤーのざわめき
が聞こえる。やがてアスナは俺たちを見据えて、言った。

「このまま放置は出来ないわ。もし、〈圏内PK技〉みたいなものを誰かが発見したのだ
とすれば、仕組みを突き止めないと大変なことになる」

「…俺も、今回ばかりは無条件で同意。」

キリトがそう続けると、二人は俺を見た。お前はどうなんだ、と言わんばかりの視線を
受けた俺は、ふう、と軽く息を吐くと答えた。

「俺も同意。この件については解決まで協力することは約束するよ」

俺が言うと、アスナは僅かな苦笑いと共に言い放った。

「なら、ちゃんと協力してもらおうわよ。昼寝の時間はありませんからね」

「…お前らじゃねえんだからよ。例の槍はキリトに渡しとくからな。」

ぼそりと言って、槍をキリトに渡す。これからこの二人と協力体制に入るのか、と
思った時、肩をガシリと掴まれた。

「…その前に。きみには言っておきたいことがあるのよ。」

「…何でしようか」

威圧的に言うアスナに思わず敬語になった。アスナは俺の肩を掴んだまま言い放った。

「きみ、さっき『塔の上から』って言ったわよね…？わたしは下で受け止めてって言ったのに何で塔の上に行ったのかな？」

「それは、一刻を争うと思って、壁を登ってロープを切ろうとしたからで…そのまま駆け登ったから。」

そのままのことを言うと、アスナは肩を握る力を緩めた。

「…今回はそういうことなら良いんだけど、ね？アキヤくん。君は私の作戦、提案を何回無視してきたかな？」

俺がやばい、という表情を浮かべると、緩まった手が再び強さを増す。システムに保護されないギリギリの強さで肩を握られる。まるで、逃がさないとも言おうかのよう

に。
俺がアスナの提案を無視…あるいは反する行動を取る回数が多いのは事実であるが、俺はボス戦が終わる度に逃げるようにそのまま攻略に出ていたのだった。そして、それがアスナと仲があまり良くない原因でもある。

「あ、あの…それは、人命救助やそう言った重要事項を優先した結果であって…」

「…ふーん…」

アスナはゆっくりと肩から手を放した。次いで、くるりと振り返り、部屋の入り口へ向かった。

「ま、いいわ。でも、今回は協力するって言ったんだからしっかりと協力してよね。」

「…へいへい。」

返事をする、横のキリトがやれやれと言った感じで俺を見ていた。

「…大変だな」

「…お前もな」

キリトは何が？という顔で俺を見ていたが、俺はそれに答えることなく、部屋の入り口へと向かった。

「ほら、速く行かないとまた副団長のカミナリが落ちるぞ」

俺の言葉に急いだキリトと共に、先にいる白い騎士装の背中を追いかけた。

14話 『情報収集』

「おつかれ。…誰も通ってないか。ありがとう」

キリトがロープを回収した後、塔の入り口を封鎖してくれていたプレイヤーに礼を言つて外に出ると、外はまだざわめいていた。俺たちが塔から出ると、視線が徐々に集まる。

「すまない、さっきの一件を最初から見てた人、いたら話を聞かせて欲しい。」

キリトの声に、女性プレイヤーが一人手を上げた。装備を見る限りは中層のプレイヤーだろうか。アスナが名前を聞くと、か細く「ヨルコ」と名乗った。

「…悪いけど、幾つか質問するから答えて欲しい。もちろん無理にとは言わない。答えられる限りでお願いしたい…大丈夫かな」

俺が言うと、ヨルコは震えながらも頷いた。俺、キリト、アスナが質問をして、得た情報は以下の通り。

・ヨルコは、殺されたフルプレートアーマーの男、「カインズ」とは元同じギルドで、たまにパーティを組む。今日も夕飯を食べに来ていた。

・広場ではぐれたあと、教会からカインズが教会から降ってきて宙吊り。槍は刺さつ

ていた。その際に、後ろに人影のようなものを見たと供述。見覚えはなし。

・カインズが狙われた原因に関して心当たりはなし。

以上の点を聞くと、最寄りの宿場にヨルコを俺とアスナが送り、残っていた攻略組のプレイヤーにキリトが説明をして、再び3人は集まった。

「さて…次調べる物って言ったら…あれか。」

俺の言葉に、アスナが頷いた。続けて俺の言葉を補足するように話し出す。

「ロープとスピアね。出所が分かれば犯人が追えるかも。物証から行けばいいんだけど…」

そこで切ったのは、ここで必要なスキル…〈鑑定〉スキルをどうするか、ということだろう。キリトはアスナを見て尋ねた。

「おまえ、上げてるわけないよな」

「こいつが上げてたら驚きだな」

俺が続けると、アスナはじろりと俺たちを交互に見た。

「君らもでしょ。…ていうか、〈おまえ〉とか〈こいつ〉ってのやめてくれない？」

急な話題の変換に、俺たちが首を傾げて2秒後、キリトが我に返ったように声を出した。

「…あ、ああ。えーと…〈貴女〉？」

「…〈副団長〉とか?」

「…〈閃光様〉?」

俺とキリトが交互に言うのと、最後のキリトの言葉にアスナの視線がより厳しくなった。確かアスナのファンクラブの呼称だったか…機嫌を悪くしたのか、顔を背けたアスナが言った。

「普通に〈アスナ〉でいいわよ。さつきそう呼んでたし。」

本人の許可を得たので、これからはそう呼ぼうと決めた所で、話題を戻すことにしたキリトが声を出した。

「で、鑑定スキルだけ…フレンドにアテは?」

「友達の武器屋やつてる子が持つてるけど時間が…アキヤくんは?」

今の時間は武器屋はメンテの依頼が多いとアスナは踏んだのか、俺に振ったが、あいにく俺のフレンドの少なさは異常な程だろう。何せ、目の前の二人を入れても一桁なのだから。

「…一人知ってるけど、二人も知り合いだろ。攻略組だし。」

「…じゃあ、そこに行くか。忙しいかは…知らん」

そう言うのと、速攻でメッセージを打ったキリトが、容赦なく送信ボタンを押した。

50層主街区、〈アルゲード〉。目的地に着いた俺を、どつかりと大きな背中であえた店主に声をかけた。

「よお、久しぶりだな、エギル」

「んお？アキヤじやねえか！キリトから連絡は来てるけど、お前は珍しいな」

「悪いな、俺もキリトの連れなんだ。買うのはまた今度な」

一瞬嬉しそうな表情をした店主は、キリトの名が出ると険しい表情を浮かべた。この店主は一層攻略からの知り合いで、俺やキリトがよく世話になる商人兼斧使い、エギル。店を開いてからも時々顔は出すようにはしている。

当のキリトたちは途中で買い食いをしていたので遠慮なく置いてきたが。

「うーっす来たぞー」

「…客じゃないやつにへいらっしやいませ」は言わん。」

キリトが悪びれる様子もなく入ってくると、エギルは店にいた人を、今日は閉店だ、と言つて追い出した。その後も厳めしい面をしていたが、とある人物の登場でそれはだらしのない顔に変わった。

「お久しぶりです、エギルさん。急なお願いで申し訳ないんですけど、火急に力を貸して

頂きたくて…」

「任せてください。」

そう即座に答えたエギルに、今度買いに来る日をもうちよつと遅らせようかと考えた。

2階に上がり、事件の概要を聞いたエギルは当然かのように尋ねた。

「圏内でHPがゼロになった…デュエルじゃないのは確かなのか」

「デュエルのウィナー表示が数十人でも発見されてない、心当たりもなし、証人の証言で〈睡眠PK〉の件もなし、だ。デュエルは無理と言つて良い」

俺の言葉に、キリトとアスナが頷く。次いで、キリトはウィンドウを操作しながら続けた。

「突発的なデュエルにしては遣り口が複雑だし、事前に計画されたPKだろう。そこで…こいつだ。」

例のロープをキリトが実体化してエギルに渡すと、エギルはそのロープを指でタップした。〈鑑定〉メニューをエギルが選べば、スキルを持つている彼の目には情報が映るだろう。

「…残念ながら、NPCショップの汎用品だな。ランクも高くないが、耐久度は半分ほど減ってる。」

「まあ、ロープに関しちゃそれだけ分かれば充分だろ。…本命はこつちだからな」

続けてキリトが出したのは、例の槍。黒い同一素材の金属で、柄にびっしりと逆棘が生えているのが特徴の武器だ。エギルが鑑定すると、エギルはシステムウインドウを見ながら答えた。

「PC：プレイヤーメイドだ。〈Grimlock〉：〈グリムロック〉だな。聞いたことねえし、少なくとも一線級の刀匠じゃあねえ。固有名は：〈ギルティソーン〉」

罪のイバラとでも訳される武器にしばらく皆が無言だった。人の意思が介入しないシステムのこの世界で、それだけには人の意思があるように思えたからか。

「話を聞きに行くんだけど：何とも、話したくないな。」

「：まあ、情報料を請求されたら折半でいきますよ。まずは生きてるかどうかをへ生命の碑〉で確認してからね」

　　そう言うアスナたちは一度一層に降りるようで、立ち上がり始めた。

「：悪い、ちよつと別行動して良いか。ちよつと確かめたいことがあるんだよ」

「あら、じゃあそつちに行きましようか？」

「いや、もしかしたら空振りになるかも知れないし、そつちはそつちで動いてくれよ。報告はちゃんとするから。明日昼辺りに合流して情報を交換しよう」

　　そう言うアスナ達は渋々と俺の別行動を了承した。アスナ達が転移するのを見送ると、俺はゆつくりと歩き出す。人目が付かない路地に入ると、辺りから5、6人プレ

イヤーが出てきた。

「…やつばな。久しぶりだな、あん時は30人くらいいたけど…また吹っ飛ばされたいのか？DDAは」

DDA：〈聖竜連合〉のプレイヤーが俺を取り囲む。エギルの店に入る前に、何やら嫌な予感がしたので、こうして誘き寄せて見たわけだ。DDAとは昨年のクリスマスにデュエルを20戦程して、それ以来特に仲も良くはないのだが。一人が口を開いた。

「…シュミットさんからの指令だ。『今日の事件の武器を持つてるなら寄越せ。』それだけだ」

「シュミット…ああ、あのランス持ったやつか。あいにく俺は持つてねえよ」

記憶からシュミットを引っ張り出してから答えたが、恐らくこいつらは指令だけ聞いて事情は知らないのだろうか。目の前にいる人物は訝しげな表情をしている。

「…何だよ、本当に持つてねえよ。それでも不満なら、力づくでもいいぜ？俺の二つ名をつけたのはあんたらなんだから、怪我しねえ内に帰った方が身のためだと思うぞ？」

俺の二つ名：〈雷剣〉は、クリスマスに俺と闘ったやつが俺を『雷みたいに剣を振る男がいた』と言ったのが始まりだとアルゴから聞いた。俺と闘ったのはDDAの奴らだけなのだからそれ以外にはあり得ないだろう。

「…退却。」

目の前の男が短く言うと、辺りの団員は素早く捌けていった。それを見届けると、俺は短く息を吐いた。

「シユミット、ね…また新しい人物が出てきたな。」

カインズ、ヨルコ、グリムロック、シユミット。この四人の共通点や今回の事件との関連性。分からないことばかりだ。明日またアスナやキリトと情報を交換しなければならぬだろう。

明日までにもう一度情報を整理しておくか。と慣れない頭を動かし始めた。

翌日、時刻は11時頃。俺は50層主街区にそのまま顔を出した。事前にヨルコに話を聞いたらしいアスナとキリトにこちらも軽く情報を話す。

「やっぱりDDAはアキヤの方にも来てたか。俺の方にも来たよ。シユミット本人だったし、あの武器から情報ももうそんなに取れないだろうから渡したけど」

「まあDDAのそいつが犯人…つてのは無いだろうな。回収するなら最初から持ち去るだろうし、わざわざ回収に来るメリットもない。」

俺とキリトがシユミットが犯人の線を大分薄くした所で、俺はアスナから聞いたギルドのことが気になっていた。

「ギルド〈黄金林檎〉…関係者が全員かつて所属していて、レアアイテムを売りに行った

リーダーの死亡によって解散した…か」

「ええ、死因は〈貫通属性ダメージ〉。恐らく睡眠PKでしょう。関係性は濃厚だと思うわ。…それで、次は圏内PKの手口を検証していかうって話になったところ」

「うーん…それについては俺も気になる点はあるけど、システムに詳しくないと解決できなさそうなんだよな…」

俺の言葉に、キリトはニヤリと笑みを浮かべ、アスナははあ、と憂鬱そうに溜め息を吐いた。キリトは指を鳴らし、得意気に言った。

「さすが、俺たちと同じ結論に着いたな。そこで、スペシャルゲストをここに呼んでるんだ」

「スペシャルゲスト？ システムに詳しい知り合いなんていたか？」

俺が記憶の人物を漁ると、確かに一人思い当たる。しかし、その人物を呼び出すとは、目の前の男はどれだけの度胸があるのだろうか。

「…まさか…〈血盟騎士団長〉とか言わないよな？」

「当たり前よ…はあ…団長を呼び出すなんて…」

アスナがより一層憂鬱そうにする。直属の上司を呼び出すとは気が引ける行為だろう。呼び出したのは恐らくキリトだろう。今回のことが、彼女の今後、負担にならなければいいが…

「…まあ、知識を貸してくれば助かるけどさ。アスナもうちよつと軽く考えようぜ。呼び出したのはキリトなら、全責任はキリトにあるってことで」

「ちよ、おい！何でそうなるんだよ!？」

「いや、俺なら最低でも〈グランザム〉までは出向くぞ。」

そう言うのと、キリトはうつと言葉を詰まらせた。大方ここに呼び寄せたのだろう。煩雑極まるこの街に。

「…ま、まあヒースクリフの分のメシは奢るって言ってるから、それで何とか…」

「へえ。…じゃあ向かおうぜ。流石に待たせるのは気が引けるし」

アルゲードの迷路のような街を、広場目掛けて歩き出したが、この後会う男もまたどうにも苦手なんだよなあ、とどうにも気が進まなかった。

まるで杖でも持つてるのか、というような、魔法使いのようなローブを着て、その男は現れた。S A O最強の男、〈神聖剣〉ヒースクリフ。突然アスナがびしつと敬礼をした。

「突然のお呼び立て、申し訳ありません団長！このバ…いえ、この者がどうしてもと言って聞かないものですから…」

「何、ちよようど昼食にしようと思っていたところだ。かの〈黒の剣士〉キリト君にご馳走

して貰え、更に〈雷剣〉アキヤ君と同席する機会など、そうそうあろうとは思えないしな。しかし、夕方までで頼むよ」

そう滑らかに答えるヒースクリフを見て、キリトは肩をすくめて答えた。

「あんたにはここ、50層のボス戦で10分もタゲ取ってもらった礼をまだしてなかったし。そのついでに、ちょっと興味深い話を聞かせてやるよ」

そう言つて、キリトは歩き出し、俺たちもそれに続く。アルゲードを右往左往すること5分。薄暗い店の前でキリトが止まると、アスナは辺りを見て、店を眺めながら言つた。

「…帰りもちゃんと道案内してよね。わたしもう広場まで戻れないよ」

「俺もだ。やつぱホームでもない覚えてられないなここは」

「不安なら道端のNPCが10コルで広場まで案内してくれるから頼むといい。その金額すら持つてない場合は…」

俺の言葉に注釈を加えたヒースクリフが両掌を持ち上げ、店へと入つていく。それに続いて店を見渡すと、全くの無人。安っぽいテーブルがいくつかと、カウンターがこれまたいくつか。その中の、四人がけのテーブルに座る。俺の隣がヒースクリフなのは気にしないでおこう。アスナが氷水を一口含んで呟いた。

「なんだか…残念会みたくなつてきたんだけど」

「気のせい気のせい。それより、忙しい団長どののためにさっそく本題に入ろうぜ」

キリトが言うと、〈アルゲードそば〉なるものを頼んだ。説明は主にアスナが行い、キリトや俺は多少の補足を入れる程度。

「…そんなわけで、ご面倒おかけしますが、団長のお知恵を拝借できれば、と…」

「ふむ…ではまずはこの二人の意見から聞こう。キリトくんはこの〈圏内殺人〉の手口をどう考えているのかな？」

アスナの締めくくりを聞いたヒースクリフは、まずキリトに話を振ると、キリトは指を三本立てた。

「大まかには三通りだよな。1つ目は正当な圏内デュエルによるもの。2つ目は、既知の手段の組み合わせによるシステム上の抜け道。3つ目は…アンチクリミナルコードを無効化する未知のスキル、あるいはシステム」

「3つ目の可能性は除外してよい。もし君らがこのゲームの開発者なら、そのようなスキルを設定するかね？」

「しないね。フェアじゃない。まず、そんなスキルがあるならデスゲームなんて全員死亡で終わりだ」

キリトの発言に即答したヒースクリフ。その発言にまた即答した俺とテンポよく会話が進む。俺の発言に、ヒースクリフがフツと笑った。

「ほう。では、次はアキやくんの意見をお聞かせ願えるかな。何ともキリトくんとは違う見解がありそうだ」

そう言ったヒースクリフの声に、俺は目の前の二人の顔を一瞥して、水を少し飲んでから話し出した。

「俺が考えた可能性は2つだ。とは言っても、キリトと同じへシステム上の抜け道」とへ未知のスキル。まあ、2つ目は今除外したから無しでいいだろう。」

「…〈圏内デュエル〉の可能性は？」

尋ねたアスナに、俺は首を横に振った。

「デュエルつてのは勝敗を決するもの…つまり、〈win〉と〈lose〉、まあ〈draw〉も含めて、結果を出すものだと考えた。つまり、勝った方にも負けた方にも結果が伝わる位置に表示は出ないとおかしいだろ。カインズの位置は固定されてて、あれだけの人がいて表示が見つけられないならデュエルではないと考えたが。」

「ほう。確かに。ちなみにだが、デュエルのウィナー表示は決闘者二人の中間位置。離れていた場合は双方の至近にウィンドウが表示される。」

ヒースクリフの補足によって、俺の理論が証明されると、残るはへシステムの抜け道〉の線しか残されていないが、やり方事態は闇の中のままだ。

「槍…か。あの槍ってランクはそこまで高くなかったよな、アスナ？」

「ええ…まあ、攻略組の武器よりはかなり劣ると思うけど、それがどうかした？」

「あのショートスピアでガチガチの坦克のHPをどこまで削れたもんかな、って思っ
つゃ。」

俺の言葉に、キリトは少し考えてからその方法を示唆した。

「なるほど。圏外でカインズのHPを全損させてから何らかの手段…回廊結晶とかでテ
レポートして、実際にHPバーが減りきる前に窓からぶら下げる…か。何とも面倒な手
段ではあるけど、どうなんだ？」

「…不可能ではない。が、高ランクでないショートスピアで中層の坦克を1撃死させ
るとするのなら、現時点でレベル100には達しているだろう」

「ひゃくう?! い、いるわけないでしょ。」

素っ頓狂な声を出したアスナに驚くと、キリトは諦め悪く言い返した。

「…ステータスの問題じゃなくて、スキルの強さってセンもあるぜ。例えば、さ…じゃな
い、二人目の〈ユニークスキル〉使いが現れた、とかさ。」

「ふ…もしそんなプレイヤーが存在するのなら、私が真つ先にKOBに勧誘している」

僅かに笑ったヒースクリフの声に、一同無言になった。その瞬間を計ってか偶然か。
店主が〈アルゲードそば〉を四つテーブルに置いてのそのそと戻っていった。

「…なんなの、この料理? ラーメン?」

「…じゃねえのか？」

「似た何かって答えとくよ」

アスナ、俺、キリトの順に声を出し、ヒースクリフは無言で、〈アルゲードそば〉を口に運ぶ。ズルズルという音が暫し無人の店内に響いていた。

「…で、団長どのは何か閃いたことはあるかい？」

「…これはラーメンではない。断じて違う。」

「それに関しては全面的に同意する」

隣の男に、スープまで飲み干しておいてそう言うか、と思いつつも、俺もラーメンではないという件については同意した。ラーメンにしては何とも侘しい味だ。それに続けて、ワリバシを置いたヒースクリフは、続けて話した。

「この偽ラーメンの味の手だけ答えるならば、現時点の材料だけで、〈何が起きたのか〉を断定することは出来ない。だが、言えるとするなら…この事件に関して絶対確実と言えるのは、君らがその眼で見、その耳で聞いたもの…一次情報だけだ。つまり、己の脳がデジタルデータとして受けとることが出来るものが信じることができるものだ」

そう言つて、ヒースクリフは、立ち上がり、ご馳走さまと言つてアルゲードの喧騒へと消えていった。

それから数分。街にいる俺たちは再び話し合うことにした。

「…お前ら、さっきの意味分かった?」

「…うん。アレだわ」

「何となくはな」

キリトの問いにアスナと俺の順で答える。そう言うと、アスナが続けて答えた。

「〈醤油抜ききの東京風しょうゆラーメン〉。だからあんな侘しい味なんだわ。…決めた。わたしいつか必ず醤油を作って見せる」

いきなりの言葉に、俺もキリトも一瞬呆けた。キリトが聞きたいのはそれでは無かったらしく、今度は俺に視線を向けてきた。

「…一次情報だけ信じる事ができるってことは、二次情報…伝聞で聞いた話は鵜呑みにできないって話だろ。」

「ええー?この場合だと二次情報はギルド黄金林檎の件になるけど…ヨルコさんを疑えつてののか?」

「うーん…にしても、材料が足りない。PKにしても、黄金林檎の件についても。」

キリトの疑問に俺がそう答えると、ようやくラーメンの件から考えが離れたらしいアスナが頷いていた。

「…じゃあ、もう一回関係者に直接話を聞きましよう。アキヤくんはヨルコさんに聞き

「たいことがあるなら聞いてきたら？ 私たちはもう一人に聞いてくるから」

「…誰？」

「もちろん、この人から槍をかつぱらってった人よ」

15話『第二の事件』

57層マーテンの宿屋の一室に、変わらずヨルコはいた。話を聞きたい、と言って聞きたはいいが、目新しい情報は得られない。どうしたものか、と考えると、メッセージが届いた。宛先はアスナ。

「…ヨルコさん。シュミット…が会いたいらしいんだが。」

「…はい。大丈夫と伝えてください。」

突然の提案に驚いた様子はあつたものの、ひとまず了承を得たことをそのままキーボードで打ち込んで送信する。十数分後、ドアがコンコンとノックされた。

『キリトです』

「はい、どうぞで」

ヨルコの声にドアが開かれ、キリトとアスナ、そして大男がいた。彼がどうやらシュミットだろう。攻略で何度か見た…：ような気がする。

キリトが先に入り、シュミットとヨルコに向けて話し出した。

「ええと…まず安全のために確認しておくけど、二人とも武器は装備しないこと、そしてウインドウを開かないことを守ってほしい。」

先日の事件があつての提案だろう。二人が了承し、シュミットとアスナが中に入った。ドアの前で止まったアスナが、俺に視線を向けた。次いで、何やら手でサインを送つてきた。

(…見張つてろつてことか)

そう解釈すると、シュミットとヨルコが挨拶を交わし、向かい合つて座る。東側にキリト、西側に俺。ドアの前に立つアスナは侵入者の警戒と部屋全体を見渡す形だろう。

俺はまずシュミットを見た。カインズよりグレードが高いフルプレートアーマー。攻略組でもある彼が、生半可な攻撃で倒れることは無いだろう。

次いでヨルコを見る。詳しい装備は見えづらいが、どうやら防具を着込んではいらうだ。シュミットほどでは無いにしろ、防御力はそれなりにはあるだろう。

しばらくはシュミットをヨルコが褒めるような穏やかなやり取りが続いていたが、緊張気味に座つていたシュミットが鎧を鳴らしながら身を乗り出した。

「何で…何で今更カインズが殺されるんだ!?! あいつが…指輪を奪つたのか? GAのリーダーを殺したのはあいつだったのか!?!」

GA: Golden Apple、〈黄金林檎〉というギルドの略称で、指輪は恐らく以前聞いたレアアイテムのことだろう。それを聞いたヨルコの顔から、笑顔が消え、睨むようにシュミットを見ていた。

「そんなわけない。指輪の売却に反対したのは、コルに変えて無駄遣いするよりもギルドの戦力として有効利用すべきだと思つたからよ。ほんとはリーダーだつてそうしたかつたはずだわ」

「それは…オレだつてそうだつたさ。俺も売却には反対したんだ。だいたい…反対派だけじゃない。売却派にも、売り上げを独占したいと思つた奴がいたかもしれないじゃないか！なの…：グリムロックはどうして今更カインズを…売却に反対した3人を…オレやお前も殺す気なのか!？」

シユミツトの声、表情、仕草。どれを取つても演技には見えない。恐らくだが、この男は無関係だろうと俺は思つた。そこへ、ヨルコが言葉を投げ掛ける。

「まだ、グリムロックがカインズを殺したと決まつた訳じゃないわ。他のメンバーの仕業かもしれないし、もしかしたら——リーダー自信の復讐なのかもしれないじゃない？圈内で人を殺すなんて、普通のプレイヤーにできるわけないんだし」

ゾクツと少し寒気が走つた。俺とは視線が合つてないのにこれなのだから、正面のシユミツトはどれだけぞつとしているのだろうか。ヨルコは立ち上がり、歩きながら話し続けた。

「私、ゆうべ、寝ないで考えた。リーダーを殺したのはギルメンの誰かでありメンバー全員でもあるのよ。指輪がドロップしたとき、投票なんかせずにリーダーの指示に任せれ

ば……うん、リーダーが装備すれば良かったのよ。でも、私たちは皆自分の欲を捨てられずに、自分を強くしたかったの。グリムロツクさんだけはギルドのことを考えて、リーダーに任せると言ったわ。だから、私たちをリーダーの敵として討つ権利がある……」

そこまでの長い言葉を言うと、ヨルコは窓枠に腰かけた。窓は空いており、そこから吹く風がヨルコの濃紺の髪を揺らす。シユミットはというと、俯き、フルプレートアーマーをかたかたと鳴らしている。

「……冗談じゃない、冗談じゃないぞ！今更、半年も経つてから……！お前はそれでいいのかよ、ヨルコ！今まで頑張つて生き抜いてきたのに、こんな、わけも解らない方法で殺されていいのか!？」

シユミットの声が響くと、俺たちの視線はヨルコに集まった。その瞬間。

とん、と軽い音が響いた。次いでヨルコの体がかくりと揺れ、ヨルコは窓枠に手をついた。

何が起きたのか分からなかったが、ヨルコの背中に流れる髪が風でなびくと、ようやく頭が追いついた。ヨルコの背中に刺さった……スローイング・ダガー。

「あ……」

ヨルコの体が窓の奥へと傾いたのを見たアスナの声に、キリトが飛び出す。しかし、

ヨルコの体は戻ってくることは無かった。

「ヨルコさん!!」

キリトの叫びのすぐ後に。ばしゃつという破砕音が聞こえた。今の、音は――

俺も窓に近寄ろうとした瞬間、キリトの後ろから、それを見た。遠くの、同じ高さの建物の屋根に、黒い人影を。キリトも顔を上げて、目視する。

「野郎っ……!!」

「ばっ……!」

俺が制止しようにもコンマ何秒速くキリトは窓から飛び出してしまった。しかし、些か敏捷性が足りなかったのか、向かいの屋根にぶら下がるようになったが、すぐに屋根に飛び乗って人影を追い始めた。

「……無闇に突っ込むんじゃねえバカ野郎……悪いアスナー……あのバカ連れ戻してくる!」

そう言って、俺も窓枠から跳ぶ。筋力寄りのキリトと違って、俺は敏捷寄りのステータス。敏捷性がギリギリ足りたようで、何とか向かいの屋根に跳び移ると、猛然とダッシュを始めた。

ヨルコの防具を貫き、HPを全損させたならば、オレやキリトのような、軽装で盾無し片手剣使いのHPは全損は免れない。

「キリトくん、アキヤくん……ダメよ!」

アスナの制止も俺と同様の物だろう。しかし、仮に俺が止まってもキリトは止まらない。舌打ちをしながら猛然とキリトを追跡する。

「…キリト！無闇に近寄るなよ！」

「…分かつてる！」

前方を走るキリトに声をかけると、どうやらキリトも分かつてはいたようだ。斜め前を走る問題の人影は、懐からあるものを取り出した。ダガーでも抜くのかと思えば背中から剣を抜いたが、男が取り出したのは、青く光る結晶：転移結晶。

だったら、と転移先を聞こうとしたのかもしれないが、キリトは少しだけ距離を詰めた。まだスローイング・ダガーが飛んできても対応できる距離だとは思おうが…

「…！！しまった…！！」

突如として、マーテン全体に鐘が鳴り響いた。それを狙っていたのか、人影は転移結晶を高く掲げた。

「くそっ…！！」

キリトが角度を変え、犯人との距離を猛然と詰める。が、そのまま突きだした剣は空しくも数秒前に人影が立っていた空間を突くだけに終わった。

「ばかつ、無茶しないでよ！」

宿屋に戻った俺とキリトがまず受けたのはアスナの叱責。明らかに俺よりもキリトを見て言っていたのは、キリトが明らかに先行したからか、それとも。

「…奴はテレポートで逃げた。顔や声などの情報は得られなかった。グリムロックだと言うなら男なんだろうが…」

俺が言うのと、ソファアの方でかたかたと鎧を鳴らしていたシュミットが、短く答えた。「…違う。グリムロックはもつと背が高かった。それに、あのフード付きローブは…G Aのリーダーの物だ。さっきのあれは…彼女だ。あれはリーダーの幽霊だ。」

はは、ははははと不気味にシュミットが笑う。それに収まらず、ヒステリックを起こしたのか、笑いながら更に続ける。

「幽霊なら何でもありだ。圏内でPKするなんて楽勝だし、いつそリーダーにSAOのラスボスを倒してもらえばいいんだ。最初からHPが無きや死なないんだから」

尚も笑い続けるシュミットの前に、キリトはあるものを投げた。それは…先程ヨルコの背中に刺さったダガー。それを見て、シュミットの笑い声は止まった。キリトが抑えた声で話し出す。

「幽霊じゃないよ。そのダガーは実在するオブジェクトだ。SAOのサーバーに書き込まれた、何行かのプログラムコードだ。あんたのストレージに入ったままのショートスピアと同じく。信じられなきや、それも持って行って調べるといい」

「いい、いらぬ！ 槍も返す！」

シユミットは慌てながらも、黒いスピアをダガーの横に転がした。そんな時に、俺の視界左上にメツセージアイコンが点滅した。

「…すまん、ちよつとだけ外す」

なるべくシユミットを刺激しないよう抑えた声で、物音も最小限に外に出る。メツセージの宛先を確認すると、そこには。

「クライン…?」

内容は簡潔。最前線にいないようだが何かあったのか、という内容だった。彼の中では俺は最前線から数日姿を消すだけでも心配事になるらしい。

俺は少しやるこゝろがあつて外している、何かあつたら協力してくれるか、というメツセージを返信すると、任せろ！というクラインらしいメツセージが返ってきた。

そこで一区切りつけて中に戻ると、キリト、アスナ、シユミットが立ち上がった。今からこいつをDDA本部まで送っていくんだけど…アキヤ、これ。」

「何だこれ？」

キリトから手渡されたのは、一枚の羊皮紙。紙には、何人かの名前が書かれているようだ。

「ギルド〈黄金林檎〉の名簿だよ。俺とアスナはDDA本部の後、グリムロックの行きつ

けの20層の店に張り込んでみるから…」

「…ああ、〈生命の碑〉で確認してこいつてことか」

「そういうこと。しつかりよろしくね」

アスナに念押しされるように頼まれると、ひとまず俺も転移門広場までは一緒に行くことになった。怯えるシュミットが、あんたも行けるところまでいいから来てくれ、と言ったからだだったが。

3人を見送ると、俺も一層に降りることにした。

「んーと…ggの欄…」

第一層、黒鉄宮の〈生命の碑〉の前で、俺はキリトから貰ったメモを元に、一人一人の名前を探していた。頭文字から探しても、元の数は一万。探すのは少々手間取る。

「グリセルダ…死亡。グリムロック…生存。シュミット…生存…カインズ…」

順に死亡と生存を振り分け、先日死亡したカインズを探す。しかし、俺が見つけた〈カインズ〉は横線は引かれていなかった。

「なっ…カインズは、確かにあの時…」

メモにあるカインズ——〈C a y n z〉には線は引かれていない。今日が4月の23日だから、カインズの欄には〈サクラの月22日〉と記され、横線が引かれているはず

だが…

暫く考えた後、俺は名前を順に見ていく。すると、〈K a i n s〉の文字が目に入った。横線が引かれ、〈サクラの月22日〉の文字。次いでそのまま探すと、〈ヨルコ〉にも線は引かれていなかった。

「圈内殺人で、人は死んでない…？ 反映されてないって線はないだろうし、生きてるのか…？」

暫く悩んでいたが、ひとまずキリトにメッセージを送る。『カインズもヨルコも死んでいない』と送ると、後ろからいきなりばしやつと音が響いた。まさか、と思い振り向くと、初期装備のプレイヤーが話していた。

「びっくりしたー…何で俺のパンいきなり消えたんだよ」

「おまえ、耐久値見てなかったろー。切れるとあんな風にポリゴンになっちゃうんだよ」その声に、俺の思考はフルスロットルで回り始めた。耐久値という言葉に、俺はとある結論を見出だす。

「まさか…あのポリゴンはHPじゃなくて、防具の耐久値切れ？ 体は…転移結晶でも隠し持っていれば飛ばせるか。今までの考えよりは遥かに楽だけど…そんなことをやる意味…それが、〈黄金林檎〉の事件が関係している…？」

その時、先程のメッセージの返信が来た。キリトからのメッセージは、『19層の丘

に、GAのリーダーの墓がありそうだ。シユミットやヨルコがそこにいるだろう。レッドプレイヤーもそこに向かってるかもしれない。俺はすぐに向かう。』

「レッドプレイヤー…：そうか！確かGAのリーダーは〈睡眠PK〉で殺されたって…！」
素早くメツセージを閉じると、俺は走り出した。転移門に半ば飛び込むように、19層の街の名前を叫んだ。

「転移！〈ラーベルグ〉！」

16話 『狂気の殺意』

俺は19層のフィールドを駆けた。とはいっても、地面を、ではなく。木の上を飛ぶように駆ける。

この移動方法は、ある程度敏捷力が無いと出来ないし、慣れないと木から不用意に落ちてダメージを食らう危険性もある。しかし、出来ればモンスターとのエンカウント率は下がり、地形を無視できる可能性があるため、移動手段としては有用だ。

「…あれか…!」

前方の丘に数人の集まりが見えた。そこ目掛け、最後の枝を蹴る。倒れ伏す鎧を着た人物——シユミットの横に着地すると、その側にいたナイフ使いは飛び退いた。目の前の黒いポンチョに視線を向けると、愉しそうに笑っていた。

「…Wow、随分と格好いい登場じゃねえか、〈雷剣〉サマよお。」

「…そつちは随分と場違いじゃねえか? 雨降ってねえのにカッパなんてよ…POH」

軽口を叩くが、この男との関係は——最悪と言つていいだろう。一度話したことはあるが、この男こそがアインクラッド殺人者ギルドラフコフこと〈笑う棺桶〉頭領…POH。〈友切包丁〉という中華包丁のような奴の右手の武器は、攻略組と遜色ない、いわば

〈魔劍〉として恐れられている。

ちらりと横に視線を動かすと、右手に禍々しい形のナイフを持ち、頭陀袋を被った男が目に入る。同じく〈笑う棺桶〉の幹部：ジョニー・ブラック。視界にこそ入っていないが、後ろの男女——ヨルコと、恐らくカインズ——にエストックを向けているのも幹部：ザザ。

「久しぶりだつてのにつれねえじゃねえか、こっちは褒めたつてのによ」

「お前に褒められても嬉しくねえな。まあ、他の二人にも言えたことだけど」

その言葉に、POHの横のジョニー・ブラックがナイフを俺に向けた。頭陀袋から覗かせる目は何とも不気味だ。

「余裕かましてんじゃねーぞ、〈雷劍〉！状況分かつてんのか！」

「…少なくとも袋被つてるお前よりかは周り見えてるし、状況は把握してるさ」

俺の状況：それは絶対的の不利。相手の戦力は〈笑う棺桶〉トップ3。3人とも攻略組に匹敵する戦力ではあるだろう。対して、こちらは俺一人。シュミットはレベルは十分だろうが、麻痺状態では戦えないだろう。

咄嗟に返したものの、今襲われたら勝率は0。その時、足裏に僅かな振動が伝わり、俺は笑みを浮かべた。

「…来たな」

俺の言葉にまずその方向を向いたのはP o Hだった。次いでジョニー・ブラックも同様の方向を向く。

近付くのは、どどどつ、どどどつと言う規則的な音。やがて近付くそれは、馬の足音だと分かる。みるみるその姿を大きくした馬は俺の前で急制動をかけ…その背中から騎手を落とすように下ろした。

「いてっ…ギリギリセーフ、かな」

「本当にギリギリだけだな」

馬から落ちた騎手は、黒の剣士〱キリト。今まで自分を乗せてきた馬を帰すと、目の前のP o Hに向かってややや迫力に欠ける声を出した。

「よう。久しぶりだな、P o H。まだそんな趣味悪い格好してるのか」

「…貴様に言われたくねえな」

P o Hの声が明らかに殺意を孕む。そして、隣のジョニー・ブラックは苛立った声で吼えた。

「ンの野郎…！時間稼ぎだったのか！」

「まあな。中々の名演技だったろ？」

元々俺一人でラフコフ…もといオレンジプレイヤーを相手取れるとは思っていない。となれば俺が取る行動は1つ。同様に向かうと言っていたキリトが来るまでの時間稼

ぎ。他に策もあるが、それも時間がまたかかるものだ。

尚も話そうとするジョニー・ブラックを左手で制したP o Hが話し出した。

「H a a h a、確かに戦況は多少好転したかもしれないねえが…まだ2対3だぜ？俺たちを相手できるのか？」

「…まあ、無理だな」

俺が言うと、P o Hはニヤリと笑った。しかし、P o Hが喋るより早く、隣のキリトが声を出した。

「でも、耐毒P O T飲んできたし、回復結晶もありつたけ持ってきた。俺とアキヤで10…いや、15分は耐えられる。それだけあれば、30人の攻略組がここに着くには十分だ。

30対3を、相手出来るのか？」

「…S u c k」

短く罵ったP o Hが左手の指をパチンと鳴らすと、残りの二人はP o Hの方へと下がった。P o Hは右手の包丁をキリトに向けた。

「…〈黒の剣士〉。貴様は必ず地面に這わせてやる。仲間の血の海でごろごろ無様に転げさせてやる。期待しといてくれよ」

そう言つて、後ろを向いて去っていった。それに続くようにジョニー・ブラックが早速で。ザザも続いたが、数歩進んで振り向いた。

「格好、つけやがって。次は、オレが、馬でお前を、追い回してやる」

「…だつたら練習しろよ。見た目ほど簡単じゃないぜ」

キリトが言葉を返すと、3人は闇へと消えた。索敵エリアからも消えると、俺は横の人物に声をかけた。

「…お前あいつらに何かしたのか？俺より大分憎まれてるっぽいけどな」

「まあ、POHとは一回話したことがあるけど…残りの二人は初だ。…ちよつとクラインにメツセージで広場で待機しといてくれて送る。これ、渡しといてくれ。」

そう言うキリトから預かったのは、解毒ポーシオン。受け取ったものを震えるシュミットの左手に握らせると、シュミットは震えながらもポーシオンを飲み込んだ。それを見届けると、ちょうどキリトがメツセージを打ち終わったようだった。

「また会えて嬉しいよ、ヨルコさん。それに…初めましてと言うべきかな、カインズさん」

キリトの言葉に、ヨルコは苦笑い、カインズは頭を下げた。ヨルコはキリトと話し始めたため、必然的に俺の相手はカインズになる。

「アキヤさん。昨日ぶり、ですね。転移寸前に壁を登ってきた時はトリックが無駄になりそうでビックリしましたよ」

「いや、あん時は完璧にHP減つてると思って無我夢中だったから…まあ、何秒かでも変

わってたら結果は違ったかもな。」

俺が数秒速かったら、カインズのロープを斬っていたか。それとも、カインズの転移の声を聞いたかで状況は変わっただろう。俺が後ろ頭を掻きながら答えると、互いに苦笑いを浮かべた。

「キリト、アキヤ…助けてくれた礼は言うが…何で分かったんだ。あの3人がここを襲ってくるのが」

シユミットの声に、俺は隣のキリトを見た。俺はキリトのメッセージを受けて、レットドブレイヤーによる殺人を阻止できれば、と走ってきただけなのだから。

「判ったって訳じゃない。あり得ると推測したんだ。この3人をまとめて消す可能性がある、とね。おかしいと思ったのはつい30分前だけだな。」

そう置いてから、キリトは推測を説明し始めた。グリムロックがグリセルダをへ笑う棺桶に殺させた半年前の事件、そして…今回、この3人をまとめて消すように仕向けたのもグリムロックであるということ。

それを聞いたヨルコは、崩れそうになった所を隣のカインズに支えられる形になった。

「そんな…グリムロックさんが、私たちを殺そうと…?でも、何で…?」

「—その辺は、直接聞けば分かるだろ」

俺の言葉に、キリトは頷いた。索敵エリアに現れた、二つの点。そちらを眺めると、二人のプレイヤーが丘を登ってきた。

一人は、右手に透き通るような細剣を持ったアスナ。もう一人は帽子に丸眼鏡という風貌の知らない男だが、この場合はグリムロックだろう。グリムロックはやあ、とかつてのメンバーに挨拶をした。

「初めまして、グリムロックさん。俺はキリトつつう……まあ、ただの部外者だけど。去年の秋の〈指輪事件〉……これはあんたが主導していたんだろ？」

キリトの声に、グリムロックは無言だった。まるで、証拠は、とでも言わんばかりの。キリトが推理を述べると、グリムロックは奇妙な笑みを浮かべた。

「なるほど、面白い推理だね、探偵君。でも、残念ながら、1つだけ穴がある。彼女がもし、指輪を装備していたら……？」

「あつ……」

グリムロックの指摘に、アスナが声を漏らす。キリトが言ったのは、〈結婚〉が解除された時のストレージ共通が切れた場合の話。グリムロックが指摘したのは、その逆。ストレージ内に入っていなかったもの……それは、恐らくそのままドロップでもするのだから。

勝ち誇ったかのように、帽子の鍔を軽く持ち上げたグリムロックは、近くのメンバー

や俺たちに向かつて一礼した。

「では、私はこれで失礼させてもらおう…」

「待てよ。ちよつと質問していいか？」

俺の言葉に、グリムロックは少しだけ顔をしかめた。これ以上無駄な真似はするなどでも言いたいのか。俺は特に証拠もない話を少しだけ間を置いてから話し出した。

「…これは知り合いのギルマスに聞いた話なんだけど、ギルドマスターの〈印章〉つてのは分類は〈指輪〉なんだってな。既婚者なら左手に結婚指輪を付けるから、右手に付けるんだらう。」

「…君も中々面白い推理だが、結婚指輪は外せなくとも、ギルドマスターの〈印章〉は外せる。彼女が例の指輪を装備していなかった証拠にはなりはしない」

「…いいえ。なるわ。ここに、あるもの。リーダーの遺品は、発見したプレイヤーの手によつてギルドホームに届けられた。その中でも一つ、皆に内緒で私はここに埋めたの」
グリムロックの指摘を否定したのはヨルコだった。そう言ったヨルコは、墓標を素手で掘り始めた。やがて、その手にあるものが乗せられた。

「…〈永久保存トリンケット〉…」

アスナが答えたそれは、このアインクラッドで唯一無二の、〈耐久値無限〉のもの。中に物を入れることによつて、その物を永久に保存できる小さな箱だ。

中には、小さな二つのリングが入っていた。

「これは、〈黄金林檎〉の印章。私も持つてるから比べればすぐに解るわ。そして、これは——彼女が何時だつて左手の薬指に嵌めてたあなたとの結婚指輪よ、グリムロツク！ あなたの名前も刻んであるわ！この二つがここにあるという事は、リーダーが殺された瞬間、これを装備していたという揺るぎない証よ！違う!?違うというなら反論してみせなさいよ！」

ヨルコの涙混じりの絶叫に、口を開くものはいなかった。その後、グリムロツクは話し始めた。GAのリーダー、グリセルダが現実でも自分の妻であり——この世界に囚われ変わってしまった彼女を、グリムロツクは自分から離れることを恐れ、この世界で殺す道を選んだという話を。

キリトが押し出すようにグリムロツクに声を出した。

「…じゃあ、あなたは、SAOからの解放を願って自分と仲間を鍛えてた奥さんを…言うことを聞かなくなつたから、殺したつていうのか？そんな理由で…」

「そんな理由？違うな、充分すぎる理由だ。君たちもいつか解る、探偵たち。愛情を手に入れ、それが失われようとした時にね。」

グリムロツクの言葉に、素早く答えたのは…アスナだった。

「いいえ、間違っているのはあなたよ、グリムロツクさん。あなたがグリセルダさんに抱

いていたのは愛情じゃない。ただの所有欲だわ。まだ愛しているというのなら…その左手の薬指にはまっつているはずでしょう、結婚指輪が。見せてみなさい」

アスナの言葉に、グリムロックは自分の左手袋を右手で掴んだ…が。そこから動くことはなかった。そのまま静寂が訪れると、それを破ったのは、シユミットだった。

「…この男の処遇は俺たちに任せてくれないか。私刑にかけたりはしないが、罪は償ってもらおう。」

キリトが了承すると、シユミットはグリムロックを立てさせて丘を下る。カインズとヨルコも、キリトと数回会話をして、続いていった。

「あ、アキヤ。このあとメシでも——」

「——転移、ヘラーペルグ」

キリトが振り向くより先に、俺は主街区にワープした。と言うのも。1つ、懸念案件があつたからだつた。

「…あ、おいアキヤ！どうだったんだよ！キリトの野郎全く連絡寄越さねえからよ！待機しっぱなしなんだよ！」

「…やっぱりな…」

転移門に戻ると、俺を出迎えたのはクライン含む十数名。途中、キリトはクラインにメッセージを送ると言って、それからメニユー開いたのを見ていない。様子を見に来た

らこれだ。

俺はクラインに1つ袋を差し出した。

「ひとまずは一件落着。協力は感謝してる。礼は…ほら、コレ」

「んあ？何だ…コル？…随分額がデカイじゃねえか、アキヤよう？」

俺が送った額に違和感を感じたのか、クラインは俺を覗き見るように見た。俺は溜め息を吐き、目の前の野武士に言いはなつた。

「誰がお前にやるって言ったよ…俺の奢りでどつか飲んできやがれ、つてことだよ。」

「…ヒューっ！気前いいじゃねえか、アキヤよお！——よおし、お前エら！急な集合感謝！みんなのお陰で一件落着、今日は飲もうぜ！」

辺りからワツと言う歓声が上がった。こういつたことに關してはこの男は人望も厚いし心配無いだろう。

よつて、この後来るであろう二人と会う心配も無いわけだ。クラインがあこの二人を見たら何と言うかは知らないが。

「おし！もちろんアキヤも行くよな！」

「…あのなあ、事後処理がまだ残ってんだよ。楽しんできてくれ。」

「なーんだよ…それじゃ、また今度な！」

クラインたちが転移門に消えていくと、俺も転移門を起動。降り立ったのは…59

層。

「2日もサボったし…今週中には抜きたいしな。ちよつくらハイペースで取り戻すとするか」

最前線の迷宮区から多くのプレイヤーが戻る中、俺は一人逆に迷宮区へと向かい始めた。

17話 『鍛冶屋』

「どうするかな、これ」

俺は手の中に光る鉱石を見つめてボソリと呟いた。妖しく黒く光る鉱石は、その輝きからもレア物だと解るほど。最前線：65層のバカでかい竜からドロップしたのは良いのだが。

「鍛冶屋…ああ。知り合いにいねえんだよな…」

俺の知り合いと言えば。屈指のソロプレイヤーに、超有名ギルドのサブマス。少数精鋭ギルドのギルマス、商人と坦克のハイブリッド、情報屋：鍛冶屋の知り合いはいない。

NPCの鍛冶屋に頼むのも手だが、こういったレア鉱石の成功率は軒並み低い。折角手に入れたのだから、出来れば武器として使いたいものだ。

「…よう、アキヤ。どうした？」

俺に声をかけてきたのは、先程の知り合いの中ではかなり仲が良い…キリト。俺は率直に聞いた。

「ああ、キリトか。いい鍛冶屋知らないか？」

「鍛冶屋、か。だったらあそこだな。俺から話通しておくよ。良い鍛冶屋なのは間違いないからな」

キリトに教えられたのは、48層へリズベツの水車がある鍛冶屋…へリズベツ武具店。情報を頼りに辿り着くと、ドアを押し開ける。

「いらつしやいませー！リズベツ武具店へようこそー！」

幸いか否か、店内は客らしき人はいなかった。いるのは、カウンター奥に店主と思われる人物のみ。

その店主も頭も目もピンク色に、フリルのエプロンドレスのような格好だ。女性だから違和感はないが、男性だったら俺はすぐに扉を閉めてキリトの人となりを疑うだろう。

「えーと…キリトの紹介で来たんだけど…」

「あ、じゃああんたがアキヤね！あたしはリズベツ。リズでいいわ。」

ハキハキと答えるリズベツは商人としては向いているだろう。しかし、俺の頭はこの人の腕前は如何に、という疑問で覆われている。何せ、鍛冶屋というより喫茶店のウエイトレスの方がまだしっくり来るような格好だ。

「で、今日は何で来たの？メンテ？それともオーダーメイド？」

「…とりあえずメンテで。」

「…了解。じゃあ、武器お預かりします」

急に敬語になったリズに、俺は背中の剣を渡す。本来の目的は違うのだが、まずは鍛冶屋としてどうなのかを見たかった。

リズは奥の工場らしき場所へと向かい始めた。そのリズに向けて、俺は声を出した。

「悪いリズ、作業風景見ていいか？」

「別にいいわよー。邪魔だけはしないでね。」

本人の許可を得て、工場に入ると、中は様々な工具が並び、設備も見た中では中々いい。後は…腕と、その他諸々だ。

「ふーっ…」

リズは大きく息を吐くと、剣を回転砥石にゆっくりと近付けた。火花を散らしながら、剣は砥石の上をゆっくりと滑っていく。やがて剣が砥石から離れると、剣は新品のようにピカピカになっていた。

「…随分真面目にやるんだな。」

「ん？あー…確かに研ぎ上げは砥石に当ててれば終わるんだけど…やっぱり、適当にはやれないわよ。皆これで戦ってるんだもの。」

そう言って、リズは俺に剣を差し出した。俺は剣を受け取って、ようやく合点がいつ

た。

このリズを、キリトが『いい鍛冶屋』と言う理由が。剣にしっかりと向き合う、鍛冶屋としては最上の人だと。

「…悪い、リズ。少しだけ、試すような真似をした。どんな鍛冶屋なのか知りたかったんだ」

「…まあ、そんなことだろうと思ったわ。メンテだったらその辺のNPC鍛冶屋でも失敗しないもの。紹介で来てメンテってそりやないもんね」

どうやら魂胆は筒抜けだったようで、リズは肩をすくめて俺を見た。本当の依頼は、と目で言うように。

「今日来た理由はオーダーメイドを頼みに来たんだ。片手直剣、敏捷寄りの…」

「…あー…」

リズが曖昧な返事をした。何かまずいことを言ったのだろうか、と考えていると、リズは工房から店の方を見た。

「この前までそこに1つあったんだけど…」

「…売れちゃったか？」

「キリトがへし折ってくれちゃったわ」

…あいつは本当に話題には事欠かないやつだ。リズは苦笑い、俺は溜め息をつく。

「と、言うわけで、今手元には無いのよ。金属があれば打てるけど、最近相場も高いのよね」

「…これ、打てるか」

そう言うと、俺は目の前に例の鉱石をオブジェクト化させる。リズは興味津々にその石を覗いていた。

「…初めて見る石。レア鉱石…ね、どう見ても。どこで採ったの?」

「…65層の大型モンスターからドロップした。もう2度と戦いたくねえけどな」

この鉱石をドロップしたのは竜、なのだが。恐ろしく固かった。攻撃は回避出来るものだったからほぼ回避したものの、ダメージが通らないので、30分以上ソードスキルを叩き込んで漸く倒せた。

その言葉に、リズは俺をまじまじと見た。

「あ、あんた…攻略組なの?」

「…まあ、そうだけど。」

一応一層から攻略組としてはいるが、〈ベーター〉と蔑まれ、なおかつここまで殆どソロ攻略。チームワークには難ありの攻略組だろう。

「…ねえ、ちよつと手伝って欲しいんだけど、時間ある?」

「あるけど…どこか行くのか?」

「そう。58層にね」

「鍛冶神の加護を受けし鎚、汝らが巨人を討ちし時その力を分け与えん：ね。初めて知ったな、このクエスト」

「鍛冶スキルが必須で、この階層だからね。中々知ってる人もいないし、知ってても手を出さない人も多いわ」

58層の寂れたNPC鍛冶屋のクエストなのだが、報酬はどうやらハンマーらしい。鍛冶屋として良いハンマーが欲しいのだろう。

「しっかし、キリトは真つ黒だったけど：アキヤは紺色なのね。髪だけ焦げ茶だけど」
「〈隠蔽〉ボーナスが付くから暗い色ばっかりなんだよな。そういうリズはピンクだろ」
「これはアスナがカスタマイズしたのよ！」

あのアスナがねえ、と感心した所で、クエストの洞窟に着いた。俺が攻略したときに無かったことを考えると、どうやらインスタンス・マップらしい。

「俺が前衛で前に出るから、リズは後ろから来てくれ。一体戦ってみて、大丈夫そうだったらリズも戦うか？それとも後ろで見てる？」

「大丈夫そうだったら一応戦うわ。もし少しでも危険があると思ったら止めて。キリトと行ったときはちよつと酷い目にあつたからね」

「おう…了解。じゃあ行くぞ」

背中から剣を抜いて、目の前の洞窟へと足を踏み入れた。

「…リズ、スイッチ行くぞ!」

「オツケー!」

俺が振り下ろされる斧を弾くと、リズが目の前に出て、メイスを振るう。片手棍重攻撃ソードスキル〈ストライク・ハート〉。斧を戻す間もなく、オーク型モンスターは高々と打ち上げられ、空中でポリゴンと化した。

「…ねえ。あたしさっきからトドメしかさしてないんだけど…あんた経験値いらないの?」

リズがそういうのは、SAOの経験値システムのことだろう。パーティーでは戦闘で様々な行動に応じて経験値の分配が異なる。中でも一番分配が多いのはトドメをさした時だ。

俺は剣をしまつて、はつきりと答えた。

「この辺のモンスターじゃ何百体狩ってもレベルは上がらないから、リズが貰ってけよ」
「そんなにレベル高いって…あんたつてもしかして…あの〈雷剣〉?」

「…まあ、そうも呼ばれてる」

攻略組の現状、有名人は〈黒の剣士〉キリト、〈閃光〉アスナ、〈神聖剣〉ヒースクリフなどなど。その中に〈雷剣〉も含まれてはいるらしいのだが、〈雷剣〉はアキヤというのは案外知られていないらしい。

それを言うと、リズはピタリと止まった後、再び俺をまじまじと見ていた。

「へえ…もつとゴリゴリの人かと思ってたわ。エギルみたいな」

「エギル知ってるのか…にしてもあれだと思われるのは嫌だな。」

彼もまた攻略組では有名人ではあるが…いや、インパクトが強すぎて忘れられないのだろう。そう結論付けて、前へ進む。

「と、言うわけでだ。ドンドントドメさしていいから、とつとと終わらせようぜ」

「はいはい」

そのまましばらく進むと、何やら広い部屋があるのに気付いた。その奥にまた部屋があるようで、そこに台座のようなものがある。

「あ、きつとあそこね。」

そう言って進みかけたリズを、俺は左手で止めた。何するのよ、と喚くりズに、俺は。「…まだ〈巨人〉が出てない。出るとしたらその部屋だろう。俺が先に様子を見るから、俺が合図したらリズも入ってきてくれ」

そう言うてから、広い部屋に踏み込むと、そこはまるでアインクラッドのボス部屋の

ような広さだった。辺りを見渡しながら中央付近まで歩くと、ズン、と言う音が聞こえた。次第に大きくなる音に、その方向を見ると：

「巨人……だな。確かに。」

現れたのは、五メートルはあるであろうオーク。斧ではなく棍棒を持ち、中央に大きな目。HPバーが表示され、次いで名前も表示される。

「Cyclops」：えーと：サイクロプス、かな。単眼の巨人だよな、どのゲームでも」

名前を呼んだことで俺を認識したのか、棍棒を振り上げた巨人に向け、俺は剣を抜いた。

18話『新しい剣』

「うーん…」

巨人の棍棒を避けながら、俺は考えていた。巨人の攻撃はかなりのオーバーモーションで、避けるには全く苦勞しない。連撃を加えてあつという間に巨人のHPはレッドゾーン、なのだが。

「…アキヤー！早く倒しちやいなさいよ！」

「…いや、倒したいんだけどな…」

リズの声に曖昧な返事を返す。攻撃の合間を縫って、ソードスキルを起動。片手剣ソードスキル「ヴオーパル・ストライク」。ジェットエンジンのような音を立てて巨人に突き刺さるが…

「やっぱり…減らない」

巨人のHPはレッドゾーンから一向に動かない。この状態になってから早5分。いい加減頭を使わないとクリアは難しそうだ。

ここまで来るのにフラグのようなものはなし、この部屋にもなにもなし。奥の部屋に行こうにも巨人が退かないので何もできない。

「何なんだよこのクエ…?」

そこまで言って、ある言葉を思い出す。それは、クエスト受注後に、リズが言った言葉——鍛冶スキルが必須。あれはクエスト起動のためのものだと思っていたが、まさかここでも…?」

「…リズ!ちよつと一発こいつにぶちかましてくれ!」

「分かったわ!タゲよろしく!」

そう言うのと、リズも部屋の中に踏み込んだ。俺がいる方向と反対方向に走り、巨人の背後へと移動する。

「…せいやあつ!」

片手棍ソードスキルへパワー・ストライクが巨人に見舞われると、巨人のHPは瞬く間に無くなり…大量のポリゴンを散らした。俺は剣を背中に納めると、はあ、と一息ついた。

「まさか鍛冶スキルがここでも必須とは…めんどくさいクエスト作るもんだな」

「もしかしたら鍛冶屋を放置してクエストをクリアさせないための仕組みかもね。報酬の独占とかを防ぐ意味で」

そう言うのと、リズは奥の台座にあるハンマーへと向かった。きらびやかでは無いものの、物としてのクオリティーが高いのは見て解るほどだ。

「えーと…〈グリース・ハンマー〉？グリースって…油だっけ？」

「何で油なんだよ…どれ？」

リズが手に取った報酬であろうハンマーは…〈Greece Hammer〉。確かにグリースと読むのだろうか…

「…多分だけど、これ綴りが違う。このGreeceってのは…英語のギリシャ、じゃなかったかな」

「へえ、ギリシャのハンマー…何か神の加護でもあれば良いわね。」

そう言った瞬間、インスタンスマップが消えたのか、洞窟の中から外へと戻った。

「さて、じゃあ打ってもらおうか。例の鉱石をさ。」

「任しときなさい！ランダムパラメータに多少は左右はされるけど…良いもの、打って見せるわ」

そう言い張ったリズと、リズベツト武器店、その工場へ戻ると、何よりも早く、俺は鉱石を、リズは炉に火を入れた。

さて、どんなものが出来るか。あとはリズに任せるとしよう。このアインクラッドで会った中で、最上の鍛冶屋に。

「ふーっ…よしー」

息を一つ吐いてから、リズはハンマーを振り下ろした。カン、カンという音が、規則的にその音を響かせる。

それが何十回、何百回と繰り返され、漸くその時は来た。徐々に形を変えた鉾石は、細長い剣へと姿を変える。

「…出来たわ。」

「お疲れ。」

リズを労うと、剣をよくよくと見る。両刃のやや細身の直剣で、色は黒紫色。鍔の部分はやや刀身に向かって曲がっており、握りも同色、柄頭はダイヤのような菱形だ。特徴として、シノギの部分に一直線に白く線が入っている。

リズはその剣を手にとると、剣をタップした。

「銘は…へ A b y s s a l l i g h t ね。深淵の光…ってところかしら。一点モノだと思っわ。はい。」

手に持ってみると、細身の剣で、敏捷寄りの俺には中々使い勝手は良さそうだ。振ってみると、重さによって体がブレることも、軽すぎることもない。

「…サンキュ。良い剣だな。お代は…」

「お代ならもらってるわ。これ。」

そう言ってリズが俺に見せたのは、先程のハンマー。どうやらなかなか気に入って

るようだった。そこから鞆も買って、工場から店の方に戻る。

店に戻って装備して入り口に向かおうとしたとき、木造のドアが開かれた。お客さんだな、と思っている…

「リズさん、メンテお願いしまーす…って、あ…アキヤさん!」

「…シリカ?」

ドアから入ってきたのはシリカ。47層の思い出の丘以降会っていなかったが、どうやらこの客だったらしい。リズがドアの前で驚いていたシリカに声をかけた。

「あら、シリカじゃない。アキヤと知り合ってたの?」

「え、ええ。前にキリトさんと一緒に助けてくれたんです。お礼を言いに行こうと思っただんですけど、どこにいるか分からなくて…」

「悪い、あらかた攻略に行ったり素材集めに行ったりしてたから…」

そう言うのと、リズがなーんだ、と腰に手を当てて言った。

「じゃ、ここでフレンド登録しときましようよ。そうすればメッセージはいつでも飛ばせるでしょ?あたしもアキヤとはフレンドになっておきたかったし。」

「あ、そうですね!お願いします!」

目の前にフレンド申請のウィンドウが2つ現れる。リズの申請に○ボタンを押そうとして…手が一瞬止まった。それを見て、リズは。

「…大丈夫よ、あんたが〈ピーター〉とかって呼ばれてたことは知ってたわ。」
「…知ってたのか」

「そりやあね。一層の時とかは噂もあつたし、ここに攻略組も来ない訳じゃあないしね。でも、あんたが何と呼ばれてようと、関係ない。…ごめんね、あたしもアキヤをちよつと試した。どんな人か知りたかつたから。それも踏まえて、フレンドになりたいって言ったの」

横を見れば、シリカもうんうんと頷いている。それを聞いて、二人の目を見て。俺はゆつくりと○ボタンを押した。

「…ま、それにお得意様になつてもらえれば全然。鞆代くらいはサービスするわよ」
「…へえ。じゃあ今度はメンテ頼みに来るか」

俺がそう言うのと、シリカが俺の顔を見てコソリと言つた。

「…気を付けて下さいね。リズさん、時々ぼつたくりみたいな金額取りますから」
「聞こえてるわよー、シリカ。メンテ代ちよつと値上げしようかしら?」

「ふえつ!? す、すみませーん!」

どうしようかなー、というリズと、お願いします! と頼み込むシリカ。その光景は、デスゲームとはとても思えなくて。俺は僅かに微笑むと、店のドアに向かつた。

「じゃあな、二人とも。何かあつたらメッセくれ。」

「また来なさいよ、アキヤ。メンテでも鉾石でも持つてきなさい」

「アキヤさん、攻略頑張つて下さい！」

リズとシリカの声にもちろん、と返して、俺は静かにドアを開いて外に出た。

「さて、試し斬りといきますか。」

65層突破に向けて、俺は背中新しい剣の柄をそつと撫でた。

19話 『馴染みの顔ぶれ』

「あいつ…どうやって動いてるんだろうなあ」

腕を組んでぼそりと呟いた声に帰ってくる声はない。最前線…74層迷宮区。ソロプレイヤーということもあり、辺りは静かだ。目の前からカシャンと言う音が時折聞こえる以外は。

目の前のモンスターにフォーカスを当てるが、どう見ても動いてるカラクリは分からない。学校にあるような全身骨格が糸も何もなしに直剣を持つて動いているのだ。しばらく眺めていると、全身骨格——モンスター名〈デモニッシュ・サーバント〉はあるはずのない眼を俺に向けたような気がした。

「おっと、気付かれたか。まあ、逃げる気もねえけどよ」

背中から愛剣を抜き放つと、構える。とは言っても、自然体で、左足を前にやや半身。剣先は右足より少し離れたところの地面すれすれに下ろす。

「…来いよ」

「いゝるるるるるるうー」

俺の声に反応したのか定かではないが、骸骨は——どこから声を出しているのか——

唸った。骸骨が持つ直剣が光を灯す。片手剣ソードスキル〈シャープネイル〉。隙の少ない三連撃として愛用する人が多いこのソードスキルだが、言い返せば、相手が使ったらなんとも厄介なソードスキルだ。

何とかステップ回避するが、三連撃目が肩口を掠めた。HPバーが僅かに減少する。「よっー」

反撃とばかりに骸骨に攻撃の剣を振るう。片手剣ソードスキルへホリゾンタル・アーク〈が骸骨のHPを三割ほど削る。

ここで二人ともソードスキル特有の技後硬直に陥る。技の発生は相手が先だが、連撃数はこちらが少ない。連撃数が少ないほど硬直も短い…と考えた所で硬直が解ける。コンマ何秒という差で骸骨も動き出す。

骸骨は剣を振るう。ソードスキルでもない袈裟斬りを避け、再びソードスキルをカウンターのよう発動。片手剣ソードスキル〈デッドリー・シンズ〉。七連撃を骸骨に叩き込むと、骸骨はポリゴンを撒き散らしてその姿を消した。

「ふう…一応回復しとくか。えーと…ポーションは…ん？」

約7割となったHPを回復しようとメニューを開き、アイテム欄を漁る。様々な素材アイテムだったりドロップ品はごちゃごちゃとあるが、肝心のポーションは見当たらない。

「…戻るかな。」

既に迷宮区をあらかたマッピングし終わったので今日は終わることにして、ポーションを買いに行くことにした。74層の街で買おうかと考えたが…50層の故買屋の顔が浮かんだ。

「…そっちは、最近顔出してねえ。そっちにするか。」

故買屋のエギルの所に行つてない理由はいくつかある。ストレージが容量いっぱいになったら売りに行こうと考えてたり、50層の道が複雑すぎて覚えてないので、手近なNPCの店で済ましたりなど。

迷宮区の今まで来た道に戻ることにした俺は、とりあえず敵とのエンカウントを最小にして、安全第一で迷宮区を出ることにした。

主街区まで無事に抜けると、転移門を経由して、50層へアルゲードに着いた。多少迷いながらも何とか目的地の故買屋に着くと、そこには見知った先客がいた。

「よう、久しぶりだな、アキヤ」

「お、アキヤ。」

店内で色黒巨漢のエギルと交渉中なのか、カウンターに寄りかかるように黒の剣士がキリトは立っていた。近付いてキリトと向かい合うようにカウンターに肘をつく。

「久しぶりなのは否定しねえ。それが終わったたら俺も買い取り頼む」

「おうよ。…そうだ、アキヤも見ろよこれ。良いよな、キリトよ?」

キリトが頷いたのを確認してから、顔をそちらに向ける。キリトによって可視化されたウインドウを見ると、〈ラグーラビツトの肉〉と表示されていた。

「これって確か…S級食材だったっけか。お前が食べれば良いんじゃないの?」

「いや、確かに食いてえけど、これを調理できる程料理スキル上げてるやつなんて…」

この世界の料理の上手い下手はスキルによって決まる。料理スキルは熟練度上げが面倒だと聞いたこともあるし、そこまで上げている奴、というのは専門職か、あるいは…

そこまで考えた時、キリトの肩に手が乗せられた。そして、穏やかな声で、その声は発せられた。

「キリト君」

声に目をそちらに向けると、栗色のロングヘアが視界に映った。さらに白と赤の騎士装が映えるその女性——アスナ。

キリトは乗せられたアスナの左手を掴むと、振り返り様に言った。

「シェフ捕獲」

「な、何よ…あ、アキヤ君。」

キリトに左手を掴まれているので、右手でひらひらと手を振るアスナ。俺はちらりとアスナの後ろの二人を見ると、無愛想に返した。

「…よう、〈閃光〉」

そう返すと、アスナは一瞬不機嫌そうな顔を見せたが、追求はしなかった。

俺も普段はアスナのことを〈アスナ〉と呼ぶ。が、他に初対面の人がいたり、その他事情があれば〈閃光〉や〈副団長〉などと呼ぶときもある。

「…で、何よ、シエフがどうのこうのつて?」

「あ、そうだ。今料理スキルどのへん?」

キリトの言葉に、アスナは得意気な顔を浮かべた。

「聞いて驚きなさい、先週に〈完全習得〉したわ」

「なぬっ…その腕を見込んで頼みがある。」

キリトが可視化したウィンドウをアスナに見せると、アスナは驚きに目を見張っていた。次いで、キリトを見て詰め寄るように問い詰めた。

「(…これって…S級食材!?)」

「取引だ。こいつを調理してくれたら一口…」

「は・ん・ぶ・ん!」

半ば脅されるようにキリトが頷くと、アスナはガッツポーズを見せた。そしてキリト

は振り向いてエギルを見た。

「悪いな、そんな訳で取引は中止だ。」

「いや、それはいいけどよ…。なあ、オレたちダチだよな？な？オレにも味見ぐらい…。」
「感想を800字以内で書いてきてやるよ」

そりやあないだろ、とまるでこの世の終わりかとも思えるエギルの声に思わず笑いそうになるのを堪えると、店の外に向かおうとしていたキリトの袖をアスナが掴んだ。

「料理はいいけど、どこでするつもりなのよ？食材に免じてわたしの部屋を提供してあげてもいいけど。」

さらりと凄まじいことをいうアスナに、俺は大胆だなあ、と思っていると、キリトはどうやらアスナの言葉を理解するのにだいぶラグっているようだ。それを気にせず、アスナは後ろの二人に向き直った。

「今日はここから直接へセルムブルグへまで転移するから、護衛はもういいです、お疲れ様」

「ア…アスナ様！こんなスラムに足をお運びになるだけに留まらず、素性の知れぬ奴をご自宅に伴うなどと、と、とんでもない事です！」

叫んだのは、後ろの長髪の男。白と赤の騎士装からみてアスナと同じへ血盟騎士団…

K o Bの連中だろうが。〈様〉を付ける奴は初めて会うかも知れない。当のアスナも相当にうんざりとしているようで。

「このヒトは、素性はともかく腕だけは確かだわ。多分あなたより10はレベルが上よ、クラデイル」

「な、何を馬鹿な！私がこんな奴に劣るなどと……———そうか……手前、〈ビーター〉だろ！」

クラデイルが言い放つ。それに対し俺はああ、やつぱりな、と言う感想が浮かんだ。かのビーター騒動からおおよそ2年の月日が経っても、まだいるのだ。〈ビーター〉をこう言った話し合いに出す輩は。キリトが口を開きかけた時、俺は喚いたクラデイルという輩に言い放った。

「あいにく、〈ビーター〉は俺だ。どこで聞いたかは知らねえけど、どこの誰かくらい確認してから話せよ」

その言葉に、クラデイルは黙った。まあ、あれだけ自信満々に言ったのが外れたのだからしょうがないか。

そんなクラデイルに、俺は嘲るように両の掌を上に向けて言った。

「そう言った情報の誤差が、今後に響いてくるつての、覚えといた方がいいぜ？ 攻略組トップギルドに所属してても、名ばかりじゃあたかが知れてるな」

「…なんだと、貴様ア！」

クラディールはつかつかと俺に詰め寄る。思った通り、こいつは1つ苛立つと視界が狭くなるタイプだ。猪突猛進といえば良いだろうか。

それなら、と俺は下ろしている左手の人差し指を軽く動かす。『早く行け』のサインだ。アスナが気付いたのか、キリトを引いてゆつくりと動き出した。

「もう一回言ってみろ貴様ア！私は栄光ある〈血盟騎士団〉の団員だぞ！」

「何が団員だよ。副団長に呆れられてる団員がどこにいる。それに…」

ちらりとクラディールの後ろに視線を向けるが、そこには誰もいなかった。もう一人の護衛はどうやらアスナの命令に従ったようだ。

「…さっさと帰りやがれ。〈閃光〉がいないんじや俺とお前の喧嘩にしかならねえぞ。」

その声に、クラディールは後ろを向いて、ギリギリと歯を食い縛った。次いで、白のマントを翻してすたすたと出ていった。

俺はカウンターに若干意気消沈しているエギルに声をかけた。

「…悪いな。騒がせた」

「なあに。あのくらいなら良いってことよ。…さして、買い取りだったか」

「ああ。あと、ポーションくれ。」

トレードウィンドウを表示させて、エギルの鑑定を待つ。カウンターに寄っ掛かりな

がら待っていると。

「…なあ。何でアスナのことネームで呼ばねえんだ？」

「んあ？ ああ…ああいう奴等がいるからだよ。仲が悪いようにしといた方が色々都合が良いんだ。まあ俺が粗方のギルドと仲が悪いんだけどよ」

俺が仲が良いギルドというと、クラインの所の〈風林火山〉くらいで、残りは個人として仲が良い人はいても、ギルド全体としてはそこまで、という所が多い。

アスナは現状攻略を指揮する身。俺のようなはぐれ者よりも、ギルド間との繋がりが重要になるだろう。それなら、と俺は仲が悪いように振る舞っている。

「ま、大方このままソロだろうな。俺を迎えたいなんてかなりの変人ギルマスでもない限りねえだろ」

「おいおい…無理すんなよ？ ほら、料金だ。」

そう言って提示された金額に目を下ろすと、それなりの金額が表示される。OK、と取引を終わらせると、俺はカウンターからしばらくぶりに離れる。

「…ま、安全第一でやるさ。騒いだ詫びは今後何かで返すからよ」

「いいつてのによ。…毎度あり！」

店の外に出ると、既に日は暮れかかっていた。明日また迷宮区に行くか、と心の中で確認すると、帰路に入った。

20話『悪魔と振るう剣』

翌日、74層迷宮区へと足を運ぶ。出てくるモンスターはトカゲ男だったり、昨日のような骸骨だったり、種類は様々だ。戦闘を何度かこなすと、迷宮区に所々点在する安全地帯に足を踏み入れた。

「よう、アキヤ。お前エも久しぶりじゃねーか。」

「クライン？お前エもって…」

入った瞬間に俺に声をかけたのは、攻略組の中では少数精鋭として名高いギルド、〈風林火山〉のリーダー、クライン。この男ともまあ長い付き合いになってきた。

お前も、と言ったクラインの後ろを覗くと、そこには〈風林火山〉の頼もしい連中が集まっている。そして、その後ろに見えた、黒づくめと、白と赤の騎士装。

「ああ、なるほど…あいつらもいるわけか」

「まあな。オレたちも今会ったばっかなんだけどよ」

そう言うクラインや、〈風林火山〉の連中と挨拶を交わしながら奥に進むと、二人も俺に気付いたようで、片手を上げてひらひらと振った。

「お、アキヤ。昨日ぶり。」

「アキヤくん。昨日はありがとうね。」

キリトとアスナ。昨日も会ったが、今日も一緒だということは、どちらかが誘った：恐らくはアスナか。

「よ、キリトに〈アスナ〉。相変わらず仲が良いことで。」

「…そ、そう？あ、でもしばらくパーティー組むことにしたのよ。しばらくぶりに。」

思えば、一面と向かってアスナの名前を呼んだのは久しぶりだったかも知れない…と思いつ返す。目の前のアスナが嬉しそうなのは、キリトとパーティーを組めたのが嬉しいのもあるだろうが。

横のキリトが今日だけじゃないのか…と溢していたのは聞かなかったことにしよう。

「ま、良いんじゃないか。ソロプレイよりは安全だしよ」

「お前に言われてもなあ…」

「うるせえ」

キリトの文句をピシヤリと断ち切る。俺がソロプレイを選んで既に2年近くになるが、パーティープレイはボス戦以外には殆ど組んでいない。誘われることもあまりないのがあるのだが。

「で、ここに何やってんだよ？」

「ああ、〈軍〉の連中がさっきここに来ただけ…何か無茶な感じがしてさ。様子を見

に行くかどうか話してただけ……」

「……〈軍〉？」

キリトの話に出てきた、〈軍〉とプレイヤーに称される、正式名はアインクラッド解放軍。現在は低層フロアの治安維持に務めている。かつてはボス戦にも出ることもあったが、25層のボス戦で人員を大きく減らしたのをきっかけに、現在の形を取るようになった。

「何で今さら……まあ、様子は見に行っても良いんじゃないやねえか？無茶そうだったんだろ？」

「よし、じゃあ行くとしようぜ。もちろん、アキヤも行くだろ？」

「……まあ、いいけど」

クラインの声に、陣列を組む。先頭にキリト、真ん中辺りにクラインとアスナ、最後に俺が陣取る。装備を整えて前を見ると、クラインがアスナに話しかけてるのが見えた。

「あー、そのお……アスナさん。ええつとですな……アイツの、キリトのこと、宜しく頼みます。口下手で、無愛想で、戦闘マニアのバカタレですが」

「な、何を言っとるんだお前は！」

キリトが猛然とバックダッシュして、クラインのバンダナの後ろを掴んだ。クラインは首を傾けたまま、顎の髭を擦りながらキリトに答えた。

「だ、だってよう。おめえがまた誰かとコンビ組むなんてよう。たとえ美人の色香に感つたにしても大した進歩だからよう…」

「ま、感つてない！」

キリトがぐるりと回つて、上階へと続く通路へと歩き出すと、アスナが任されました、と言つてるのが聞こえた。それを聞いたクラインは後ろの俺に声をかけてきた。

「羨ましいねえ。なあ、アキヤよ。お前もそのままソロプレイはきつくなるだろ？誰かとコンビ組むなりパーティー組むなりした方がいいぜ？アテが無かったらウチのギルドにいつでも来いよ」

「…まあ、考えとく。てか早く歩けよ。」

クラインが後ろを向きながら歩いているせいで、キリトとの距離が開き始めている。おっと、と歩調を早めたクラインの後ろを続けて歩く。

(コンビ、ねえ…想像できねえなあ)

ソロプレイがきつくなるのは事実だが、想像できないものを考えてもしようがない。一旦思考を目の前の事柄のみにシフトし、前の背中を追つた。

敵の群れに当たって、最上階に着いたのは30分後だった。クラインが辺りを見渡しながらおどけたような声を出した。

「ひよつとしてもうアイテムで帰っちゃまったんじゃねえ？」

「…なら良いけどな…」

俺が不安そうに溢した理由。それは、モンスターの量。先程の群れ以外、目立ったモンスターと遭遇していない。つまり：誰かが通った可能性があるのだ。

長い回廊を進んでいると、回廊内に音が響いた。その、音は。

「あああああ…」

かすかにしか聞こえなかったが、それは確かに：悲鳴だった。キリトとアスナが走り出す。俺もクラインを抜き去って、前の二人を追従する。

目の前に見えたのは、大きな扉。ボス部屋の証とも言える扉は大きく開いていた。その奥で松明に照らされる異形が見て取れた。

「バカツ…！」

かすかに聞こえたアスナの声。その声とほぼ同時に、前の二人がスピードを上げる。俺も同様に加速すると、一気にキリトの横まで駆ける。

3人が並んで扉の手前で減速をかけ、扉の入り口ギリギリで何とか停止した。

「おい！大丈夫か！」

キリトが叫ぶと同時に、俺は中を見た。地獄絵図と称するのが正しいのだろう。中では、悪魔とも言うべきボスが〈軍〉の連中を蹂躪している様が見て取れた。俺は中のプレイヤーのHPが残り僅かなのを見て、声を張り上げた。

「…早く転移して逃げろ！」

「だめだ…：く…：クリスタルが使えない！」

その男が答えたのは、俺達から言葉を奪うには充分だった。〈結晶無効化空間〉と呼ばれる、転移、回復などの結晶が使えない空間。ボス部屋の中がそれと言うと言うのは今までかつてない。

「何を言うか…：我々解放軍に撤退の2文字はあり得ない！戦え！戦うんだ…：全員、突撃！」

「何言つてやがるんだあの野郎…！」

誰が見ても、今の状態で戦うべきではないのは明らか。助けに行こうにも、〈結晶無効化空間〉では死者が出る可能性はある。

クラインたちが追い付いてきた。今日の〈風林火山〉はクラインを含めて6人。俺とキリト、アスナを含めてもたったの9人だ。とても助けに入れる状況ではない。

あれやこれやと案が探すも、どれも実行には移しがたい…その時だった。ボスの斬馬刀らしき武器が、一人のプレイヤーをこちらまで飛ばしてきた。体格からして、先程突

撃を命令したプレイヤーか。

——あり得ない。

それがそのプレイヤーの最後だった。無音とも言える眩きを言うと、そのプレイヤーの体は無数のポリゴン片となって四散した。

「だめ……だめよ……」

震える声はキリトの向こう側、アスナのものだった。細剣の柄に向けてだんだんと手が登ってゆく。俺は右隣のキリトに声を出した。

「キリト！アスナを……！」

「……っ！」

言葉の途中でキリトも気付いたのか、アスナに手を伸ばした。しかし、一瞬だけ、遅かった。

「だめ——ッ！」

「アスナッ！」

絶叫と共に、アスナは駆け出した。それに続くようにして、キリトも中へと駆け出す。

「くっ……！」

「どうとでもなりやがれ！」

俺とクラインも抜刀して続いた。アスナは空中から、ボスの背中に一撃を放った。し

かし、ボスのHPはあまり減っていない。さらに、タゲがアスナに移ったのか、アスナ目掛けて斬馬刀を降り下ろした。避けたアスナだが、体勢を崩し、倒れ込む。そこへ、もう一度斬馬刀は振るわれる。

「アスナ——ッ！」

間一髪、キリトが間に飛び込み、僅かに軌道を逸らした。アスナのすぐそばに斬馬刀が孔を穿つ。その間に、俺はボスを回り込むように走る。

「…はあっ！」

キリトたちとも、〈軍〉の連中とも離れた地点な陣取った俺は、短い気合いと共に、俺はソードスキルを叩き込む。片手剣ソードスキル〈サベージ・フルクラム〉。四連撃をボスに叩き込むと、HPが多少減った。そして。

「…今度は俺か！」

タゲはどうやら俺に移ったのか、ボスはこちらを向いた。振るわれる斬馬刀を紙一重で避けると、近くの地面に先程と同じ孔が穿たれ、仮想の冷や汗を流す。

「アキヤ！十秒持ちこたえてくれ！」

「…くそっ！…十秒だけだぞ！アスナとクラインはタゲが移らない程度に攻撃してくれ！」

キリトの言葉に何とか返すと、俺はボスの斬馬刀を見据えた。元々回避やパリイは得

意だが、ここまでギリギリなのはやりたくないもの。しかし、俺より細い武器を使っているアスナやクラインにやらせるのは更に酷というものだろう。

「グアアアアッ!!」

「やべっ……!」

ボスが振り上げた両手剣が横に振るわれる。その行動に俺が取った行動は…勢い良く前に走った。直立しているボスに肉薄すると、通常攻撃で数発打ち込む。

次いで、左手が俺を掴もうと迫る。それを俺はボスの体を蹴って宙返りの要領で離れて避ける。

「まだか、と思いながら唸るボスの両手剣を何とか捌くと、後ろから声が聞こえた。

「いいぞー!」

「このっ……スイッチー!」

悪魔の剣を無理矢理に弾くと、キリトが前に出る。右手にはいつもの黒い剣。そして…背中に、白い剣を背負って。

ボスのHPを削ったのは…その、二本目の剣だった。右手に黒、左手に白の剣を持ったキリトが、堂々と立っていた。

「グオオオオ!!」

ボスが振りかぶった剣に、キリトは動かなかった。両手の剣でしっかりと受け止め、

弾き返した。そして。

「うおおおあああ!!」

絶叫と共に、キリトの二本の剣が空間を焼くように振るわれる。見たことのないソードスキル。

「何だよあれ……っておいアキヤ!?危ねえぞ!」

クラインの制止も意にも介さず、俺は走り出す。確かに、キリトの二本の剣が振るわれる空間に入るのは無謀だと思っだろう。

俺もそれは重々承知していた。目の前で高速に振るわれる剣技にはとても参入する気にはなれない。だから。

「……やらせる、かあああ!」

俺が狙っているのは、ボスの両手剣。ボスが振り上げ、光を灯す——その一瞬。

その瞬間、俺は跳ぶ。敏捷ステータス全開で、高々と。そして、些か不安定ではあるものの、空中でソードスキルを発動。片手剣ソードスキル〈ヴオーパル・ストライク〉。ボスの両手剣と盛大な音を立てて衝突すると、ボスの両手剣の光を消し去った。

「……らあああああ!」

俺が空中で聞いたキリトの声の後、ボスの体は大きくのけぞった。直後、大量のポリゴンを撒き散らして、74層ボス：〈The Greameyes〉は四散した。

「勝った……のか」

HPを確認すると、黄色の光を保っていた。青いポリゴンを掻き分けるように着地し、振り向くと、そこに見えたのは。

二刀を持ったまま倒れ伏したキリトにアスナが駆け寄る所だった。

21話 『二人目のユニークスキル』

「キリトくん！キリトくん！」

アスナが呼びかけながら抱き抱えると、キリトはすぐに目を覚ました。恐らく極限の集中状態が終わったことによる一時的なものだろう。休めば問題はないはずだ。

「バカっ……！無茶して……！」

「……あんまり締め付けると、俺のHPがなくなるぞ」

そう言うと、キリトはこちらを見た。俺を見ると、軽く笑みを浮かべた。

「アキヤ、最後ありがとな。あれが無かったら俺は今ここにいないかもしれない」

「……そんなことはねえよ。俺の手助けが無くてもお前なら勝てたと思うぜ。いいからとつとと回復しやがれ」

俺が言うと同時に、アスナがキリトの口に小瓶を突っ込んだ。キリトが飲み干すと、アスナはキリトの肩に沈み込むように突っ伏した。

クラインがこちらに寄ってきた。〈風林火山〉の連中も後ろに続いている。

「生き残った軍の連中の回復は済ませたが、コーバツツとあと二人死んだ……こんなのが攻略って言えるかよ。死んじまっちゃ何にもなんねえだろうが……」

そこで一度切ったクラインは首を振り、切り替えるようにキリトに聞いた。

「そりやあそうと、オメエ何だよさつきのは!?」

「…言わなきやダメか?」

「つたりめえだ!見たことねえぞあんなの!」

一瞬の沈黙。キリトは少し控えめに答えた。

「…エクストラスキルだよ。へ二刀流」

「しゅ、出現条件は」

「解つてりやもう公開してる」

そうだろうなあ、と唸るクラインに、俺も同感だった。クラインの〈カタナ〉や〈体術〉を含むエクストラスキルは大まかにはあるが条件は明らかになっている。例外が、ユニークスキル。ヒースクリフの〈神聖剣〉だ。今までの男のみとされてきたユニークスキル使いの二人目が目の前に現れた訳だ。

「つたく、水臭えなあキリト。そんなすげえウラワザ黙ってるなんてよう」

「スキルの出し方が判つてれば隠したりしないさ。でもさっぱり心当たりがないんだ」

ふむ、とクラインは大きく頷いた。そして、目の前の二人をにやりと笑う。

「ネットゲーマーは嫉妬深いからな。オレは人間ができてくるからともかく、妬み嫉みはそりやああるだろうなあ。それに…まあ、苦勞も修行のうちと思つて頑張りたまえ、若

者よ」

「勝手なことを…」

そう言つて、クラインは〈軍〉の方へ向かった。俺はキリトに聞いた。

「俺はこの後75層の転移門アクティベートしに行くけど…キリトはどうする？文句なしにMVPだしやるか？」

「いや、任せるよ。俺はもうヘトヘトだ」

俺が振り向くと、〈軍〉の連中に話をつけたらしいクラインと合流し、奥の扉へと向かうと、扉の前でクラインは振り返った。

「その…キリトよ。おめえがよ、軍の連中を助けに飛び込んでいった時な…オレあ、なんつうか嬉しかったよ。そんだけだ、またな」

そう言つて、扉を開けて、75層へと向かう。

何事もなく主街区に着くと、特にどこかに寄ることもなく転移門に到着した。

「ほれ、アキヤ。お前がやれよ。キリトを抜けばお前が今日のMVPだからよ。」

「…んじゃ…」

クラインの提案に、俺が転移門に触る。すると、転移門は光を灯した。アクティベートされた証だ。

「…うっし！じゃあ75層攻略も頑張ろうぜ！今日はゆっくりして、明日からな！」

クラインの一声に、次々と転移門に〈風林火山〉の連中は消えていった。クラインもやがて転移門に消えていき、俺は75層転移門近くの柱に寄っ掛かった。

「やっと、4分の3…か」

今回はキリトがいたから何とか勝てた。50層ではヒースクリフが敵のタゲを取ってくれたから勝てた。こうして考えると、〈ユニークスキル〉使いが今後の戦況を左右するだろう。あの二人の戦力が不可欠になる。

「大変だねえ…つと、アルゴに一応75層開通したつて送るか…」

アルゴにメッセージを端的に送ると、俺も今日は休もう、とねぐらへと足を進ませた。

翌日。48層〈リンダース〉にある〈ヘリズベット武具店〉に俺は来ていた。昨日のボス戦で耐久値を大幅に減らした剣のメンテに来ていたのである。

「…はい、終わりー!」

「サンキュ。しつかし、すげえ騒ぎだな…」

リズから剣を受けとり、お代を渡す。昨日のことは瞬く間にニュースとなり、アインクラウドではその話題でもちきりだ。

「まあそうでしょうね。『軍』の大部隊を全滅させた悪魔!それを単独撃破した二刀流使いの50連撃!』とか言われてれば。」

「大部分は合ってるけど50連撃は明らかに嘘だな。行っても20位じゃなかったか？よくは見てねえけど」

さて、と出口へ向かう。リズはそんな俺にまた来なさいよ、といつも通りの挨拶をした。

リズに別れを告げ、俺は50層へと向かう。フレンドのキリトの位置を追跡すると、どうやらエギルの店にいるようだ。

「…シケ込んだか」

これだけ有名になれば逃げるのは必至。大方エギルの店の2階にでも逃げ込んだのだろうと推測し、48層の転移門に向かった。

50層が煩雑しているのはいつものことだが、先日訪れた雑貨屋に顔を出すと、店主はいなかった。予想通り2階にいるらしい。まあノックも要らないか、と思いながらドアを開けると。

「…するか！」

「おわっ…と」

目の前に飛んできたものを何とかキャッチする。紫色の障壁が〈圏内〉だと言うことを告げるが、キャッチしたため元々ダメージはない。

「…ティーカップ？」

「わ、悪い、アキヤ」

飛んできたのはカップ。声の方向を見ると、噂の人物…キリトが手を挙げて謝っていた。こちらを後ろ向きに見るのはエギル。どうやら鑑定の途中だったようだ。

「おう、アキヤ。今日はどうした？」

「買い取りを頼みに来たんだが…今途中か。じゃあそれ終わったら頼む」

エギルにそう返すと、ティーカップを机の上に置き、俺はキリトと同じテーブルに腰かけた。

「よう、有名人」

「勘弁してくれ…転移結晶まで使って逃げてきたんだから。やっぱすげえ田舎フロアの物件探しとくか…」

そうぼやくキリトだが、ここから動く気配はない。そういえば、と昨日の連れの話振ってみた。

「アスナは？」

「ギルドに休暇届けを出しに行っただけ…待ち合わせの時間からはだいぶ経ってるんだよ。やっぱ付いてった方が良かったかな」

なるほど、と答えると同時に、階段の方から音がした。勢いよく扉が開かれる。

「よ、アスナ…」

キリトの声がやや落ち気味だったことに、俺もそちらを見た。そこに立つアスナの顔はやや青ざめていて、平常とは言いがたい。

「キリトくん…どうしよう、大変なことになっちゃった…」

「…俺たちは外すか、エギル。ついでに下で買い取り頼むわ」

エギルと共に下に降りると、昨日のボス戦で得たドロップ品などをエギルに買い取ってもらったことにした。数分後、キリトとアスナは降りてきた。

「お、終わったのか」

「ああ。ちよつと〈グランザム〉まで行って話してくる。」

〈グランザム〉は55層主街区。鉄の街と呼ばれ、あるものと言えば…〈血盟騎士団〉本部。

「あの男か…大丈夫なのか？」

「まあ、話してくるだけだよ。…またな。エギル、世話になった。」

そう言つて、キリトはアスナと共に出ていった。俺は思ったことをそのままエギルに聞くことにした。

「…本当に話すだけで済むのかね。」

「さあな。あいつのことだし…ホラ、鑑定終わったぞ。」

「サンキュ。じゃ、またな」

エギルに別れを告げ、今日の攻略どうしようかなあ、と考えていた。

22話 『激突、違和感』

「…何でそうなったんだ？」

75層主街区へコリニアへの転移門前。そこには大きなコロシウムがあるのだが。そこはお祭り騒ぎとなっていた。近場のプレイヤーに聞いた所に寄ると、キリトとヒースクリフのデュエルが行われるらしい。

「まあ、話すだけで終わるとは思ってたけどな…」

「まあまあ。今回は私からの提案なのだ。キリトくんには非はないさ。こうなっていると知らなかったがね」

声に振り返ると、まるで魔法使いかと思わせる、ローブを纏った格好のヒースクリフがそこに立っていた。

「…俺に何か用があるのか？」

「ほう。話が速くて助かる。少しお茶でもどうだい、アキヤくん。少しばかり着くのが早すぎたようだね」

この男の魂胆というのは元々分からないが、今日に限ってはこの男の考えは少しだけ分かるような気がした。

「…いいだろう」

「それでは、その辺りのNPCの喫茶店でも入ろう。なに、お代は私が負担しよう。提案したのは私なのだし」

喫茶店に入ると、中は無人だった。目の前でお祭りなのに喫茶店に入るやつも少ないというところか。

目の前の男は真鍮色の瞳を俺にじつと向けていた。お前から誘ってきたのにお前が話さないのか、と思うのだが。しようがなく俺から切り出すことにした。

「…俺に話、だったか？あらかた予想はつくが、一応聞こうか。何の用だ？」

「ふむ。簡単な話だ。〈血盟騎士団〉へのスカウトと言えば話は速い」

大方の予想通りの質問だが、俺は1つ息を吐いて、小さく聞いた。

「…理由が無ければスカウトとは言えないぜ、ヒースクリフ。理由をお聞かせ願おうか」
「理由か。第1に、単純に強さだ。攻略組の中でもトップクラスと言っている片手剣使いの君が我がギルドに入れば、戦力の増強になるのが1つ。第2に、これからの攻略に向かつて、君という人材を失うのはとても痛い。そこで、我がギルドでパーティーを組んでもらえば安全というのは多少確保できるだろう。パーティーは君の希望をある程度通すつもりだ。」

そう言つて、届いたコーヒー…のようなものをヒースクリフは口に運ぶと、再び俺を

見据えた。返事はどうなんだ、と言わんばかりに。

「なるほど。言ってることはごもつともだが…あいにくギルドに入るつもりはさらさら
ない。」

「ならばさっきの君の言葉を借りよう。断るなら理由が必要。そうではないかね？」

俺の言葉を使つて俺に理由を迫るヒースクリフ。どうにもやはり腹の奥が見えない
ような感覚はあまり好きではない。俺はしようがなく答えることにした。

「…俺がギルドに入るとしたら、確実に起こることがあるくらい分かつてんだろ？」

「ふむ、内部分裂ということかな」

「分かつてんなら話は速い。俺は〈血盟騎士団〉とも〈聖竜連合〉とも仲は良くない。どっ
ちに入つても、俺を擁護するか、批判するかっていうのは出てくる。そんな中にぶちこ
もうつて方が頭おかしいだろ。ギルドの分裂を誘いたいなら話は別だが、そんなギルマ
スがいるギルドには入りたくねえな」

俺の話を聞くと、ヒースクリフはふむ、と再び唸つた。

「なるほど。君の言うこともごもつともだが、それらは推測論でしかない。そうなる
という証拠はどこにもないがね。」

「だったら逆にそうならない証拠でも提出願いたいね。実際に、俺はこの前KOBの団
員に〈ピーター〉って罵られたばかりだ。」

それを聞くと、ヒースクリフは一瞬だけ苦い顔を浮かべた：「ような気がした。次いで、目を閉じてフツと笑みをこぼした。」

「残念だ。しかし、気が変わったらいつでもグランザムに来てくれたまえ。：きて、そろ向かうとするか。キリト君を〈血盟騎士団〉に迎え入れないといけない」

「：なるほど。騒ぎはそれか。俺はあんたとデュエルなんてごめんだけだな。」

そう言うのと、ヒースクリフは再び笑みを浮かべ、俺に言い放った。

「君も参加するかね、アキヤくん。負けたら〈血盟騎士団〉に入ってもらおうが」

「あんたもしつこいな。それに、そのデュエルには俺のメリットが何もない。受ける意味がないね」

そう言うのと、ヒースクリフはコロシアムに向け去っていった。俺も喫茶店を後にすると、近場のKOBの隊員に声をかけた。

「：なあ、キリトはどこだ？」

「お、アキヤはんやないですか。キリトはんやつたら控え室ですわ。言うても関係者以外立ち入り禁止で：」

「：3倍で、どうだ？」

そう言うのと、関西人らしきKOBの隊員はすらすらと場所を答えた。何とも現金なやつだな、と思いつながら教えられた場所に向かうと、キリトはいた。傍らにはアスナもい

る。

「よ、キリト。」

「アキヤ……？お前どうやってここに？」

「3倍払ったら入れてくれた」

その言葉に、キリトとアスナは苦笑いだった。先程の隊員は経理のダイゼンというらしい。

「はあ……団長といい経理といいちゃっかりしてやがるな……」

「団長？」

アスナの疑問に、先程のヒースクリフとの問答を教えると、アスナは驚いたような顔を浮かべた。

「アキヤくんもかあ……もし入ったら私とキリトくとパーティー組めば最強になりそうだね」

「まあ入らないけどな。それに、お前らと組むのかよ……」

理由については自覚がないのか、アスナもキリトも首を傾げたが、それは今は追及する暇もなく、アナウンスが流れた。

「いよいよか……見させてもらうぜ。お前らのデュエル」

「ああ。」

短く答えたキリトに続いて、控え室を後にすると、俺は闘技場の入り口にもたれかかって中を覗く。

キリトとヒースクリフが向き合う。〈二刀流〉と〈神聖剣〉。ユニークスキル同士の闘い。それが今、始まりを告げた。

一進一退の攻防とも呼ぶべきデュエルは徐々に終わりへと近づいていく。双方のHPは段々と減っていき、五割を少し上回る所まで減っていた。

「らあああああ!!」

キリトが吼える。両手の剣を、上下左右からヒースクリフに畳み掛ける。何撃目か分からないが、ヒースクリフの盾が振られ、キリトの剣がヒースクリフに迫る。その瞬間だった。

「…っ!?!」

ヒースクリフの盾がキリトの剣を弾いた。しかし。スピードが凄まじかった。奴の左手が一瞬だけブレて見えるほどに。

「キリト君!!」

アスナが近くから駆け寄っていく。その間も、俺はヒースクリフから目を離さなかった。しかし、真鍮色の瞳は、俺とは目が合うことなく、その姿を向かいの控え室の闇に消えていった。

それから3日。75層の攻略をしていた俺は、久しぶりにエギルの店に立ち寄った。

「おう、アキヤ。キリトとアスナならだいぶ前に出てったぜ。キリトも今日からKOBだだよ」

「あいつがねえ…まあ、問題なきやいいんだが…」

フレンド欄を開くと、どうやらキリトもアスナも55層にいるようだ。55層といえばグランザムがある層だが…

「…フィールドにいる、のか。二人とも。」

「…それがどうかしたか?」

「いや…何でもない」

エギルに買い取り頼む、と言って、何やら気にかかったのは気のせいか、と頭からその思考を断ち切った。

23話『二人のために』

「…と言うわけで頼みたいんだが」

「つつてもなあ…ウチの2階だったら好きに使って良いんだぜ？」

数日経って再びエギルの店に顔を出した。この所顔を出しているのはエギルにもつと顔を出せと叱られたからだ。あの顔で叱られるのはなかなか怖いものがある。

目の前でもつぱら口論中なのは、店主…エギルと、数日振りに会うキリト。

「…何やってんだ？」

「あ、アキヤ。よう。」

いつも通りのキリトの返答だが、何やら以前とは違うような気がした。次の瞬間、俺は違和感に気づいた。

「ああ…なるほど。アスナと結婚おめでとう」

「んなつ、な、何で…」

「…それ。」

俺が指差したのは、キリトの左手。左手の薬指に指輪が嵌まっている。わずかにしか見えなかったが、恐らくは結婚指輪だろう。そして、キリトがここ最近共に過ごしてい

たといえはアスナだろうと結論に至った。

「…んで？新婚がどうしてここにいるんだ？」

「あ、ああ。それなんだけど…ログハウスを買おうと思って、エギルに手持ちのアイテムを売りに来たんだ。」

「ふーん？」

悪い話では無いだろう。しかし、SAOの家というのはまた高価な物であつて、買うには莫大な金…コルが必要なはずなのだが。目の前の店主は渋い顔をしていた。

「あのな、キリト。安く仕入れて安く提供するのがウチのモットーなんだよ。」

「疑わしいもんだな」

「うるせえよ、アキヤ。…ともかくだ。それを買取ることに関しちや文句はねえが、それが売れねえと意味がねえんだよ。でねえと、金が工面できねえ。あんまり高いレアアイテムだと欲しがる人つてのもあんましなあ…」

エギルが申し訳無きそうに頭を掻いた。とはいえ、エギルも商人人であつて、その辺に關しては敏感なのだろう。

「…んじや、俺にくれよ。金は払う」

「はあっ!?!いや、マジで高いぞ…?」

エギルが驚きのにけ反る。どれ、と現在商談中のキリトのウィンドウを見せてもらう

と、それなりの金額は表示されている。確かに安くは無いだらう。

「なるほど…ほれ。」

「…おいおい。」

キリトが思わず唖った。先程表示された額をそのまま打ち込んでトレードウィンドウを向けただけなのだが、金額が金額だけに表情は強ばっている。エギルがマジかよ、と溢しながら声を出した。

「おいおい…正気かよアキヤ？それ払ってオメーが生活出来ないんじゃないやどうしようもないぜ？」

「…悪いけど、俺その倍以上持つてるからな？」

「はああっ!？」

二人が驚くのも分かるが、俺は肩を竦めて応えた。今の装備は大半がモンスタードロップや、トレジャーハント、すなわち宝箱から手に入れたものであり、金はかかってない。以前からそんな装備をつけており、余った装備は売却。

買う面ではポーションを時々、結晶を稀に。あとは剣のメンテ、強化代くらいしか支出がないのだが、買うものも特になく貯まりに貯まっている。

「いや流石に…」

尚も遠慮気味のキリトに、俺は手を軽く振った。持つてけと言わんばかりに。

「んじや結婚祝いも兼ねとく。何だったら上乘せするけど?」

「い、いや、流石にもう充分。アスナにも言っておくから」

それじゃ、とキリトは出ていった。俺はエギルに買い取りの査定を頼むと、カウンターに寄りかかって待つことにした。

「しつかし…さっきの額がありや、自分の家買えるだろ? 買わねえのか?」

「…あいつみたいに相手がいたりや話は別だが、俺一人だったらいらん。それに、あいつには色々と思があるもんでな」

なるほど、と言つて査定に戻つたエギルに、俺は外の様子を見ながら査定を待つことにした。

それから数日。75層の攻略は僅かに遅いが、確実に進んでいた。俺は偶然フィールドで会つた〈風林火山〉と攻略を進めていた。

「…やーつば、あいつらがいねえと進むのも遅えなあ。いや、着実に進んではいるんだけどよ」

「しゃあねえだろ。今まで指揮執つてたアスナもいねえし、俺とほぼ同じペースだったキリトもいねえんじやな。逆に今の戦力にしては速い方だと思ふけどな」

クラインの言葉にそう返すと、クラインは頷きながらもあーあ、と溜め息を吐いた。

「キリの字とアスナさんが結婚ねえ…オレも出逢いねえかなあ…」

「…余計なこと考えてると死ぬぞ。そう言うのは〈圏内〉でやってろ」

俺の言葉に、クラインが更なるため息。そして、〈風林火山〉からもため息。クラインと同じ状況なのか、哀れんでいるのかは定かではないが。

「そーいやあよう、お前エは行ったか？キリトんところ。オレア昨日行ってきたんだけどよ、22層、良いところだったぜ？」

「…へえ。今度行つてみるかな。攻略が少し落ち着いたらな」

とりあえずフィールドボスを倒してからかな、と心の中で考えると、目の前にモンスターが湧出した。75層のフィールドもだいたいぶ攻略したよなあ、と思いつつ、横の野武士を見た。

「さて、戦闘だ。クライン、俺は危なくなったら助太刀に入るから。」

「よし…やるぞお前エら！アキヤの手煩わす前にカタ付けるぞ！」

戦闘を譲った訳は、簡単に言えばレベル差のせいだ。俺は先日92までレベルを上げ、安全マージンよりもかなり上のため、今回はクラインたちの助っ人として参加しているわけだ。

（さて、キリトとアスナの手を煩わす事なく進められればいいんだが…）

新婚の二人を呼び戻すのは忍びない。せめてボスマではゆっくりしてて欲しいもの

だ。

そう思いながら、目の前の戦鬪に目を向けた。どうやら、早々にカタは付きそうだった。

24話『朝露の少女』

キリトとアスナが引越してからおよそ1週間。そろそろ行ってみようかと思つていたときに、俺は逆にキリトに呼び出された。

『相談したいことがある』って言われてもなあ…何かあつたか？』

攻略は順調だし、つい先日フィールドボスも何とか二人抜きでも撃破した。迷宮区の攻略を始めようとしていたときにこのメッセージが届いていたことで、朝も早くから俺は22層のログハウスを目指している訳なのだが。

「……こか」

フレンド位置から推測して、この家で間違いないだろう。武装を解き、ドアをコンコン、とノックする。少し経つと、ドアが開き、アスナが姿を現した。

「よ、アスナ。1週間…かそれくらいぶりか？」

「あ、アキヤくん。急に呼び出しちゃってゴメンね。…あと、家のことは本当にありがとう。」

「気にすんなよ。それで、キリトは？」

アスナに通され、中に入る。リビングらしき所に通されると、そこにキリトはいた。

声をかけようとしたとき、その隣にいる少女に気が付いた。

白いワンピースに、あどけない顔。黒の長髪。しかし、問題は。どうにもこの少女がキリトにも、アスナにも似ているように見えること。

「えーつと…子育てだったら俺に聞かないで欲しいんだけど…?」

「ま、待て待て! 誤解だ! 話を聞いてくれ!」

キリトの話によると、昨日、アスナと森に行った際、この少女が倒れ、保護したことを説明された。その際に気付いた違和感について俺に相談したいらしい。

「…?」

「…なるほど、確かに出ないな」

俺が少女に視線を向けても、あるものが出ない。それは…カーソル。プレイヤーだろうとNPCだろうと、強いてはモンスターさえ出るカーソルが、この子には出ない。少女は不思議そうに俺を見つめるだけだが。

「…おにい、ちゃん、だれ?」

たどたどしい言葉で尋ねる少女に、俺はなるべくゆっくりと話すことにした。

「俺はアキヤ。キリトの、友達だよ」

「あ…きや? きいとの、とも、だち?」

どうにも発音がたどたどしい…というよりは、あまり話せていない。そんな少女を見

て、キリトは優しく話しかけた。

「そう。俺の友達だよ、ユイ。呼びにくかったら好きに呼べばいいさ。」

「ばばの、ともだち…」

キリトをパパ、と呼ぶのは恐らくだが似たような会話をしたのだろう。少女：ユイは俺をじっくりと見たあと、しばし考えたのか、少しだけ俯いてから顔を上げて元気に答えた。

「…にいに!」

「にいに、つて…」

何とか直すように論そうと考えたが、ユイはにいに、と呼んで聞かない。その内に、俺が折れた。

「まあ、いいや。よろしく、ユイ。…キリト、ちよつといいか。アスナ、ここ任せる」

「はーい。ユイちゃん、ママの方においでー」

その場を一旦アスナに任せ、俺はキリトを連れてリビングから出た。二人とも出ると、キリトは俺に聞いた。

「…どう思う、あの子。」

「…最悪一步手前、もしくは通りすぎたって所だろ。カーソルが出ないのはバグとしても…パツと見の容姿は8〜10才くらい…明らかに逆行してる。精神的に何か異常を

きたしたんじゃないか」

俺がそう言うのと、キリトも同様の考えを持つていたようで、何も言わず暗い顔を浮かべ、俯いた。そして、ポツリと溢した。

「俺は今…迷ってる。ユイみたいな子を早く解放してあげるには戦線に戻るのが一番だと思う。でも、だからと言ってユイをここに放置してはいけない…」

「…バーカ」

俺の言葉に、キリトは頭を上げた。俺は腕を組むと、壁に寄っ掛かり外からリビングをチラリと見て言った。

「確かにお前の言うことも間違えてないさ。でも、あの子にとっては今はお前らしか頼る人がいないんだろ。だったら側にいてやれよ。子供つてのは親に甘えたがるんだから。攻略は俺たちに任せとけ。」

「…ああ、分かった。すまんが、そっちは任せる」

ゴツン、と拳を軽くぶつけてからリビングに戻る、ユイは眠ってしまったらしい。何でも、昨日は寝たきりで、今日の朝覚醒したとか。キリトはユイを見ながら言った。

「ひとまずは、はじまりの街に、この子、もしくは親とか兄弟を知ってる人を探しに行こうと思うんだが…」

「ああ。それで問題ないだろ。それは一緒には行けねえかもだけど…」

「問題ないよ。私たちが探すから。」

アスナに悪いな、と断ると、しばらく3人で話し出す。途中でアスナは、ユイをキリトに頼み、すたすと台所に向かう。

「お昼の用意しなくちゃ。アキヤくんも食べてく？」

「あ、いや俺は……」

「まあ食ってつてくれよ。最前線の話も聞きたいし。」

断ろうとした所をキリトに被せられ、俺は言葉を失った。そのまま押し切られ、結局は一緒に食べることになった。

「簡単なサンドイッチだけだねー。味は保証するよ。」

「ああ……そういうや、料理スキルカンストしたんだっけ？」

「そうだよー。よく覚えてるね」

50層のエギルの店であそこまで自慢気に言っていれば覚えてるだろう。と、俺はもうひとつ、ついでに思い出した。

「ああ、じゃあそれで〈チャラ〉でいいよ」

「〈チャラ〉……?」

アスナだけでなく、キリトも考える。しばらく考えているので、俺は当時の本人のセリフを復唱してみる。

「…『ゴハン、何でも幾らでも君たちに奢る。それでチャラ。どう。』…だったかな」

「…あ…もしかして…59層の？言つてよー。何で言わないの？」

「いや、俺も今の今まで忘れてたんだが」

どうやら思い出したようだが、何故か軽く叱られた。そうは言っても、忘れたものを思い出す方が奇跡的なのだが。

「うーん…」

「…お、起きたか。」

キリトがベッドの脇まで行くのを見送る。寝起きでもそこまで不機嫌でないところを見ると、寝起きはいいのだろうか。ユイはキリトに抱えられ、椅子に腰を下ろした。

ユイには恐らく甘めのパイか何かだろう。俺にはキリトと似たようなのサンドイッチが二つ、キリトから渡された。

「…なあ、見てるぞ」

ユイがじーつとキリトの手…というかサンドイッチを見ている。俺の声に気付いたのか、キリトはユイにそれをよくよく見せるように目の前に差し出した。俺は自分の口に運ぶ。

直後、口の中に物凄い違和感を感じた。思わずむせそうになるのを何とか抑え、嘔んで飲み込むが、口と喉にヒリヒリとした感覚が残っている。

「ユイ、これはな。すごく辛いぞ?」

「…確かに、ケホツ…めっちゃくちや辛い」

俺の言葉に、キリトは俺を見て、次いでアスナを見た。アスナはジロツとキリトを見た。

「ちよつと辛めにはしたよ?…キリトくんが間違えたんでしょ。それキリトくんのだよ」

「…お前味覚どうかしてるぞ」

「うっ…すまん。もう半分は貰うから」

キリトの言葉に口をつけていない1つをキリトから貰い、俺はキリトに1つ渡すが、ユイの視線はキリトの手元から動かない。

「うーっ…ばばとにいとおんなじ、からいのがいい…!」

「そうか。そこまでの覚悟なら俺は止めん。何事も経験だ」

キリトはそう言つて、ユイに辛いサンドイッチを差し出した。ユイは一口食べると…難しい顔でモグモグと口を動かして、一言。

「おいしい」

「すげえな…」

感嘆の一言しか出なかった。俺よりも遥かに小さな少女が激辛サンドイッチを難し

い顔とはいえ弱音を吐かず食べていることに。

「にいいにも、おいしい?」

「ああ…うん、美味しいよ」

聞いてきたユイにそう返したものの、内心スゴく否定したかった。キリトが好きな辛さは尋常ではないと言うことを頭に叩き込むと、キリトはユイの頭を撫でていた。

「夕食は激辛フルコースにしような」

「もう！調子に乗らないの！そんなもの作らないからねー」

アスナが怒り、キリトとユイがふふ、と笑う。この時に、俺は。決して血の繋がりも何もないけれど、本物の〈家族〉を見た気がした。

「…悪いな、約束がなければ俺も付き合うんだけど…それに、力にもなれてねえし…」

ログハウスの前で、キリト、アスナ、ユイと別れることにした。俺が一層に行けない理由。それは、昨日エギルに『勘を取り戻しておきたいから攻略付き合ってくれ』と言われたからだ。散々世話になった奴の約束には応えてやりたい、とキリトに伝えると。

「いや、お前のお陰でちよつとは進めそうだよ。こつちこそ攻略任せきりだし……」
「んじや、それはお互いさまってことでいいだろ。」

そう言うのと、俺はキリトの側に立つユイに視線を向けた。丸く大きな目が、俺をじつと見ている。

「にいに、いつちやう……」

「ああ……また会おうぜ、ユイ。パパとママの言うことよく聞いてな。」

もしかしたら、もう会えないかもしれない。もし一層でユイの親なりが見つければ、22層にはもう来ないかもしれないのだ。

しかし、短い間でも、俺を慕ってくれたこの子には。最後だろうと、また会おうと言おう。悲しみを抱えて別れることはしない。いつか、また会えると信じて。

「……じゃあな、頑張れよ——転移、へコルニア」

そう告げて、俺は最前線へと戻る。がんばってね、にいに。と微かに聞こえたような声は、確かに俺の背中を押しつけた気がした。

25話 『75層ボス』

55層へグランザムに訪れたのは理由があつた。ここにいる人物：ヒースクリフに用があるためだ。

この城塞のような〈血盟騎士団〉の中でも大きな扉の部屋の前に立つと、俺は扉を押し開けた。

「…よう」

「…ノックくらいしたまえ、アキヤくん。」

中には一人、ヒースクリフのみが腰かけていた。俺は扉の脇の柱に腕を組んで寄りかかった。

「そいつは失礼。社交辞令とかは抜きで、本題から頼む。予想も多少ついてるしな」

「なるほど。もうちよつとこつちに來たらどうかね？」

「…どうせ聞いているのは俺一人。しかもシステムによつて俺に聞こえないこともないし、外に聞こえることもないだろ？なら、この位置でも充分だ」

そう言うと、ヒースクリフはその真鍮色の瞳を細めて俺を見た。俺がその瞳を片目を瞑つて受け止めると、ヒースクリフは話し始めた。

「偵察隊は5ギルド合同の20人で行った。その結果として得られたものは…ボスの詳細は不明。〈結晶無効化空間〉は74層同様。更に、脱出不能。それが、生き残った偵察隊からの報告だ」

「…何人死んだ」

「半分だ。残念ながら…今回のボスは可能な限りの大部隊で当たることにする。ボス戦への集合は午後一時、75層転移門。…参加を待っているよ」

そう言うと、ヒースクリフは言うことはない、と言うように目を伏せた。30秒ほど互いにそのままだったが、そのあと俺は入ってきたドアから外に出た。

12:45分頃、75層転移門には攻略組が少しずつ集まってきた。俺が転移門に着いたのは今からおおよそ5分前だが、その間にも一人、また一人とその数は増している。

「よう、アキヤ」

「…へえ。こりやまた頼もしい人が来たな」

俺に声をかけたのは、低いバリトンの声の、エギル。彼も攻略組の斧使いではあるのだが、商人としても有名なため、ボス戦に参加するかは分からなかった。

その横に、赤髪の侍が並び立つ。クラインだ。

「よお、二人とも。アキヤは前も一緒だったけどな」

「あれを一緒と呼ぶかは謎だけどな。鉢合わせたといった方が正しいだろ」

74層ボス戦を攻略組で体験したのは俺、キリト、アスナ、クラインの4名。〈風林火山〉の面々は〈軍〉の救援に当たっていたので、実質4人だったと言える。

「お前さんが参加してくれるだけでオレみたいな奴はだいたい心強いんだ。頼りにしてるぜ。」

「おうおう、言ってくれるじゃねえか、エギルよう。こっちもお前エみたいなタンクがいてくれると心強いぜ」

互いに褒め称えるクラインとエギル。この二人ともなかなか長い付き合いになったものだ。

そんな感慨に浸っていると、転移門から向かってくる影が2つあった。

「…来たか」

俺の声に、エギルとクラインがそちらを向いた。クラインがつかつかと歩み寄ってよう、と肩に手を回す。回された人物…キリトは意外そうな顔をしていたが。

「何だ、お前らも参加するのか」

「何だってことはないだろう。今回は苦戦しそうだって言うから商売投げ出して加勢に来たんじゃねえか。この無私無欲の精神を…」

エギルが言うと、キリトは大柄なエギルの肩に手を置いて答えた。

「無私の精神は分かった。じゃあお前は戦利品の分配から除外していいのな」

「いや、そ、それはだなあ……」

エギルが困ったように声を上げると、辺りに少し笑いが広がった。キリトは俺を見ると、軽く頷いた。俺も軽く頷き返す。

その時、転移門に新しいエフェクトが発生し、それを機に再び空気が引き締まる。出てきた人物はヒースクリフ含め〈血盟騎士団〉数名。ヒースクリフは辺りを一瞥すると、大きく声を上げた。

「欠員はないようだな。よく集まってくれた。厳しい戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。——解放のために！」

その声に、辺りのプレイヤーはときの声を上げる。ヒースクリフという男の強さか力リスマ性か、反するプレイヤーは一人もいない。

その後、キリトに一言ほど話したヒースクリフは、集団に向け、片手を挙げた。

「では、出発しよう。目標のボスモンスター直前の場所までコリドーを開く」

コリドー・オープン、というヒースクリフの言葉に、近くに青い光の渦が現れる。最初にヒースクリフが通り、その後KOBの隊員が続いた。辺りの人が少なくなってきた辺りで、俺もコリドーをくぐった。

迷宮区は中々に暗い。攻略の際にも思ったが、この層の迷宮区は他の層とは若干異なり、黒曜石のような黒い石で随所作られており、空気も他より湿っている。

「…よっ、と」

近場の柱に背中を預け、腕を組んで目を閉じる。深呼吸し、呼吸を整えると、うつすらと目を開ける。

辺りではプレイヤーがそれぞれ装備の確認をしていた。しばらく経つと、十字を象つた盾を持ったヒースクリフが再び集団に向かって声を発した。

「皆、準備はいいかな。今回、ボスの攻撃パターンに関して情報は情報がない。基本的にはKOBが前衛で攻撃を食い止めるので、攻撃パターンを可能な限り見切つて、柔軟に攻撃して欲しい。では——行こうか」

ヒースクリフが大扉に手をかける。あの奥にボスがいるのだろう。隣を見れば、いつものまにかクライン、エギル、キリトが見えた。

「死ぬなよ」

「へっ、お前こそ」

「今日の戦利品で一儲けするまではくたばる気はないぜ」

3人のやり取りに、軽く笑みを浮かべる。何ともふてぶてしいやり取りは彼らならでは。前を向くと、隣からキリトの声が聞こえた。

「アキヤ…頼むぜ」

「お互い様にな」

前を向いたまま答えると、もう声は飛んでこなかった。前で大扉が重々しい響きと共に開き出す。俺は背中から愛剣を抜き取った。

「——戦闘、開始！」

ヒースクリフのその声と共に、攻略組がボス部屋へとなだれ込む。クォーター・ポイントの長い戦いが、今幕を開けた。

中は大きな半球状の部屋だった。後ろで大きな音と共に扉が閉まると、数秒沈黙が訪れる。

(…どこかだ…どこかにか…)

ボスが姿を現さない。その事に、皆が辺りを見渡す。神経を研ぎ澄まし、視覚、聴覚をフルに使って探していると、カツン、という音が聞こえた。

「上よー」

アスナの声に、上を見上げた。ドームとも言える半球の天井——そこに、奴はいた。

全長は目測で10メートルほど。百足のような体だが、それらはすべて骨。先端には頭蓋骨。その近くにあるのは…形状からして鎌か。

ボスの名前が表示される。〈The Skullreaper〉——骸骨の、刈り手。その時、ボスが足を開くのが見えた。

「——落ちてくるぞ！」

「固まるな！距離を取れ！」

俺の声に、ヒースクリフが指示を出す。落ちてきたボスは、近場のパーティーに狙いを定めたようだ。僅かに遅れた3人に鎌を振りかぶる。

「こっちだ！早く！」

キリトが叫び、3人も走り出す。ボスが落ちた衝撃でたたらを踏んだらしく、ボスの鎌が3人を襲った。HPはグリーンからイエロー…レッド——そして、消えた。

(…嘘だろ…)

声にならなかった。攻略組の、ハイレベルプレイヤーが、たった一撃で、死んだのだ。その光景に、全員が動けなかった。骸骨の百足は近くのパーティーに鎌を振りかぶる。

「うわあああ——！」

しかし、今回は鎌は止まった。飛び込んだヒースクリフの盾によつて。ガツシリと受け止めた盾はびくともしない。流石の防御力としか言いようがないだろう。

もう一方の鎌が振り上げられる。まずい、と思った瞬間、キリトが飛び出していた。両手の剣で鎌を受け止めると、そこに合流したアスナと共に鎌を弾き返す。

「大鎌は俺たちが食い止める！みんなは側面から攻撃してくれ！」

キリトの声に、俺は側面に向けて駆け出す。側面に張り付くと、ソードスキルを発動。片手剣ソードスキル〈バーチカル・スクエア〉。四連撃を叩き込むと、ボスのHPはほんの僅かに減った。

「アキヤー！」

「クライン、エギル！スイッチー！」

後ろに迫っていた二人と立ち位置が変わると、二人が今度は攻撃を叩き込む。攻撃に特化した武器だけあって、ボスのHPは目に見えて減った。

その時、悲鳴が聞こえた。その方向を見れば、ボスの尻尾——槍状の骨が数人を薙ぎ払われるのが見えた。

「…アキヤー！頼むー！」

「無茶言うぜ…ホントによー！」

キリトの言葉に悪態を付きながらも、側面から後方へ。振り回されている槍状の尻尾を弾くと、重めの衝撃に顔をしかめる。

しかし、鎌と違って、そこまでダメージが大きい訳でも無さそうだ。これなら俺でも弾けるだろう。

「こっちは任せろー！」

短く叫ぶと、攻略組の面々が次々に側面から攻撃を開始する。ボスが叫び、時折破砕音が響く中、死闘とも呼ぶべき戦いは続いていった。

26話【最強の正体】

75層のボス戦を表すならば、まさに死闘だった。一時間間に甲高い破裂音は何度響いたかわからない。最後にボスが倒れても、誰も歓声を上げず、ただ倒れ伏すだけが殆どだった。俺も地面にしゃがみ、肩で息をしていた。

「何人、やられた…?」

クラインの声に、しばらく誰も返さなかった。その後少し間が空いてから、キリトが答えた。

「——十三人、死んだ」

うそだろ、とエギルがこぼす。全員が似たような反応だった。座つたり、倒れたりして、ボス部屋から誰一人動かなかった。——一人を除いては。俺は、その人物に視線を向ける。

ヒースクリフ。あの骸骨の鎌を、最後まで受け止めた人物。そのHPはギリギリギリを保っている。あれだけの攻撃を受け止めてなお、膝をつくことなく立ち、周りのKOBメンバーを労っている様子が見えた。

(すげえな…)

〈神聖剣〉の防御力がどれくらいかは分からないが、最後まで前線に居座り、なおグリーン
の防御力。更には、死闘が終わっても尚立っていられ、周りを労う余裕。どこからそ
んな余裕が生まれるのか。なんで…そう考えて…止まった。

何故、と思えば思うほど、その理由に説明がつかない。これまでの言動、行動…それ
らが頭の中で疑念を生む。俺達…キリトやアスナたちと違う何か。それを最後に決定
付けたもの、それは、先日のキリトとのデュエル。しかし、それなら…

(キリトも…気付いてるはず…)

視線を動かしてキリトを見る。そして、キリトもこちらを見ていた。そういえば、あ
のときのデュエルも今くらいにHPだった。なら…!

俺とキリトが地面を蹴ったのはほぼ同時だった。俺もキリトもいたのはヒースクリ
フの側面。そして、互いに選んだソードスキルはヘレイジスパイク。

(——なら、俺はここだ!)

ヒースクリフの盾が迫る。俺は、敢えてそこに打ち込んだ。元々盾が破れるなんて
思っていない。俺の攻撃を防ぐ位置に盾があるなら、キリトの攻撃を塞ぐことは実質不可
能だ。

ガイイイイン!!と大きな音を立てて、俺はノックバックした。そのおかげか、視界
の端に見えた。ヒースクリフの前で散る、キリトの剣が光らせる紫色の光。そして、へー

m m o r t a l O b j e c t のシステムメッセージ。

「キリトくん、アキヤくん！何を——、…システムの不死…？…って、どういうことですか、団長…？」

アスナが下がったキリトの隣に並ぶ。俺が体制を立て直して、話し出す。

「この世界で、不死属性を持つのはNPC。それ以外にはいないと思つてたよ。システム管理者でもないとな。そんなやついないと思つてたけど…一人、いたよな」

その続きを、自然にキリトが繋ぐ。

「この世界に来てからずっと疑問に思つていたことがあつた…あいつは今、どこからこの世界を調整してるんだろう、ってな。でも俺は単純な心理を忘れてたよ。どんな子供でも知ってることさ」

俺とキリトの視線が一瞬交錯する。俺が先に言葉を発した。

「他人のやつてるRPGを傍から眺めるほどつまらないことはない、だろう？」

「ああ、そうだろう、茅場晶彦」

辺りにしんとした空気が張り詰める。そんな静寂を、目の前の男はいつもと変わらぬい声で言った。

「…何故気付いたのか参考までに教えてもらえるかな…？」

ヒースクリフが俺を見る。俺は皮肉を込めて言い放つた。

「決定的なのはキリトとのデュエル、最後の交錯のときのモーション。あんたの言葉を借りるなら、タンクであの速さをするのであれば、レベルが200あっても足りないね」
「やはりそうか。あれは私にとつても痛恨だった。キリトくんの動きに圧倒されてシステムのオーバーアシストを使ってしまった」

少しの間。そして、ヒースクリフは：笑った。苦笑の表情を浮かべながら、堂々と話した。

「予定では95層に達するまで明かさないつもりだったのだがな。——確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上層で君たちを待つはずだったこのゲームの最終ボスでもある」

茅場の宣言に、キリトは堂々と応える。

「趣味がいいとは言えないぜ。最強のプレイヤーが一転最悪のラスボスか」

「なかなかいいシナリオだろう？まさかたかが四分の三地点で看破されてしまうとはな」

そこで浮かべたヒースクリフの笑みに、俺はどこかで見覚えがあった。そうだ、かつて現実世界で：テレビで見た茅場のインタビュウの時に浮かべた、薄い笑み。その笑みを浮かべながら、茅場は続けた。

「最終的に私の前に立つのはキリトくん、君だと予想していた。全十種存在するユニー

クスキルのうち、〈二刀流〉スキルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つものに与えられ、その者が魔王に対する勇者の役割を担うはずだった。が……

そこで、茅場の瞳が俺に向いた。真鍮色の瞳に見据えられると、俺はじり、と下がりたい気持ちになったが、それを何とか堪える。

「アキヤくんの存在は本当にイレギュラーでしかなかった、キリトくんとのコンビネーションや立ち回りは目を見張るものでしかなかった。もしユニークスキルを取っていたらもしかしたら二人が最上層で今のように並んでいたかもしれない」

淡々と話す茅場。その後ろで、一人の男が動いた。確か血盟騎士団の幹部だったか。大きな斧槍を握ると。

「貴様が……貴様が……俺達の忠誠——希望を……よくも……よくも——ッ!!」

絶叫と共に地を蹴った。全員が、それを見ていた。男と、茅場を。だから、茅場が左手を振った、ということに、俺は理解が一瞬追いつかなかった。

左手に出現したウィンドウを、茅場は操作する。すると、男は音を立てて、地面に崩れた。

（〈麻痺〉……!?!）

男のHPバーの横にあるのは、麻痺状態を示すアイコン。茅場が操作するたび、辺りに麻痺状態のプレイヤーが増えていく。アスナも倒れ、残ったのは俺とキリトだけに

なった。

「…どうするんだ？この場の全員殺して隠蔽するのか？」

「まさか。そんな理不尽な真似はしないさ。…こうなつては致し方ない。予定を早めて、私は最上階の《紅玉宮》にて君たちの訪れを待つことにするよ。90層以上の強力なモンスター群に対抗し得る力として育ててきた血盟騎士団、攻略組プレイヤーの諸君を途中で放り出すのは不本意だが、何、君たちならきつとたどり着けるさ。だが、その前に…」

茅場は俺達を見た。剣を構える俺と、倒れたアスナを

支えるキリトを交互に見ると、右手の剣を床に突き立て、左の盾をガシャリと鳴らす。その音だけが、広いボス部屋に響いた。

「君たちには私の正体を看破したりワード…報奨を与えなくてはな。チャンスを上げよう。キリトくんは〈勇者〉として私の相手を、アキヤくんには100層のボス相当の…つまり私と同等に近い相手と戦うチャンス。無論、君たちプレイヤーと同様の条件だ。二人が勝てば…厳密にはキリトくんが勝てば、だが。ゲームはクリアされ、全プレイヤーがログアウトできる。…どうかな？」

その言葉に、キリトの奥にいるアスナの声が聞こえた。

「だめよ！キリト君、アキヤ君…！あなた達を排除する気だわ…今は…今は引きましよ

う……！」

アスナの言っていることはもつともだ。このチャンスはハイリスクハイリターン。成功すればそれで終わり、だが。失敗……つまり、キリトが負けるとするならば……攻略組は致命的な戦力不足に陥ることは必死だ。

ユニークスキルを持っている二人の内片方はラスボスへと変貌し、もう一人も消えるとなれば……攻略のペースは凄まじく落ちるのは目に見えているし、何より……最上階までたどり着けるかも怪しくなる。

だが、ここで決めるのは俺ではないだろう。俺は一步引くことで、決定権を譲ることを示した。隣の、黒の剣士に。

「ふざけるな……。いいだろう、決着をつけよう」

「……だろうと思ったぜ」

再度剣を構える。キリトと並び、茅場に剣を向けると、茅場は左手を動かした。

「よろしい。では、アキヤ君には相応しい舞台に移動して……」

その手がウィンドウに触れるか触れないか、と言うとき。俺は見た。視界にかかった、赤黒いノイズを。そのノイズが俺の剣に触れると……剣が、ポリゴンへと爆散した。

「何だと……？」

その時の茅場の顔は驚愕に満ちていた。しかし、振った指は直前で止まることを許さ

ず、
ウインドウをタップした。
その瞬間、
俺の視界を、
青い光が塗り潰した。